

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：食物栄養学科

資格：教授

氏名：義澤 克彦

研究分野	研究内容のキーワード
食品安全学、医薬品安全学、毒性学、毒性病理学、環境科学	視覚毒性、肝臓毒性、乳腺毒性、皮膚毒性
学位	最終学歴
医学博士	鳥取大学大学院農学研究科獣医学専攻

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. マルホ柁講演会「皮膚の構造と毒性変化」（画像データ・映像を用いた講義）	2016年7月23日	皮膚毒性について各種実験動物を用いた医薬品の毒性研究の結果を、どのようにヒトへ外挿すべきかの注意点について、ヒト臨床での画像データや映像を見ながら概説し、現在市場にある医薬品あるいは臨床開発中の情報を提供した。
2. SD育成講座：非病理学者のための病理学講義（画像データを用いた講義）	2014年7月2016年7月	日本トキシコロジー学会主催講習会において、「細胞傷害・細胞死・循環障害・炎症・皮膚毒性」の講義を担当した。その際、各種薬物誘発病変・そのメカニズム・毒性評価における注意点について図表を用いて説明し受講者の理解を深めた。セミナー後のアンケートでは毎年講義を継続してほしいとの意見を多数いただいた。
3. 小野薬品工業講演会「網膜毒性のメカニズムとリスク評価」（画像データ・映像を用いた講義）	2014年11月9日	網膜毒性について各種実験動物を用いた医薬品の毒性研究の結果を、どのようにヒトへ外挿すべきかの注意点について、ヒト臨床での画像データや映像を見ながら概説し、現在市場にある医薬品あるいは臨床開発中の情報を提供した。
4. 第12回日本毒性病理学会教育セミナー（画像データを用いた講義）	2013年11月6日	「実験動物の乳腺・特殊脂肪腺」について、正常構造、自然発生病変、化学物質による誘発病変を、臨床から病理まで図表・画像データを用いて解説し、医薬品開発上のポイントについて講演した。
5. 日本食品化学学会セミナー（画像データを用いた講義）	2010年6月9日	「実験動物モデルを用いたヒト眼科疾患の予防・治療法開発への応用」に関して、各種食品由来物質の実験例、疫学、臨床試験結果などを概説し、各種疾患における食の重要性を強調した。
6. 第10回日本毒性病理学会教育セミナー（画像データを用いた講義）	2009年11月7日	「実験動物の眼毒性」について、正常構造、自然発生病変、化学物質による誘発病変を、臨床から病理まで図表を用いて解説した。また、様々な眼病態モデルの特徴に関しても概説し、医薬品開発上のポイントについて講義した。
7. 日本トキシコロジー学会主催講習会（画像データを用いた講義）	2006年8月2010年8月	日本トキシコロジー学会主催講習会において、「呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性」の講義を担当した。その際、各種薬物誘発病変・そのメカニズム・毒性評価における注意点について図表・画像データを用いて説明し、トキシコロジスト資格試験受験者の理解を深めた。
8. 日本毒性病理学会スライドコンファレンス「皮膚・乳腺」（画像データを用いた講義）	2001年1月26日	日本毒性病理学会スライドコンファレンス「皮膚・乳腺」において、皮膚の非腫瘍性病変の講義を担当した。その際、実際に経験した各種薬物誘発病変の特徴に加え、そのメカニズム・毒性評価における注意点について画像データを用いて説明し、受講者（医薬品毒性担当者）の理解を深めた。
2 作成した教科書、教材		
1. 「日本毒性学会生涯教育講習会」（非病理学者のための病理学講義）	2016年7月2日	病理学総論の中の「皮膚の構造と毒性変化」を中心に、基本的な用語・診断基準・メカニズムについて図表を用いながら解説した。病理学を学生時代に学んだ経験のある毒性担当者は必ずしも多いとは言えないが現状であり、現場の毒性担当者が理解しやすいように、ヒトおよび実験動物の病態について画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
2. 「日本毒性学会生涯教育講習会」（非病理学者のための病理学講義）	2015年6月28日	病理学総論の中の「循環障害・炎症」を中心に、基本的な用語・診断基準・メカニズムについて図表を用いながら解説した。病理学を学生時代に学んだ経験のある毒性担当者は必ずしも多いとは言えないが現状であり、現場の毒性担当者が理解しやすいように、ヒトおよび実験動物の病態について画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
3. 「日本毒性学会生涯教育講習会」（非病理学者のための病理学講義）	2014年7月5日	病理学総論の中の「細胞傷害と細胞死」を中心に、基本的な用語・診断基準・メカニズムについて図表を用いながら解説した。病理学を学生時代に学んだ経験のある毒性担当者は必ずしも多いとは言えないが現状であり、現場の毒性担当者が理解しやすいように、ヒトおよび実験動物の病態について画像データを豊富に盛り込みながら解説した。

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
4. 「日本トキシコロジー学会主催講習会」(呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性)	2010年8月3日	薬剤の全身投与による呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性について、毒性専門家認定試験を受験する方々を対象にテキストを作成した。これらの臓器の正常構造・機能をはじめ、各種臨床検査方法、自然発生病変、薬剤誘発病変とメカニズム、薬剤開発における注意点などを、現場の毒性担当者が理解しやすいように、画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
5. 「日本トキシコロジー学会主催講習会」(呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性)	2009年8月3日	薬剤の全身投与による呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性について、毒性専門家認定試験を受験する方々を対象にテキストを作成した。これらの臓器の正常構造・機能をはじめ、各種臨床検査方法、自然発生病変、薬剤誘発病変とメカニズム、薬剤開発における注意点などを、現場の毒性担当者が理解しやすいように、画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
6. 「日本トキシコロジー学会主催講習会」(呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性)	2008年8月3日	薬剤の全身投与による呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性について、毒性専門家認定試験を受験する方々を対象にテキストを作成した。これらの臓器の正常構造・機能をはじめ、各種臨床検査方法、自然発生病変、薬剤誘発病変とメカニズム、薬剤開発における注意点などを、現場の毒性担当者が理解しやすいように、画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
7. 「日本トキシコロジー学会主催講習会」(呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性)	2007年8月3日	薬剤の全身投与による呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性について、毒性専門家認定試験を受験する方々を対象にテキストを作成した。これらの臓器の正常構造・機能をはじめ、各種臨床検査方法、自然発生病変、薬剤誘発病変とメカニズム、薬剤開発における注意点などを、現場の毒性担当者が理解しやすいように、画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
8. 「日本トキシコロジー学会主催講習会」(呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性)	2006年8月3日	薬剤の全身投与による呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性について、毒性専門家認定試験を受験する方々を対象にテキストを作成した。これらの臓器の正常構造・機能をはじめ、各種臨床検査方法、自然発生病変、薬剤誘発病変とメカニズム、薬剤開発における注意点などを、現場の毒性担当者が理解しやすいように、画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
9. 「日本毒性病理学会スライドコンファレンスー皮膚・乳腺ー」(皮膚の非腫瘍性病変)	2001年1月24日	薬剤の全身投与による皮膚毒性の発現は稀である。そこで、このテキストでは実験動物における皮膚の基本構造物、自然発生病変および薬剤誘発性病変について画像データを用いて診断ポイントを解説した。薬剤誘発性病変は可能な限りそのメカニズムを説明した。さらにヒトでの病態について比較した。
10. 「日本毒性病理学会スライドカンファレンスー耳と眼ー」(眼の薬物誘発病変)	1998年2月2日	眼球毒性は経験することの少ない副作用であることから、これらの情報は実験動物を使用した毒性評価担当者にとっては貴重な情報源である。私は眼球毒性評価の専門家として、実験動物(ラット・マウス・イヌ・サル)を用いた眼球の薬物誘発病変について、各種毒性病変の臨床・病理などの画像データを用いて説明し、その機能障害の種類についても言及した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. マルホ株式会社 学術講演会。「皮膚の構造と毒性変化」	2016年7月22日	皮膚毒性について各種実験動物を用いた医薬品の毒性研究の結果を、どのようにヒトへ外挿すべきかの注意点について、ヒト臨床での画像データや映像を見ながら、概説し、現在市場にある医薬品あるいは臨床開発中の情報を提供した。
2. 実験病理組織技術研究会. 教育講演。「乳腺・特殊皮脂腺の毒性病理」	2016年7月1日	病理標本作製者の基礎教育の一環として、乳腺や特殊皮脂腺の構造・機能・毒性変化について、ヒトの情報を含めて概説した。
3. 日本毒性学会. SEND(非臨床試験電子データ標準化)ーその規制動向と実装に向けた企業、CRO、ITベンダーの取り組みー「INHANDの活動とSENDの関係について」	2016年6月29日	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の活動状況と米国FDAとの協体制度についてのupdate報告である。
4. 日本農業株式会社 学術講演会。「眼球毒性のメカニズムとリスク評価」	2016年5月24日	実験動物の眼球毒性について、正常構造、自然発生病変、化学物質による誘発病変を、臨床から病理まで図表を用いて解説した。また、様々な眼球疾患病態モデルの特徴に関しても概説し、農業・医薬品開発上のポイントについて講演した。
5. 日本毒性学会. SD育成講座: 非病理学者のための病理学講義「循環障害・炎症」	2015年6月30日	毒性試験にたずさわる研究者に対して、卒後教育の一環として、「循環障害・炎症」に関して、最新情報を盛り込んで講演を行った。
6. 日本毒性学会. 日本毒性病理学会協賛セミナー: 毒性試験における病理ピアレビューの最近の話題(各国の毒性病理学会での考え方と見解)	2015年6月28日	昨年に病理ピアレビューに関するガイダンスがOECDから発行され、その内容に対する各国のコンセンサス・問題点の対応について解説した。
7. 日本毒性学会. 日本毒性病理学会協賛セミナー: 毒性試験における病理ピアレビューの最近の話題(病理ピアレビューの概要とGLP 規制の経過)	2015年6月28日	日本毒性病理学会がこれまで取り組んできた病理ピアレビューに関する内容について解説した。
8. 日本毒性学会. 日本毒性病理学会協賛セミナー: 毒性試験における病理ピアレビューの最近の話	2015年6月28日	昨年に病理ピアレビューに関するガイダンスがOECDから発行され、その内容に対する問題点について提示した。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
題 (OECD 病理ピアレビューガイドラインの解説)		
9. 浜松毒性試験フォーラム, 「INHANDの活動とSENDとの密接な関係性について」	2015年10月6日	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の活動状況と米国FDAとの協力体制についてのupsate報告である。
10. 日本毒性学会. 医薬品・化学物質開発において毒性病理学が果たす役割: 毒性病理学の国際動向について	2014年7月1日	日本毒性病理学会の立場から、医薬品・化学物質開発における毒性病理学者の役割について、国際的な見解を発表した。
11. 小野薬品工業株式会社 学術講演会. 「網膜毒性のメカニズムとリスク評価」	2014年11月6日	実験動物の網膜毒性について、正常構造、自然発生病変、化学物質による誘発病変を、臨床から病理まで図表を用いて解説した。また、様々な眼球疾患病態モデルの特徴に関しても概説し、医薬品開発上のポイントについて講演した。
12. 浜松毒性試験フォーラム, Pathology Working Groups (PWG)の実際と具体的な運用方法	2014年10月6日	医薬品・化学物質の毒性試験では、毒性病理学者の診断が開発上のキーポイントとなることが多く、毒性病理学者の経験・実力に頼らざるを得ないところがある。稀に、その診断・判断が誤っていることもあり、その場合にはPathology Working Groups (PWG)を結成して、再診断・判断を実施することになる。具体的な事例を提示し解説した。
13. 日本毒性病理学会主催第14回教育セミナー. INHAND解説: 乳腺・ジンバル腺・包皮腺・陰核腺・肛門周囲腺.	2013年11月6日	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の乳腺グループの代表として、世界で統一した病理所見用語とクライテリアについて講演した。ヒト、げっ歯類、イヌ、サルを含めて、比較病理学的な視点からの講演である。
14. 日本毒性病理学会. INHAND進捗状況「乳腺・ジンバル腺・包皮腺・陰核腺」	2011年1月29日	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の乳腺グループの代表として、世界で統一した病理所見用語とクライテリアについて講演した。日本毒性病理学会からの依頼講演である。
15. 日本毒性病理学会第23回スライドカンファレンス. 眼とその付属器および耳の解剖ならびに毒性変化.	2011年1月28日	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の感覚器グループの代表として、世界で統一した病理所見用語とクライテリアについて講演した。日本毒性病理学会からの依頼講演である。
16. 日本食品化学学会. 動物モデルを用いたヒト眼科疾患の予防・治療法開発への応用.	2010年6月5日	ヒト眼科疾患、特に網膜色素変性症と加齢黄斑変性症の疫学・症状・治療について総括した。さらに、これらの疾患の予防に寄与すると考えられる食品由来抗酸化物質について、モデル動物での有効性と疫学データや臨床試験データを紹介し、モデル動物での薬効評価の有用性・必要性について示した。日本食品化学学会からの依頼講演である。
17. 2009年度「知の市場」. 毒性評価とその概要 「ダイオキシンの毒性」	2009年12月5日	ダイオキシン化合物についての全般的な情報に加え、NTPで実施されたTCDD, PCB126, PeCDFのラット癌原性試験結果と、これまでのヒトの疫学データを比較した。招待講演である。
18. 日本毒性病理学会教育セミナー. 眼毒性(網膜毒性)発症における分子生物学的変化.	2009年11月8日	「実験動物の眼毒性」について、正常構造、自然発生病変、化学物質による誘発病変を、臨床から病理まで図表を用いて解説した。また、様々な眼球疾患病態モデルの特徴に関しても概説し、医薬品開発上のポイントについて講演した。日本毒性病理学会からの招待講演である。
19. 日本毒性病理学会. Toxicologic Pathology Aspects of Chemically Induced Cardiovascular Toxicity, as Seen in National Toxicity Program (NTP) Studies.	2009年1月30日	NTP試験でこれまでに観察された化学物質誘発心臓・血管系毒性に関する講演である。日本毒性病理学会からの招待講演である。
20. 日本毒性病理学会スライドカンファレンスー皮膚・乳腺ー (皮膚の非腫瘍性病変).	2001年1月26日	薬剤の全身投与による皮膚毒性の発現は稀である。実験動物における皮膚の基本構造病変、自然発生病変および薬剤誘発性病変について画像データを用いて診断ポイントを解説した。薬剤誘発性病変は可能な限りそのメカニズムを説明した。さらにヒトでの病態について比較した。日本毒性病理学会からの招待講演である。
21. 日本毒性病理学会スライドカンファレンス「眼と耳」: 眼の薬物誘発病変.	1998年2月1日	眼球毒性は経験することの少ない副作用であることから、これらの情報は実験動物を使用した毒性評価担当者にとっては貴重な情報源である。実験動物(ラット・マウス・イヌ・サル)を用いた眼球の薬物誘発病変について、各種毒性病変の臨床・病理などの画像データを用いて説明し、その機能障害の種類についても言及した。
4 その他		
1. 日本毒性病理学会 Journal of Toxicologic Pathology (JTP) 学術賞 JTP症例報告賞	2015年1月	
2. 第5回和田喜代子賞 優秀業績賞 (関西医科大学)	2014年5月	
3. 平成25年度教員評価優秀賞 (関西医科大学)	2014年3月31日	関西医科大学教員評価委員会により、教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献の領域において評価され、平成23年度の優秀賞を受賞した (100点中89点の成績)
4. 平成24年度教員評価優秀賞 (関西医科大学)	2013年3月31日	関西医科大学教員評価委員会により、教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献の領域において評価され、平成23年度の優秀賞を受賞した (100点中84点の成績) .
5. 日本毒性病理学会 Journal of Toxicologic Path	2013年2月	

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
ology (JTP) 学術賞 JTP最優秀論文賞		
6. 実験動物飼育共同施設委員会委員	2012年4月1日2017年3月31日	関西医科大学実験動物施設の委員として、実験動物（ラット・マウス）の取り扱い・飼育・実験方法・解剖などを、大学院生を中心に指導している。また、獣医師・獣医病理学者として、実験動物の検疫業務の一部（解剖・病理検査）を実験動物施設担当者に指導していた。
7. 平成23年度教員評価優秀賞（関西医科大学）	2012年3月31日	関西医科大学教員評価委員会により、教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献の領域において評価され、平成23年度の優秀賞を受賞した（100点中80点の成績）。
8. (財)食品農医薬品安全性評価センター 望月喜多司記念賞 奨励賞	2005年3月	
9. 第130回日本獣医学会学術集会 プレナリーセッション賞	2000年10月	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. International Academy of Toxicologic Pathology, Fellow	2010年6月1日	日米欧で毒性病理評価を担当するために、毒性病理学専門家の国際免許状を取得した。
2. 日本毒性学会認定トキシコロジスト	2002年10月1日	医薬品・化学物質の毒性評価における日本での専門家資格を取得した。
3. 博士（医学）	2000年8月	
4. 一般毒物劇物取扱者	1997年8月1日	化学物質の基礎知識とヒトでの副作用を理解するために、取扱に関する国家資格を取得した。
5. 危険物取扱免状（乙種・甲種）	1997年2月1日	有機溶媒の基礎知識とヒトでの副作用を理解するために、取扱に関する国家資格を取得した。
6. 日本毒性病理学会認定毒性病理学専門家	1996年4月1日	医薬品・化学物質の毒性病理評価における日本での専門家資格を取得した。
7. 日本獣医病理学専門家協会会員	1994年4月1日	実験動物学を含めた動物病理評価における日本での専門家資格を取得した。
8. 獣医師免許	1989年4月1日	動物医療の国家資格を取得した。
9. 高等学校教諭二級普通免許状(理科)	1987年4月1日	理科（生物）の教員免許状を鳥取県教育委員会から取得した。

2 特許等		
--------------	--	--

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 鳥取大学農学部獣医外科学教室との共同研究（岡本教授）	2016年4月～現在	「キチン・キトサンオリゴ糖を用いた網膜色素変性症動物モデルでの新規治療法の確立」について実施中である。
2. 静岡大学農学部細胞生物学教室との共同研究（茶山准教授）	2013年4月～現在	「食品由来抗酸化物質（緑茶抽出物）を用いた網膜色素変性症動物モデルでの新規治療法の確立」について実施中である。
3. サントリーウェルネス株式会社との共同研究	2012年4月～現在	「アラキドン酸及びミド酸によるMNU 誘発網膜色素変性症動物モデルの病態制御とその分子機構」について実施中である。
4. 甲子園大学栄養学部との共同研究（ゆり教授）	2016年4月～現在	「キチン・キトサンオリゴ糖を用いた網膜色素変性症動物モデルでの新規治療法の確立」について実施中である。
5. 伊藤園(株)との共同研究	2013年4月～現在	「食品由来抗酸化物質（緑茶抽出物）を用いた網膜色素変性症動物モデルでの新規治療法の確立」について実施中である。
6. 富山大学医学部公衆衛生学講座との共同研究（浜崎准教授）	2012年4月～現在	「アラキドン酸及びミド酸によるMNU 誘発網膜色素変性症動物モデルの病態制御とその分子機構」について実施中である。

4 その他		
1. 米国国立 環境健康科学研究所 (National Institutes of Health / National Institute of Environmental Health Sciences)客員研究員	2004年2月20日2005年3月30日	客員研究員として、ダイオキシンの毒性・発癌機構研究、カバカバ（抗不安作用を有するサプリメント）の肝臓毒性機構研究、化学物質誘発の心臓血栓症発生機構研究に従事した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Animal Models for the Study of Human Disease (N-Methyl-N-nitrosourea animal models for retinitis pigmentosa, In: Animal Models for the Study of Human Disease), 2nd edition	共	2017年7月1日	Elsevier, Academic Press	著者：義澤克彦, 榎本祐子, 桑田満喜, 螺良愛郎 ページ：117-144 ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の簡単に確実な動物モデルとして、ニトロン尿素誘発のラット・マウス網膜変性症モデルを紹介した。さらに、それを

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
2. 新毒性病理学	共	2017年3月	西村書店	用いたいくつかの病態抑制実験例（カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤、DHA、緑茶抽出物、クルクミン、アラキドン酸）について解説した。 著者：義澤克彦 実験動物の毒性病理学テキストの改訂版が来年に発行され、内容が一新されている。その一部のチャプター（眼球・付属器）を責任執筆した。記載内容はラットのみならず、マウス、イヌ、ウサギ、サル、ヒトにも言及し、比較組織学・毒性病理学的な内容となっている。多数の画像データが掲載されたテキストであり、実験動物を扱う研究者、毒性担当者および毒性病理学者の最適のテキストと考えられる。
3. Skin Permeation and Disposition of Therapeutic and Cosmeceutical Compounds.	共	2017年10月 (刊行予定)	Springer	化学物質による皮膚刺激性に関する章を執筆した。 Chapter 25 Skin Damage Caused by Chemical Application. Katsuhiko Yoshizawa, Yuichi Kinoshita, Akiko Takenouchi, and Airo Tsubura
4. Recent Advances in Eye Research (N-Methyl-N-Nitrosourea-Induced Retinal Degeneration in Rats: A Reliable Animal Model of Retinitis Pigmentosa for the Development of New Therapeutic Strategies)	共	2016年1月	Nova Science Publishers	著者：義澤克彦, 川中（木村）彩子 ページ：254-256 ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説した。網膜色素変性症の単純で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット網膜変性症モデルの病態経過・メカニズムを紹介し、このモデルを用いた病態抑制実験例並びに臨床試験への適応例について解説した。この動物モデルはヒトの網膜色素変性症治療薬のスクリーニング方法として、世界中で使用されている。
5. Encyclopedia of Toxicology, 3rd Ed. (Methylnitrosourea)	共	2014年4月	Elsevier	著者：螺良愛郎, 義澤克彦, 佐々木朋 ページ：321-323 ニトロソ尿素は遺伝毒性物質であり、ヒトをはじめ様々な実験動物において発がん性が報告されている。ニトロソ尿素の化学物質としての特徴、毒性の種類とそのメカニズム、発がんターゲットの種類とそのメカニズムについて概説した。ニトロソ尿素についてまとめた内容の書物はこれまでになく、実験者にとって利用価値が高いと考えられる。
6. Animal Models for the Study of Human Disease (N-Methyl-N-nitrosourea animal models for retinitis pigmentosa, In: Animal Models for the Study of Human Disease)	共	2013年4月	Elsevier	著者：義澤克彦, 桑田満喜, 螺良愛郎 ページ：117-142 ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の単純で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット・マウス網膜変性症モデルを紹介した。さらに、それを用いたいくつかの病態抑制実験例（カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤、DHA）について解説した。
7. 「病気の分子形態学」（薬剤による歯の障害とそのメカニズム）		2011年9月	学際企画	著者：義澤克彦, 川中（木村）彩子 ページ：254-256 様々な薬剤の全身投与により、ヒトや実験動物の歯に影響をもたらすことが知られており、その病態は、色調異常、構造異常、発がん、栄養・代謝障害に起因した二次的变化に大別される。これらの病態の種類・特徴とそのメカニズムについて画像データを用いて解説した。
8. 病気の分子形態学」（誘発白内障）	共	2011年9月	学際企画	著者：桑田満喜, 義澤克彦, 螺良愛郎 ページ：351-353 失明の最大原因である白内障に関して、ヒトの疫学・病変の種類・治療法・予防法を概説し、その有用な動物モデルであるニトロソ尿素誘発ラット白内障モデルの特徴やメカニズムについて解説した。
9. 「病気の分子形態学」（薬剤性心筋障害）	共	2011年9月	学際企画	著者：義澤克彦, Abraham Nyska ページ：194-196 薬剤の全身投与による心臓毒性について、ヒトの臨床、検査方法、治療法について概説した。さらに、実験動物を用いた毒性試験で観察される病態について画像データを用いて解説した。
10. 「病気の分子形態学」（薬物誘発網膜変性）	共	2011年9月	学際企画	網著者：義澤克彦, 桑田満喜, 螺良愛郎 ページ：354-356 膜毒性は経験することの少ない副作用であることから、これらの情報は実験動物を使用した毒性評価担当者にとっては貴重な情報源である。私は眼球毒性評価の専門家として、実験動物（ラット・マウス）を用いた網膜の薬物誘発病変について、各種毒性病変の臨床・病理などの画像データを用いて説明し、その機能障害の種類についても言及した。
11. 創薬研究のストラテジー、下巻、（皮膚毒性）	共	2011年3月	金芳堂	著者：義澤克彦, 佐々木朋, 螺良愛郎 ページ：116-121 皮膚毒性はその発現機序により、皮膚に触れて起こる摂食性皮膚炎、紫外線との複合作用により起こる

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
12. 「日本電子顕微鏡学会モノグラフ病気の形態学」(白内障)	共	2002年9月	学際企画	光過敏症、接触性蕁麻疹、化学ざ瘡、色素沈着、薬疹、毛の異常、爪の異常、腫瘍に大別される。これらの皮膚毒性の特徴を概説した。 著者：義澤克彦、螺良愛郎 ページ：117-118
13. 「日本毒性病理学会スライドコンファレンスー皮膚・乳腺ー」(皮膚の非腫瘍性病変)	共	2001年1月	日本毒性病理学会	失明の最大原因である白内障に関して、ヒトの疫学・病変の種類・治療法・予防法を概説し、その有用な動物モデルであるニトロン尿素誘発ラット白内障モデルの特徴やメカニズムについて解説した。 著者：義澤克彦、松本正博、大石裕司 薬剤の全身投与による皮膚毒性の発現は稀である。そこで、このテキストでは実験動物における皮膚の基本構造病変、自然発生性病変および薬剤誘発性病変について画像データを用いて診断ポイントを解説した。薬剤誘発性病変は可能な限りそのメカニズムを説明した。さらにヒトでの病態について比較した。
14. Retinal degenerative diseases and experimental therapy. (Animal model for retinitis pigmentosa. Retinal degeneration induced by N-methyl-N-nitrosourea in rodents and spontaneous occurrence in rd gene carrying mice).	共	1999年4月	Kluwer Academic/Plenum Publishers	著者：Nambu H, Yuge K, Nakajima M, Takahashi K, Miki H, Uyama M, Yoshizawa K, Uemura Y, Tsubura A. ページ：373-381 ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、その動物モデル、特にrd遺伝子を持つマウスの病態の特徴について記載している。さらに、網膜色素変性症の簡単な確実な動物モデルとして、ニトロン尿素誘発のラット・マウス網膜変性症モデルを紹介し、治療法開発への利用の可能性を記載した。
15. 「日本毒性病理学会スライドカンファレンスー耳と眼ー」(眼の薬物誘発病変)	共	1998年2月	日本毒性病理学会	著者：螺良愛郎、義澤克彦 眼球毒性は経験することの少ない副作用であることから、これらの情報は実験動物を使用した毒性評価担当者にとっては貴重な情報源である。私は眼球毒性評価の専門家として、実験動物(ラット・マウス・イヌ・サル)を用いた眼球の薬物誘発病変について、各種毒性病変の臨床・病理などの画像データを用いて説明し、その機能障害の種類についても言及した。
16. 「日本トキシコロジー学会主催講習会」(呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性)	共	2006年7月、2007年7月、2008年7月、2009年7月、2010年8月	日本毒性学会	著者：義澤克彦 薬剤の全身投与による呼吸器毒性、皮膚毒性、血液・造血毒性、免疫毒性について、毒性専門家認定試験を受験する方々を対象にテキストを作成した。これらの臓器の正常構造・機能をはじめ、各種臨床検査方法、自然発生性病変、薬剤誘発病変とメカニズム、薬剤開発における注意点などを、現場の毒性担当者が理解しやすいように、画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
17. Boorman's Pathology of the Rat (Chapter 20: Specialized Sebaceous Glands- Zymbal's Gland, Preputial Gland, Clitoral Gland, and Perianal Gland)	共	2017年12月(刊行予定)	Elsevier	著者：Yoshizawa K 実験動物であるラットの病理学テキストは限られている。世界中の実験動物学者が結集し最新のテキストが来年に発行される。その一部のチャプター(特殊皮脂腺)を責任執筆した。記載内容はラットのみならず、マウス、イヌ、ウサギ、サル、ヒトにも言及し、比較組織学・病理学的な内容となっている。特殊皮脂腺に関して、このようにまとめた内容で多数の画像データが掲載されたテキストはこれまでにないと考えている。
18. 「日本毒性学会生涯教育講習会」(非病理学者のための病理学講義)	共	2014年7月、2015年6月、2016年7月	日本毒性学会	著者：義澤克彦 病理学総論の中の「細胞傷害と細胞死」、「循環障害・炎症」、「皮膚の組織と毒性変化」を中心に、基本的な用語・診断基準・メカニズムについて図表を用いながら解説した。病理学を学生時代に学んだ経験のある毒性担当者は必ずしも多いとは言えないが現状であり、現場の毒性担当者が理解しやすいように、ヒトおよび実験動物の病態について画像データを豊富に盛り込みながら解説した。
2 学位論文				
1. Mechanisms of photoreceptor cell apoptosis induced by N-methyl-N-nitrosourea in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	1999年11月	Laboratory Investigation 79, 1359-1367.	著者：Yoshizawa K, Nambu H, Yang J, Oishi Y, Senzaki H, Shikata N, Miki H, Tsubura A. 7週齢雌SD系ラットにMNUを単回投与して経時的に、形態学的検査、アポトーシス発現、視細胞DNAアルキル化の状態、網膜におけるBcl-2並びにBax蛋白の発現、caspase3, 6, 8の活性測定を実施した。MNU投与12時間から視細胞DNAのアルキル化が出現し、Bcl-2発現抑制並びにBax発現増加、caspase3, 6, 8の活性増強が観察され、視細胞アポトーシスの引き金になっていることが示された。MNUによる視細胞アポトーシスのカスケードを明らかにした初めての報告であり、ヒト網膜色素変性症治療のヒントになりえるかも

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
				しれない。
3 学術論文				
1. カンタキサンチン・アスタキサンチン摂取によるMNU誘発ラット乳腺発癌予防効果の検証	共	2017年4月	乳癌基礎研究会	海産資源に含まれるカンタキサンチンやアスタキサンチンといった天然キサントフィルは、ヒトの耐糖能障害や高脂血症を改善する作用を有するが、各種の癌に対して抗腫瘍効果を発揮することも知られている。MNU誘発ラット乳癌モデルを用いて、抑制効果を検証し、その作用機序について明らかにした。
2. Morphological analysis of liver and kidney in high fat fed C57BL/6J mice with bis(hinokitiolato)Zn complex.	共	2017年10月 in press	In Vivo	Naito Y, Yoshikawa Y, Yoshizawa K, Takenouchi A, Yasui H. Background: The metabolic syndrome induced life style-related diseases, the diabetes mellitus (DM) or hypertension et al.. Zn and their compounds have the treatment effect on the DM. Aim: The aims are to investigate the toxicity of bis(hinokitiolato)Zn, [Zn(hkt)2], in liver and kidney histopathologically. Materials and methods: We used the high fat fed (HFD) C57BL/6J mice and we administered the diet consisting of 30 mg Zn/kg BW or 30 mg PIO/kg BW as positive control. After the administration periods, we collected the blood, liver, and kidney. Their organs were evaluated the fat accumulation morphologically. Results: After 4-month administration of HFD, ectopic fat deposition was detected in liver and kidney. And the Zn accumulation in liver and kidney increased in [Zn(hkt)2] treatment. We found that [Zn(hkt)2] intake reduced lipid accumulations and lipid toxicity in these tissues. Conclusion: This study suggested that [Zn(hkt)2] could be the one of the new NASH protect compounds.
3. N-methyl-N-nitrosourea-induced schwannomas in male Sprague-Dawley rats with a literature review of inducible and spontaneous lesions. (査読付)		2016年5月	Experimental and Toxicologic Pathology 68, 371-379.	著者: Yoshizawa K, Yuki M, Kinoshita Y, Emoto Y, Yuri T, Elmore SA, Tsubura A. MNUは神経性の発がん物質と知られており、MNU50mg/kgを4週齢雄ラットに投与して誘発した末梢神経鞘腫の33症例に関して、免疫組織学的に検討を行ない、ヒト腫瘍との比較を行った。
4. Characterization of mammary adenocarcinomas in male rats after N-methyl-N-nitrosourea exposure - Potential for human male breast cancer model. (査読付)	共	2016年5月	Experimental and Toxicologic Pathology 68, 263-270.	著者: Yoshizawa K, Yuki M, Kinoshita Y, Emoto Y, Yuri T, Shikata N, Elmore SA, Tsubura A. 雄乳癌は非常に珍しい発生であり、MNUを雄ラットに投与することにより、雄乳癌を誘発できることを発見した。ヒトの男性乳癌との生物学的・分子病理学的な相違について検討した。その結果、MNU誘発乳癌は生物学的にヒト男性乳癌と異なることが示唆された。
5. Dietary effects of mead acid on N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary cancers in female Sprague-Dawley rats. (査読付)		2016年1月	Biomedical reports 4, 33-39.	著者: Kinoshita Y, Yoshizawa K, Hamazaki K, Emoto Y, Yuri T, Yuki M, Kawashima H, Shikata N, Tsubura A. MNU誘発ラット乳癌モデルを用いたミード酸による乳腺発がん抑制実験である。ミード酸は乳癌細胞にアポトーシスを誘発することにより、乳癌発育を抑制することがわかった。
6. FDAにおける非臨床試験データの電子申請と日本の製薬企業および非臨床試験受託研究機関が取るべき対策—SENDの理解と具体的対応方法—。(査読付)		2016年1月	レギュラトリーサイエンス学会誌6, 47-55.	著者: 上西将路, Laura Kaufman, 義澤克彦, 佐藤啓造, 中江大, 岩田聖, 安齋享征. 医薬品申請に関しては、臨床試験データは電子申請が開始されているが、全臨床試験に関しては本年度から米国で開始されることが決定されている。その対応策として具体的に注意すべき点についてまとめた論文である。
7. Cutaneous epithelial lesions induced by N-methyl-N-nitrosourea in male Sprague-Dawley rats: A possible animal model for human keratoacanthoma. (査読付)	共	2016年1月	Anticancer Research 36, 111-120.	著者: Yuki M, Yoshizawa K, Emoto Y, Yuri T, Kinoshita Y, Tsubura A, Kurokawa I. MNUを雄ラットに投与することによって、毛包脂腺系腫瘍を誘発することを明らかにした。その初期発生について免疫組織学的に検討し、ヒトの病態との比較を行った。
8. Autopsy report for chemical burns from cresol solution. (査読付)	共	2016年1月	Experimental and Toxicologic Pathology 68, 99-102.	著者: Emoto Y, Yoshizawa K, Shikata N, Tsubura A, Nagasaki Y クレゾールを服用して自殺した男性老人について全身解剖を行い、化学熱傷の部位・組織型の特徴を報告した。胸部臓器・上部消化管の融解壊死が特徴であった。クレゾールによる化学熱傷は、実験動物では動物愛護上の問題から、毒性学者には経験することができないため、貴重な報告と考えられる。
9. Spontaneously occurring lymphoma	共	2016年1月	Experimental and Toxicologic Pathology 68, 99-102.	著者: Yoshizawa K, Kinoshita Y, Emoto Y, Tsubura A

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
hematopoietic tumors in three young Sprague Dawley rats. (査読付)			cologic Pathology 68, 301-305.	a A. 若齢ラットで観察されたリンパ・血液系腫瘍3例の自然発症例に関する報告である。これらの症例は同一ロットでの発生であり、貴重な症例報告と考えられた。
10. Green tea extract attenuates MNU-induced photoreceptor cell apoptosis via suppression of heme oxygenase-1. (査読付)	共	2016年1月	Journal of Toxicologic Pathology 29, 61-65.	著者: Emoto Y, Yoshizawa K, Kinoshita Y, Yuki M, Yuri T, Tsubura A. 緑茶抽出物をMNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに投与することにより、病態抑制効果を明らかにした。そのメカニズムは HO-1抑制を介したMNU誘発視細胞アポトーシスの制御によることを明らかにした。
11. A spontaneously occurring malignant ovarian Sertoli cell tumor in a young Sprague-Dawley rat. (査読付)	共	2016年1月	Journal of Toxicologic Pathology 29, 53-59.	著者: Kinoshita Y, Yoshizawa K, Emoto Y, Yuki M, Yuri T, Shikata N, Elemore SA, Tsubura A. 若齢ラットの自然発症腫瘍は非常に珍しく、その詳細は明らかでない。今回、卵巣の悪性セルトリ細胞腫の症例を経験し、ヒトの症例との比較を行った。
12. Endocervical metastasis of pancreatic cancer: A rare case report of long-term survival. (査読付)	共	2016年1月	Human pathology: Case Reports 5, 34-38.	著者: Kinoshita Y, Yoshizawa K, Yuri T, Tsubura A, Shikata N. 膵臓がんの子宮頸部転移症例の報告であり、長期間生存例の臨床データは貴重な臨床データを提供するものと考えられた。
13. Susceptibility to N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in different rat strains. (査読付)		2016年1月	Journal of Toxicologic Pathology 29, 66-67.	著者: Emoto Y, Yoshizawa K, Kinoshita Y, Yuki M, Yuri T, Tsubura A. MNUのラットでの発がん性は系統により感受性が異なることが報告されている。今回、MNU誘発の網膜変性症でも感受性の違いがあるかを検討した。その結果、系統差は見られなかった。
14. Romanowsky staining using liquid-based cytology: a pilot study using Cytolyt(r)/HESPANDER(r) processing solution for ThinPrep(r) preparations. (査読付)	共	2015年9月	Diagnostic Cytopathology 43, 960-965.	著者: Kinoshita Y, Yuri T, Yoshizawa K, Takasu K, Emoto Y, Tsubura A, Shikata N. 本邦および国際的に急速に普及している液状細胞診(LBC)は標本作製の標準化や分子生物学的検査への応用が可能であるという観点から広く使用されている。培養乳癌細胞を用いてLBCのギムザ染色様の処理液について検討した。
15. Autopsy results for ingestion of sodium hydroxide solution. (査読付)	共	2015年9月	Journal of Toxicologic Pathology 29, 45-47.	著者: Emoto Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Nagasaki Y. 水酸化ナトリウム溶液を服用して自殺した男性老人について全身解剖を行い、化学熱傷の部位・組織型の特徴を報告した。水酸化ナトリウム溶液は胸部臓器・上部消化管の融解壊死が特徴であった。水酸化ナトリウム溶液による化学熱傷は、実験動物では動物愛護上の問題から、毒性学者には経験することができないため、貴重な報告と考えられる。
16. A spontaneously occurring malignant pituitary tumor in a male Sprague Dawley rat. (査読付)	共	2015年5月	Journal of Toxicologic Pathology 28, 171-176.	著者: Moroki T, Sasaki T, Yoshizawa K, Doi T. 老齢ラットの下垂体腫瘍の発生は前葉のプロラクチン産生腫瘍が主体を占めるが、後葉の悪性下垂体細胞腫の発生を経験したので、免疫組織学的な特徴を含めて報告した。世界で初めての症例である。
17. Hepatosplenomegaly associated with transient abnormal myelopoiesis in Down syndrome: an autopsy case of a stillborn fetus. (査読付)	共	2015年5月	Case Reports in Oncology 8, 274-278.	著者: Yuki M, Emoto Y, Kinoshita Y, Yoshizawa K, Yuri T, Tsubura A. ダウン症を罹患した胎児の剖検であり、肝臓・脾臓腫大が肉眼的に観察された。組織学的には全身臓器で巨核球系細胞の増殖が観察され、肝臓・脾臓腫大の原因と考えられた。ダウン症の子供では稀にGATA-3遺伝子の異常による一時的な血小板分化の異常が報告されており、本症例の所見と一致していた。
18. Leiomyomatosis peritonealis disseminata positive for progesterone receptor. (査読付)	共	2015年4月	American Journal of Case Reports 16, 300-304.	著者: Yuri T, Kinoshita Y, Yuki M, Yoshizawa K, Emoto Y, Tsubura A. 腹膜の平滑筋腫症の解剖症例の報告である。腫瘍細胞は腹腔内に播種性に増殖し、プロゲステロン陽性であった。
19. International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND) progress to date and future plans. (査読付)	共	2015年2月	Journal of Toxicologic Pathology 28, 51-5.	著者: Keenan CM, Baker JF, Bradley AE, Goodman DG, Harada T, Herbart R, Kaufmann W, Kellner R, Mahler B, Meseck E, Nolte T, Rittinghausen S, Vahle J, Yoshizawa K. International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)のこれまでの活動、進捗状況並びに米国FDAとの協力体制についての報告である。
20. Autopsy Report for a Caffeine Intoxication Case and Review of the Current Literature. (査読付)	共	2015年2月	Journal of Toxicologic Pathology 28, 33-36.	著者: Yamamoto T, Yoshizawa K, Kubo S, Emoto Y, Hara K, Brian W, Umehara T, Murase T, Ikematsu K. 多量のカフェイン製剤を服用し自殺した18歳女性の解剖症例である。死因はカフェインによる急性心不全であり、組織学的には脳浮腫のみであった。血中濃度はこれまで報告されている致死濃度

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
21. Mead acid supplementation does not rescue rats from cataract and retinal degeneration induced by N-methyl-N-nitrosourea. (査読付)	共	2015年2月	Journal of Toxicologic Pathology 28, 11-20.	をはるかに超えていた。 著者：Emoto Y, Yoshizawa K, Hamazaki K, Kinoshita Y, Yuki M, Yuri T, Kawashima H, Tsubura A. ミード酸は生体内でアラキドン酸が欠乏した時に産生される脂肪酸であり、血管新生抑制作用があることが報告されている。ミード酸のMNU誘発白内障ならびに網膜変性症モデルに対する効果を検討した。その結果、抑制効果は見られなかった。
22. Human chorionic gonadotropin suppresses human breast cancer cell growth directly via p53-mediated mitochondrial apoptotic pathway and indirectly via ovarian steroid secretion. (査読付)	共	2014年5月	Anticancer Research 34, 1347-1354.	著者：Yuri T, Kinoshita Y, Emoto Y, Yoshizawa K, Tsubura A. MNUをラットに投与して乳癌を発生させ、その後ヒト絨毛性ゴナドトロピンを連日処置すると、乳癌の縮小効果が明らかであった。そのメカニズムは、卵巣からのステロイドホルモン分泌による、p53を介したミトコンドリアが関連したアポトーシスが主体であった。
23. Green tea extract-induced acute hepatotoxicity in rats. (査読付)	共	2014年9月	Journal of Toxicologic Pathology 27, 163-174.	著者：Emoto Y, Yoshizawa K, Kinoshita Y, Yuki M, Yuri T, Yoshikawa Y, Sayama K, Tsubura A. 緑茶抽出物由来のサプリメントはダイエット効果がみられることから欧米で減量のために使用されている。しかし、重篤な肝臓障害が問題となり、一部の国で発売中止となった。緑茶抽出物をラットに単回投与することによって、ヒトと同様の劇症肝炎の病態を作成することに成功した。病態発症に肝細胞の酸化ストレスが関与していた。このモデルを用いた副作用回避の施策を検討したい。
24. Mead acid inhibits the growth of KPL-1 human breast cancer cells in vitro and in vivo. (査読付)	共	2014年9月	Oncology Reports 32, 1385-1394.	著者：Kinoshita Y, Yoshizawa K, Hamazaki K, Emoto Y, Yuri T, Yuki M, Shikata N, Kawashima H, Tsubura A. ヒト乳癌細胞株を用いてミード酸の増殖抑制効果を検討した。ミード酸投与により、乳癌細胞株の増殖活性抑制並びに血管内皮細胞レセプターの発現が抑制された。さらに、ヒト乳癌細胞株をヌードマウスに移植し、ミード酸添加食を摂取させ、乳癌発育への影響を検討した。ミード酸添加食は乳癌発育を軽減させた。この結果から、ミード酸はin vivo, in vitroともに直接的に乳癌発育抑制作用を持つと同時に、血管増殖抑制作用も関与することが示唆された。
25. Morphological analysis of the pancreas and liver in diabetic KK-Ay mice treated with zinc or oxovanadium complexes. (査読付)	共	2014年8月	Metallomics 6, 1632-1638.	著者：Moroki T, Yoshikawa Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Yasui H. 1型糖尿病モデルであるKK-Ayマウスに、バナジウム金属の錯体の数種類を投与して、その治療効果を形態計測により比較した。投与群では、血糖値の低下に加えて、肝細胞脂肪化の抑制、膵臓ランゲルハンス島肥大の抑制がみられた。糖尿病治療効果が明確であった。
26. Multifocal adenomatous oncocyctic hyperplasia of the parotid gland. (査読付)	共	2014年7月	Case Reports in Oncology 7, 819-824.	著者：Kinoshita Y, Harada H, Kobayashi TK, Yoshizawa K, Yuri Y, Takasu K, Tsubura A, Shikata N. 多巣状性腺腫様オンコサイト過形成は唾液腺病変の約0.1%であり、71歳の女性の症例について、形態学的に検索した報告である。腫瘍細胞は好酸性円形であり、ミトコンドリア抗体に陽性を示した。
27. Green tea extract suppresses N-methyl-N-nitrosourea-induced photoreceptor apoptosis in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2014年7月	Graefe's Archive for Clinical and Experimental Ophthalmology 252, 1377-1384.	著者：Emoto Y, Yoshizawa K, Kinoshita Y, Yuri T, Yuki M, Sayama K, Shikata N, Tsubura A. 緑茶には抗酸化作用があり、適量では様々な疾患の予防に寄与する可能性が示唆されている。緑茶抽出物をMNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに投与することにより、病態抑制効果を明らかにした。MNUによる視細胞の酸化ストレスを、緑茶抽出物が軽減させることによる。
28. Trousseau's syndrome caused by intrahepatic cholangiocarcinoma: an autopsy case report and literature review. (査読付)	共	2014年6月	Case Reports in Oncology 7, 376-382.	著者：Yuri T, Kato K, Hirohara J, Kinoshita Y, Emoto Y, Yuki M, Yoshizawa K, Tsubura A. 肝内胆管癌の患者では、凝固因子の活性化による多発性血栓症が生じることがあり、中枢神経系の生じた場合は特徴的な神経症状を発症し、Trousseau症候群といわれている。この疾患患者の臨床病理学データと全身の病理組織学的所見の関係を明らかにした。
29. Similarity of GATA-3 expression between rat and human mammary glands. (査読付)		2014年6月	Journal of Toxicologic Pathology 27, 159-162.	著者：Kinoshita Y, Yoshizawa K, Emoto Y, Yuki M, Yuri T, Shikata N, Tsubura A. GATA-3は造血系転写因子の一つであるが、尿路系腫瘍と乳癌の臨床マーカーであることが最近報告されている。ヒト及びラットの正常乳腺、線維腺腫、腺癌を用いてGATA-3蛋白の発現を比較した。線維腺腫ではヒト・ラットともにGATA-3蛋白の発現は認められなかった。しかし、ヒトと同様に、ラット乳癌で

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
30. Horrifying Basal cell carcinoma: cytological, immunohistochemical, and ultrastructural findings. (査読付)	共	2014年6月	Case Reports in Oncology 7, 459-464.	もGATA-3蛋白発現の増加が観察され、ラットにおいても乳癌の鑑別診断で使用できる可能性がある。 著者：Kinoshita Y, Takasu K, Yoshizawa K, Emoto Y, Yuki M, Yuri T, Shikata N, Tsubura A. 眼瞼に認められた角化型の基底細胞癌の細胞診、免疫組織化学的、電子顕微鏡学的特徴についての報告である。サイトケラチン7, 56陽性、サイトケラチン20、クロモグラニン、シナプトフィジン陰性であった。しかし、電子顕微鏡学的に神経内分泌顆粒が観察された。角化型の基底細胞癌で神経内分泌細胞への分化は報告がなく、本例が初めての報告である。
31. Temporal and spatial dependence of inflammatory biomarkers and suppression by fluvastatin in dextran sodium sulfate-induced rat colitis model. (査読付)	共	2014年5月	Digestive Diseases and Sciences 59, 2126-2135.	著者：Oishi M, Tokuhara K, Miki H, Tanaka Y, Yamaki S, Kaibori M, Yoshizawa K, Yuri T, Yoshigai E, Nishizawa M, Okumura T, Kwon AH. デキストラン誘発ラット慢性大腸炎モデルに、高脂血症治療薬 (HMG-CoA還元酵素阻害)であるフルバスタチンを併用投与して治療効果を検討した。フルバスタチン処置により、大腸炎の頻度・程度が減弱し、IL-2を含めた各種炎症性マーカーの発現が減弱した。フルバスタチンは慢性大腸炎の治療に利用できる可能性がある。
32. New insulin-mimetic and hypoglycemic hetero-binuclear zinc(I I)/oxovanadium (IV) complex. (査読付)	共	2014年1月	Current Inorganic Chemistry 4, 54-58.	著者：Moroki T, Yasui H, Adachi Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Ozutsumi K, Katayama M, Yoshikawa Y. 1型糖尿病モデルであるKK-Ayマウスに、バナジウム金属の錯体の数種類を投与して、その治療効果を比較した。投与群では、血糖値の低下に加えて、肝細胞脂肪化の抑制、膵臓ランゲルハンス島肥大の抑制がみられ、糖尿病治療効果が明確であった。
33. Testicular mineralization in KK-Ay mice treated with an oxovanadium complex. (査読付)	共	2013年9月	Journal of Toxicologic Pathology 26, 329-333.	著者：Moroki T, Yoshikawa Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Yasui H. 1型糖尿病モデルであるKK-Ayマウスに、バナジウム金属の錯体を投与すると、錯体の種類によって、精巣の壊死・石灰化が特徴的に観察された。この病変の経時的变化とメカニズムについて考察した。
34. Proceedings of the 2013 Joint JSTP/NTP Satellite Symposium. (査読付)	共	2013年9月	Journal of Toxicologic Pathology 26, 231-257.	著者：Elmore SA, Hoenerhoff M, Katsuta O, Kokoshima H, Maronpot R, Nagai H, Satoh H, Tanaka Y, Tochitani T, Tsuchiya S, Yoshizawa K. 2013年日本毒性病理学会で開催されたJSTP/NTPサテライトシンポジウムでの発表症例をまとめたものである。MNUにより短期で誘発された膵臓膵管癌の症例報告について執筆した。
35. Curcumin suppresses N-methyl-N-nitrosourea-induced photoreceptor apoptosis in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2013年9月	In Vivo 27, 583-590.	著者：Emoto Y, Yoshizawa K, Uehara N, Kinoshita Y, Yuri T, Shikata N, Tsubura A. クルクミンはカレーに含まれる黄色物質であり、抗酸化作用を有することが知られている。MNU誘発ラット網膜色素変性症モデルを用いて、クルクミンを経口併用投与すると、網膜変性の程度が軽減された。そのメカニズムはMNU投与による網膜の酸化ストレスを抑制することが関与した。
36. N-Methyl-N-nitrosourea-induced Renal Tumors in Rats: Immunohistochemical Comparison to Human Wilms Tumors. (査読付)	共	2013年8月	Journal of Toxicologic Pathology 26, 141-148.	著者：Yoshizawa K, Kinoshita Y, Emoto Y, Kimura A, Uehara N, Yuri T, Shikata N, Tsubura A. MNUは新生児ラットに投与すると腎臓腫瘍(腎芽腫、腎細胞癌、悪性間葉系腫瘍)を誘発することが知られている。これらの腫瘍とヒト小児に発生するウィルムス腫瘍の相違について、免疫組織学的に比較した。
37. Morphological characterization of systemic changes in young adult KK-Ay mice as animal model of type 2 diabetes. (査読付)	共	2013年8月	In Vivo 27, 465-472.	著者：Moroki T, Yoshikawa Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Yasui H. 1型糖尿病モデルであるKK-Ayマウスの全身臓器における病理組織学的変化の特徴を検索した。血糖値の低下に加えて、肝細胞脂肪化、膵臓ランゲルハンス島肥大が特徴であった。
38. Arachidonic acid supplementation does not affect N-methyl-N-nitrosourea-induced renal preneoplastic lesions in young Lewis rats. (査読付)	共	2013年7月	Oncology Letter 5: 1112-1116.	著者：Yoshizawa K, Emoto Y, Kinoshita Y, Kimura A, Uehara N, Yuri T, Shikata N, Hamazaki T, Tsubura A. MNUはラットに腎臓腫瘍を誘発することが知られている。妊娠期・授乳期各3週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、3週齢時の子供ラットにMNUを投与し、腎臓の前癌病変、腫瘍性病変の出現程度を基礎食群と比較した。その結果、アラキドン酸食群では前癌病変・腫瘍性病変の増加は認められず、腎臓でのプロモーション作用はないと判断した。
39. Estrogen receptor- and progesterone receptor-positive diffuse sclerosing variant of papillary thyroid carcinoma: a case	共	2013年7月	Case Reports in Oncology 6, 216-223.	著者：Kinoshita Y, Takasu K, Yuri T, Yoshizawa K, Emoto Y, Tsubura A, Shikata N. 乳頭状甲状腺癌の硬化型の発生は極めて稀である。その臨床病理学的な特徴と予後についての発表である。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
report. (査読付)				
40. Two cases of malignant peritoneal mesothelioma without asbestos exposure: cytologic and immunohistochemical features. (査読付)	共	2013年6月	Annals of Diagnostic Pathology 17, 99-103.	著者: Kinoshita Y, Takasu K, Yuri T, Yoshizawa K, Norihisa Uehara, Kimura A, Tsubura A, Shikata N. 腹膜悪性中皮腫の発生にはアスベスト暴露との関連がよく知られている。アスベスト曝露歴のない腹膜悪性中皮腫の2例に関して、臨床病理学的特徴と病理組織学的な特徴を述べ、過去の報告例と比較した。
41. Histopathological and immunohistochemical characterization of spontaneously occurring uterine deciduoma in young adult rats. (査読付)	共	2013年6月	Journal of Toxicologic Pathology 26, 61-66.	著者: Yoshizawa K, Emoto Y, Kinoshita Y, Kimura A, Uehara N, Yuri T, Shikata N, Tsubura A. 若齢ラット2例にみられた子宮脱落膜腫の形態学的特徴と免疫染色学的特徴についての報告である。若齢での発生は極めて稀であり、若齢ラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
42. Proceedings of the 2012 National Toxicology Program satellite symposium. (査読付)	共	2013年5月	Toxicologic Pathology 41, 151-180.	著者: Elmore SA, Berridge BR, Boyle MC, Cora MC, Hoenerhoff MJ, Kooistra L, Laast VA, Morrison JP, Rao D, Rikke M, Yoshizawa K. 2012年米国毒性病理学会で開催されたNTPサテライトシンポジウムでの発表症例をまとめたものである。MNUにより短期で誘発された膵臓膵管癌の症例報告について執筆した。
43. Promoting effect of arachidonic acid supplementation on N-methyl N-nitrosourea-induced pancreatic acinar cell hyperplasia in young Lewis rats. (査読付)	共	2013年5月	Oncology Letter 5, 76-82.	著者: Yoshizawa K, Uehara N, Kimura A, Emoto Y, Kinoshita Y, Yuri T, Takada H, Moriguchi T, Hamazaki T, Tsubura A. MNUはラットに膵臓腫瘍を誘発することが知られている。妊娠期・授乳期各3週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、3週齢時の子供ラットにMNUを投与し、膵臓の腺房過形成(前癌病変)の出現程度を基礎食群と比較した。その結果、腺房過形成の頻度・面積がアラキドン酸食群では増加し、プロモーション作用があることが明らかとなった。
44. Arachidonic acid supplementation during gestational, lactational and post-weaning periods prevents retinal degeneration induced in a rodent model. (査読付)	共	2013年4月	British Journal of Nutrition 109, 1424-1432.	著者: Yoshizawa K, Sasaki T, Kuro M, Uehara N, Takada H, Harauma A, Ohara N, Moriguchi T, Tsubura A. アラキドン酸は新生児期の神経系・視覚の発育に重要な脂肪酸であることが知られている。妊娠期・授乳期各3週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、3週齢時の子供ラットにMNUを投与し、網膜変性症の程度を基礎食群と比較した。その結果、アラキドン酸摂取群では網膜変性症を有意に抑制した。ヒトの網膜色素変性症は遺伝的に診断可能であることから、妊娠期・新生児期にアラキドン酸を摂取することにより、病態を阻止・遅延できる可能性がある。
45. N-methyl-N-nitrosourea-induced cerebellar hypoplasia in rats: effect of arachidonic acid supplementation during the gestational, lactational and post-weaning periods. (査読付)	共	2013年12月	Experimental Therapeutic Medicine 6, 627-634.	著者: Yoshizawa K, Emoto Y, Kinoshita Y, Yuri T, Tsubura A. 0日齢の雌雄SDラットにMNUを投与すると小脳低形成が誘発された。その形態学的な特徴は小脳分子層、プルキンエ細胞層、顆粒層の消失と配列不正であり、これらの変化を経時的に観察した。また、新生児期の神経系の発育に重要な脂肪酸であるアラキドン酸を妊娠期から併用した時の小脳病変の抑制効果を確認した。その結果、アラキドン酸を併用しても、病変の抑制効果は認められなかった。
46. Solitary extrapleural fibrous tumor of axillary skin diagnosed by fine-needle aspiration cytology, coincident with simultaneous breast fibroadenoma. (査読付)	共	2013年11月	World Journal of Medical Surgery Case Reports 2, 95-99	著者: Kinoshita Y, Takasu K, Hosaka N, Omura N, Yuri T, Emoto Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Shikata N. 乳腺の線維腺腫の併発を伴った皮膚の線維性腫瘍の症例について、針バイオプシーでの所見と手術所見の関連性を考察した。
47. Pulmonary and meningeal cryptococcosis after corticosteroid therapy for autoimmune hepatitis: coexistence of cryptococci within pulmonary cancer nodule. (査読付)	共	2013年10月	Case Reports in Pathology 2013, 807197.	著者: Yuri T, Kimura A, Yoshizawa K, Emoto Y, Kinoshita Y, Tsubura A. 自己免疫性肝炎患者において、ステロイド長期治療により肺・髄膜クリプトコッカス感染が認められた症例について、その臨床病理データと病理組織学的特徴についての報告である。微小肺癌が観察され、クリプトコッカスがその部位で繁殖していた。
48. Ovarian endometrioid adenocarcinoma with functioning stroma accompanied with endometrioid adenocarcinoma; immunohistochemical study and literature review. (査読付)	共	2013年10月	Open Journal of Pathology 3, 150-155.	著者: Yuri T, Mizokami T, Kinoshita Y, Yoshizawa K, Yasuda K, Tsubura A. 卵巣の子宮内膜腺癌でホルモン産生による二次的障害を示した症例に関して、免疫組織学的特徴を過去の症例と比較した。
49. Spontaneously occurring intracranial lipomatous hamartoma in a young BALB/c mouse and a literature review. (査読付)	共	2012年8月	Journal of Toxicologic Pathology 25, 179-182.	著者: Sasaki T, Yoshizawa K, Kinoshita Y, Miki H, Kimura A, Yuri T, Uehara N, Tsubura A. 若齢マウスにみられる中枢神経系の自然発生病変は極めて稀である。BALB/cマウスにみられたIntracranial

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
50. Human chorionic gonadotropin inhibits N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinoma growth in female Lewis rats. (査読付)	共	2012年8月	In Vivo 26, 361-367.	ial Lipomatous Hamartomaについて、その病理組織学的・免疫組織学的な特徴について発表した。マウスの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。 著者：Yuri T, Lai YC, Yoshizawa K, Tsubura A. MNUをラットに投与して乳癌を発生させ、その後にヒト絨毛性ゴナドトロピンを連日処置すると、乳癌の縮小効果が明らかであった。乳癌におけるホルモンレセプター発現の推移と卵巣の形態学的変化の関連性について発表した。
51. N-methyl-N-nitrosourea-induced changes in epithelial rest of Malassez and the development of odontogenic tumor in rats. (査読付)		2012年6月	Experimental and Therapeutic Medicine 4, 15-20.	著者：Kimura A, Yoshizawa K*, Sasaki T, Uehara N, Kinoshita Y, Miki H, Yuri T, Uchida T, Tsubura A. (* equal to the first author) MNUを雄ラット3週齢時に投与すると、発生頻度が少ないものの、菌原性腫瘍が発生することが明らかとなった。その初期メカニズムを明らかにするために、経時的に歯・歯肉を病理組織学的に観察した。MNU投与群では、12週齢時点で巨大なMalassez 上皮遺残が観察され、歯幹細胞のマーカーであるp63陽性であった。これが菌原性腫瘍の発生に結び付く可能性が示唆された。
52. Vorinostat enhances protein stability of p27 and p21 through negative regulation of Skp2 and Cks1 in human breast cancer cells. (査読付)	共	2012年5月	Oncology Report 28, 105-110.	著者：Uehara N, Yoshizawa K, Tsubura A. HDAC阻害剤であるVorinostatはp38 MAPキナーゼを介したアポトーシスにより乳癌細胞株増殖抑制作用を示した。Vorinostat 投与により、乳癌細胞内でのSkp2, Cksの負の制御が関与したp27並びにp21遺伝子の保持を向上させることが明らかとなった。
53. Resveratrol induces apoptosis via ROS-triggered autophagy in human colon cancer cells. (査読付)	共	2012年5月	International Journal of Oncology 40, 1020-1028.	著者：Miki H, Uehara N, Kimura A, Sasaki T, Yuri T, Yoshizawa K, Tsubura A. レスベラトロールは赤ワインに含有される抗酸化物質であり、様々な大腸癌細胞株を用いて、用量依存的な増殖抑制効果を示した。レスベラトロールを処置した癌細胞の細胞質にはオートファゴソームが多数確認され、これを介したアポトーシスにより、増殖抑制効果を示すことが明らかとなった。このオートファジー誘導には活性酸素種の発生が関与した。
54. N-Ethyl-N-nitrosourea induces retinal photoreceptor damage in adult rats. (査読付)	共	2012年2月	Journal of Toxicologic Pathology 25, 27-35.	著者：Yoshizawa K, Sasaki T, Uehara N, Kuro M, Kimura A, Kinoshita Y, Miki H, Yuri T, Tsubura A. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素によるラットの眼球毒性の報告はない。ラットに単回投与することにより、視細胞アポトーシスが関与した網膜変性症を誘発することがわかった。アポトーシスカスケードに関する解析結果の発表である。マウスの場合とは異なり角膜障害は見られなかった。網膜のγH2AX解析に関しては初めての報告である。
55. Requirement of p38 MAPK for a cell-death pathway triggered by vorinostat in MDA-MB-231 human breast cancer cells. (査読付)	共	2012年1月	Cancer Letter 315, 112-121.	著者：Uehara N, Kanematsu S, Miki H, Yoshizawa K, Tsubura A. HDAC阻害剤は主に血液がんの治療薬として欧米では使用されている。乳癌細胞株での増殖抑制効果とそのメカニズムについて検討した。p38活性化シグナル経路を介して、乳癌細胞株にアポトーシスを誘導することが明らかとなった。
56. Sulforaphane inhibits the growth of KPL-1 human breast cancer cells in vitro and suppresses the growth and metastasis of orthotopically transplanted KPL-1 cells in female athymic mice. (査読付)	共	2011年9月	Oncology Report 26, 603-6	著者：Kanematsu S, Yoshizawa K, Uehara N, Miki H, Sasaki T, Kuro M, Lai YC, Kimura A, Yuri T, Tsubura A. ブロッコリーの成分であるスルホラファンは抗酸化作用を持つだけでなく、種々の腫瘍細胞の増殖抑制効果が認められている。ヒト乳癌細胞株をマウスに接種後、スルホラファンを連続投与し、乳癌発生率への影響を検討した。スルホラファン処置により、乳癌発生は抑制され、縮小効果も観察された。腫瘍細胞増殖抑制効果はオートファジー誘導により腫瘍細胞にアポトーシスを誘発することが関連することを明らかにした。
57. Inhibitory potency of tacrolimus ointment on skin tumor induction in a mouse model of an initiation-promotion skin tumor. (査読付)	共	2011年6月	Journal of Dermatology 38, 562-570.	著者：Mitamura T, Doi Y, Kawabe M, Lilja H, Motomura M, Oishi Y, Yoshizawa K, Seki J. タクロリムス軟膏はアトピー性皮膚炎の治療薬として臨床使用されている免疫抑制剤である。7,12-dimethylbenz[α] anthraceneと12-O-tetra-decanoylphorbol-13-acetateをマウスに塗布する二段階皮膚発癌モデルを用いて、タクロリムスと各種軟膏成分との皮膚発癌プロモーション作用を比較した。その結果、タクロリムス群で皮膚発癌増加は認められず、プロモーション作用はないと判断した。
58. Calpain inhibition restores basal autophagy and suppresses	共	2011年6月	In Vivo 25, 617-623.	著者：Kuro M, Yoshizawa K, Uehara N, Miki H, Takahashi K, Tsubura A.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
MNU-induced photoreceptor cell death in mice. (査読付)				MNUマウス誘発網膜変性では、変性が進行するにつれて、生理的に存在する網膜外層のオートファジーが減少・消失する。カルバイン阻害剤であるSNJ1945を処置すると、MNU誘発網膜変性の程度が軽減され、網膜外層のオートファジーが保持されていた。オートファジーが細胞死に抑制的に作用したものと考えられる。
59. Corneal damage induced in adult mice by a single intraperitoneal injection of N-ethyl-N-nitrosourea. (査読付)	共	2011年6月	In Vivo 25, 609-615.	著者：Yoshizawa K, Sasaki T, Kuro M, Miki H, Kimura A, Uehara N, Yuri T, Tsubura A. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素による眼球毒性の報告はない。マウスに単回投与することにより、角膜障害を誘発することがわかった。角膜幹細胞であるp63陽性細胞にアポトーシスを誘発することがメカニズムと考えられた。
60. Retinal degeneration induced in adult mice by a single intraperitoneal injection of N-ethyl-N-nitrosourea. (査読付)	共	2011年4月	Toxicologic Pathology 39, 606-613.	著者：Yoshizawa K, Kuro-Kuwata M, Sasaki T, Lai YC, Kanematsu S, Miki H, Kimura-Kawanaka A, Uehara N, Yuri T, Tsubura A. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素による眼球毒性の報告はない。マウスに単回投与することにより、視細胞アポトーシスが関与した網膜変性症を誘発することがわかった。
61. Effects of short-term pregnancy hormone treatment against N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinomas in female Lewis rats. (査読付)	共	2011年2月	In Vivo 25, 149-1	著者：Lai YC, Yoshizawa K, Kimura-Kawanaka A, Miki H, Sasaki T, Tsubura A. ヒトでは若年の満期妊娠は、未産婦に比して生涯にわたる乳癌の発生を抑える。ラットでも若齢妊娠による乳癌抑制は認められ、エストロゲンとプロゲステロン(E/P)の短期(3週;ラットの妊娠期間に相当)投与でも再現される。また、抗精神薬のペルフェナジン(PPZ)はプロラクチン放出作用を示す。MNUを投与しE/P処置した場合とPPZ処置した場合の乳腺発癌への影響について検討した。その結果、E/P処置群では乳癌発生率は低下し、PPZ処置群では発生率が増加した。
62. ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤 vorinostatによるp38MAPキナーゼシグナルを介した乳癌細胞死誘導機序. (査読付)	共	2011年11月	乳癌基礎研究会雑誌 20, 17-21.	著者：上原範久, 兼松清果, 三城弥範, 義澤克彦, 螺良愛郎. HDAC阻害剤であるVorinostatはp38 MAPキナーゼを介したアポトーシスにより乳癌細胞株増殖抑制作用を示す。Vorinostat 投与により、乳癌細胞内でのSkp2, Cksの負の制御が関与したp27遺伝子の保持を向上させることが明らかとなった。
63. Effects of short-term estrogen treatment on the progression of N-methyl-N-nitrosourea-induced premalignant mammary lesions in female Lewis rats. (査読付)	共	2011年10月	Medical Molecular Morphology 44, 125-130.	著者：Yuri T, Lai YC, Kanematsu S, Kuwata M, Yoshizawa K, Tsubura A. MNUを雌Lewis系ラットに投与して、乳腺の前癌病変の形態学的変化について経時的に観察し、エストロゲン投与による影響を検討した。エストロゲン投与により、前癌病変の発生時期が早まり、発生個数が増加し、最終的には乳癌発生率が増加した。
64. Short-term pregnancy hormone treatment of N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinogenesis in relation to fatty acid composition of serum phospholipids in female Lewis rats. (査読付)	共	2010年8月	In Vivo 24, 553-560.	著者：Lai YC, Hamazaki K, Yoshizawa K, Kawanaka A, Kuwata M, Kanematsu S, Hamazaki T, Takada H, Tsubura A. ヒトでは若年の満期妊娠は、未産婦に比して生涯にわたる乳癌の発生を抑える。ラットでも若齢妊娠による乳癌抑制は認められ、エストロゲンとプロゲステロンの短期(3週;ラットの妊娠期間に相当)投与でも再現される。乳腺間質(脂肪織)の脂肪酸組成の変動に着目し、乳癌抑制効果の機序解明に取り組んだところ、経産乳腺ではリノール酸組成の有意の減少をみた。
65. Autophagy inhibition enhances sulforaphane-induced apoptosis in human breast cancer cells. (査読付)	共	2010年9月	Anticancer Research 30, 3381-3390.	著者：Kanematsu S, Uehara N, Miki H, Yoshizawa K, Kawanaka A, Yuri T, Tsubura A. ブロッコリーの成分であるスルホラファンは抗酸化作用を持つだけでなく、種々の腫瘍細胞の増殖抑制効果が認められている。各種乳癌細胞株を用いて、増殖抑制効果を比較した。腫瘍細胞増殖抑制効果はオートファジー誘導により腫瘍細胞にアポトーシスを誘発することが関連することを明らかにした。
66. Thyroid follicular lesions induced by oral treatment for 2 years with 2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin and dioxin-like compounds in female Harlan Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2010年10月	Toxicologic Pathology 38, 1037-1050.	著者：Yoshizawa K, Walker NJ, Nyska A, Kissling GE, Jokinen MP, Brix AE, Sells DM, Wyde ME. TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はラットに投与すると、肝細胞障害と共に甲状腺肥大がみられる。初期変化を含めたメカニズムについて、14週、31週、53週、2年の組織標本を用いて、甲状腺ホルモンと甲状腺の病理形態像を経時的に比較した報告である。
67. Cerebromalacia with epilepsy and cortical blindness in a l	共	2010年10月	Toxicologic Pathology 38, 1058-1063.	著者：Yoshizawa K, Nakao K, Habiro M, Hayashi K, Kuwata M, Uehara N, Yuri T, Nakamura K,

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
aboratory Japanese macaque (<i>Macaca fuscata</i>). (査読付)				Tsubura A. 予備飼育中に皮質盲ならびに癲癇症状を示した実験用ニホンザルの雌1例に、広範な大脳壊死が観察され、特に後頭葉の萎縮が観察された。実験用ニホンザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
68. Gastrointestinal hyperplasia with altered expression of DNA polymerase beta. (査読付)	共	2009年8月	PLoS ONE 4(8), Article number e6493	著者：Yoshizawa K, Jelezcova E, Brown AR, Foley JF, Nyska A, Cui X, Hofseth LJ, Maronpot RM, Wilson SH, Sepulveda AR, Sobol RW. DNAポリメラーゼβトランスジェニックマウスの病理学的特徴についての報告である。十二指腸過形成、骨腫瘍、白内障の発生が増加した。ヒトの胃・甲状腺腫瘍においてDNAポリメラーゼβの過剰発現がみられた。
69. Abdominal cysticercosis in a cynomolgus monkey. (査読付)	共	2009年3月	Veterinary Parasitology 161, 339-341.	著者：Tsubota K, Nakatsuji S, Matsumoto M, Fujihira S, Yoshizawa K, Okazaki Y, Murakami Y, Anagawa A, Oku Y, Oishi Y. カンクイザルの毒性試験で観察された細頸囊虫(胞状条虫)症の症例報告である。日本での発生は報告されておらず、カンクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
70. N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in mice is independent of the p53 gene. (査読付)	共	2009年12月	Molecular Vision 15, 2919-2925.	著者：Yoshizawa K, Kuwata M, Kawanaka A, Uehara N, Yuri T, Tsubura A. p53遺伝子は細胞の生死にかかわる重要な遺伝子であり、MNU誘発の視細胞アポトーシスにどのようなかわりを持つかについて、p53ノックアウトマウスを用いて検討した。ノックアウトマウスにMNUを投与した場合でもwild typeマウスと同様に視細胞死が誘発されたことから、MNU誘発の視細胞アポトーシスにはp53遺伝子は関与しないことが明らかとなった。
71. Ocular toxicity caused by paclitaxel in neonatal Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2009年10月	In Vivo 23, 555-560.	著者：Kuwata M, Yoshizawa K, Matsumura M, Takahashi K, Tsubura A. タキソールは小児がんで使用されることはないが、母親が卵巣がん、非小細胞肺癌、乳がん、胃がん、子宮体がんなどの場合、母乳あるいは母体内にいるときに子供への曝露があり得る。タキソールの眼障害に関しては白内障や角膜障害は報告があるものの、網膜への影響は明確でなかった。新生仔ラットおよびマウスにタキソールを投与することにより網膜異形成の誘発に成功した。
72. Reproductive lesions in female Harlan Sprague-Dawley rats following two-year oral treatment with dioxin and dioxin-like compounds. (査読付)	共	2009年10月	Toxicologic Pathology 37, 921-937.	著者：Yoshizawa K, Brix AE, Sells DM, Jokinen MP, Wyde M, Orzech DP, Kissling GE, Walker NJ, Nyska A. TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はラットに投与すると、雌生殖器に発癌をはじめとした様々な変化が誘発される。卵巣の萎縮・炎症、子宮の炎症・扁平上皮過形成・扁平上皮乳頭腫・扁平上皮癌であった。それらの組織学的な特徴と化学物質による発生率の違いについて比較した。
73. Novel method for selecting immunosuppressive histone deacetylase (HDAC) inhibitors with minimal thrombocytopenia. (査読付)	共	2007年9月	Biological & Pharmaceutical Bulletin 31, 305-308.	著者：Matsuoka H, Fujimura T, Unami A, Yamada T, Noto T, Takata Y, Yoshizawa K, Mori H, Aramori I, and Mutoh S. 抗癌剤であるHDAC阻害剤はT細胞のIL-2遺伝子発現を抑制することによりin vivoで免疫抑制効果を示した。しかし、ヒトにおいてもGATA-1遺伝子抑制による血小板減少症が起こる可能性があり、これを回避する目的で、9種類のHDAC阻害剤について、IL-2遺伝子、GATA-1遺伝子、巨核球の分化への影響の関連性を分析した。その結果、GATA-1遺伝子抑制のIC50とIL-2遺伝子抑制のIC50の比が高いほど、巨核球の分化への影響が強かった。この比をみることで、血小板への影響の少ないHDAC阻害剤を選択できるだろう。
74. Immunohistochemical analysis of expressions of hepatic cytochrome P450 in F344 rats following oral treatment with kava extract. (査読付)	共	2007年8月	Experimental and Toxicologic Pathology 58, 223-236.	著者：Clayton NP, Yoshizawa K, Kissling G, Burka LT, Chan PC, and Nyska A. 米国でサプリメントとして販売されているカバカバは肝臓障害の副作用が問題となっている。この抽出物をラットに14週間投与すると、肝臓重量の増加と肝臓の小葉中心性肥大が観察された。各種の肝臓薬物代謝酵素の誘導を免疫組織学的に検討した報告である。CYP2D1発現減少、CYP1A2, 2B1, 3A1発現増加が観察された。
75. Pulmonary lesions in female Harlan Sprague-Dawley rats following two-year oral treatment with dioxin-like compounds. (査読付)	共	2007年8月	Toxicologic Pathology 35, 880-889.	著者：Walker NJ, Yoshizawa K, Miller RA, Brix AE, Sells DM, Jokinen MP, Wyde ME, Easterling M, Nyska A. TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はラットに投与すると、肺に扁平上皮系腫瘍の発生が誘発される。その組織学的な特徴と化学物質による発生率の違いについて比較した。ダイオキシン化合物によりC

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
76. Mechanisms of HDAC inhibitor-induced thrombocytopenia. (査読付)	共	2007年2月	European Journal of Pharmacology 571, 88-96.	YP1A1の肺での発現亢進が観察され、これが発癌メカニズムに関与する可能性が考えられた。 著者：Matsuoka H, Unami A, Fujimura T, Noto T, Takata Y, Yoshizawa K, Mori H, Aramori I, and Mutoh S. 抗癌剤であるHDAC阻害剤はラット毒性試験において血小板減少症を誘発した。ヒト巨核球細胞株にHDAC阻害剤を作用させて、巨核球分化に関連するGATA-1遺伝子並びに10種類の造血因子遺伝子の変動を検索した。その結果、HDAC阻害剤はGATA-1遺伝子の発現を特異的に低下させ、血小板への分化も抑制した。この結果から、ヒトにおいてもGATA-1遺伝子抑制による血小板減少症が起こる可能性があることが示唆された。
77. PARP inhibitors accelerate N-methyl-N-nitrosourea-induced cataractogenesis in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2007年10月	In Vivo 21, 739-744	著者：Miki K, Yoshizawa K, Uehara N, Uri T, Matsuoka Y, Tsubura A. MNUを新生児期に投与すると白内障を誘発する。このモデルを用いてPARP阻害剤併用投与による影響を観察した。PARP阻害剤は網膜変性症モデルには病態抑制効果を示したが、白内障の病態は悪化させた。
78. Hepatocellular cytoplasmic inclusions in a cynomolgus monkey. (査読付)	共	2006年2月	Journal of Toxicologic Pathology 19, 191-194.	著者：Ikegami H, Okazaki Y, Matsumoto M, Nakatsuji S, Fujihira S, Yoshizawa K, Tsubota K, Murakami Y, Anagawa A, Oishi Y. 無処置のカニクイザルで観察された非ウイルス性の肝細胞細胞質内好酸性封入体の自然発生例について、臨床検査データと病理組織学的検査・電子顕微鏡学的観察結果の報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
79. Effects of gender and gonad status on N-methyl-N-nitrosourea-induced cataractogenesis and retinopathy in Lewis rats. (査読付)	共	2006年2月	In Vivo 20, 5-10.	著者：Miki K, Yoshizawa K, Shikata N, Yuri T, Matsuoka T, Tsubura A. MNU誘発のラット白内障及び網膜変性症に性差があるかどうかについて、無処置雌雄ラット、卵巣摘出ラット、精巣摘出ラットにMNUを投与して30週後に、各病態の発生率とその程度を比較した。無処置ラットでは雌のほうが白内障の程度が高く、卵巣摘出により減弱し、無処置雄レベルと同等であった。網膜変性症は全ての動物に発生し、その程度は処置による違いはなかった。
80. Gingival carcinogenicity in female Harlan Sprague-Dawley rats following two-year oral treatment with 2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin and dioxin-like compounds. (査読付)	共	2005年6月	Toxicologic Science 83, 64-77.	著者：Yoshizawa K, Walker NJ, Jokinen MP, Brix AE, Sells DM, Marsh T, Wyde ME, Orzech D, Haseman JK, Nyska A. TCDD、PCB126、PeCDF、PCB153を2年間投与した癌原性試験において、口腔発がん(扁平上皮癌)が観察された。その病理学的特徴と初期変化を含めたメカニズムについて、14週、31週、53週、2年の組織標本を用いて検討した。第三臼歯の歯肉ポケットの炎症と歯肉上皮過形成が初期病変として認められた。この部位には薬物代謝酵素が存在し、増殖活性が高いことが知られており、ダイオキシン化合物のターゲットと考えられる。
81. Ischemic Brain damage after ketamine and xylazine treatment in a young laboratory monkey (Macaca fascicularis). (査読付)	共	2005年6月	Contemporary Topics Laboratory Animals Sciences 44, 19-24. (Journal of the American Association for Laboratory Animal Science)	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Matsumoto M, Nyska A. 塩酸ケタミン・キシラジンを投与直後に強直性痙攣を呈した4歳令の雌カニクイザルについての症例報告である。広範な脳壊死をきたしてけいれん発作を起こしたものと考えられた。これらの薬剤は通常サルに使用される麻酔薬であるが、このような事故が起こりうることを理解しておく必要がある。
82. Extraskelatal osteosarcoma with cystic appearance in an aged Sprague-Dawley rat. (査読付)	共	2005年6月	Toxicologic Pathology 33, 760-763.	著者：Yoshizawa K, Matsumoto M, Oishi Y, Nyska A. 76週齢雄SD系ラットに観察された大腿筋の骨外性骨肉腫の症例について、その臨床経過、X線像、病理組織学的特徴について報告した。本例は多嚢胞性の構造示した点で極めて稀な症例と考えられた。
83. Olfactory epithelial metaplasia and hyperplasia in female Harlan Sprague-Dawley rats following chronic treatment with polychlorinated biphenyls. (査読付)	共	2005年3月	Toxicologic Pathology 33, 371-377.	著者：Nyska A, Yoshizawa K, Jokinen MP, Brix AE, Sells DM, Wyde ME, Orzech DP, Kissling GE, Walker NJ. TCDD、PCB126、PeCDF、PCB118を2年間投与した癌原性試験において、口腔発がん(扁平上皮癌)が観察され、鼻腔粘膜の変化(呼吸上皮化生・過形成)が認められた。この部位は薬物代謝活性を有する部位であることから、ダイオキシン化合物の代謝により毒性変化が生じる可能性が考えられた。ダイオキシン化合物の新たなターゲットと考えられる。
84. Mechanisms of exocrine pancreatic toxicity induced by oral treatment with 2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin and dioxin-like compounds. (査読付)	共	2005年11月	Toxicologic Science 85, 594-606.	著者：Yoshizawa K, Marsh T, Foley JF, Cai B, Peddada S, Walker NJ, Nyska A. TCDDを2年間投与した癌原性試験において、膵臓毒

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
orodibenzo-p-dioxin in female Harlan Sprague-Dawley rats. (査読付)				性(腺房萎縮・空胞化・慢性活動性炎症・動脈炎)・発がん性(腺腫・腺癌)が観察された。そのメカニズムについて、14週、31週、53週、2年の組織標本を用いて検討した。腺房のアポトーシス、CYP1A1の発現増加、増殖活性増加、CCKAレセプター発現増加が31週で認められ、これらの変化が毒性・発がん性の初期変化と考えられた。
85. A spontaneous ovarian immature teratoma in a juvenile rat. (査読付)	共	2004年7月	Journal of Toxicologic Pathology 17, 211-218.	著者：Tsubota K, Yoshizawa K, Fujihira S, Okazaki Y, Matsumoto M, Nakatsuji S, Yuji Oishi. 6週齢の雌ラット1例に卵巣の未熟奇形腫の症例を経験し、その臨床経過並びに病理組織学的な特徴を発表した。組織学的に3胚葉(神経組織、皮膚、膵臓、唾液腺、胃腸管、呼吸器系組織、平滑筋、横紋筋、骨、骨髄、軟骨、脂肪)から構成された。本例は日本での初めての報告であり、SDラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
86. Suppression of N-methyl-N-nitrosourea-induced photoreceptor apoptosis in rats by docosahexaenoic acid. (査読付)	共	2004年2月	Ophthalmic Research 36, 98-105.	著者：Moriguchi K, Yoshizawa K, Shikata N, Yuri T, Takada H, Hada T, Tsubura A. MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、食餌脂肪酸であるドコサヘキサエン酸(DHA)による病態抑制効果を経時的に観察した。DHA添加食を2週間摂取させた。DHA投与による視細胞アポトーシスの発現抑制によりMNU投与1週後の網膜外層の萎縮が抑制された。さらに投与3日以降の血清DHA量の増加がみられた。DHAはヒト網膜色素変性症の予防・治療法として有用であるかもしれない。
87. Effects of maternal xenoestrogen exposure on development of the reproductive tract and mammary gland in female CD-1 mouse offspring. (査読付)	共	2004年10月	Reproductive Toxicology 18, 803-811.	著者：Nikaido Y, Yoshizawa K, Danbara N, Tsujita-Kyoutoku M, Yuri T, Uehara N, Tsubura A. エストロゲン作用を有するgenistein, resveratrol, zearalenone, bisphenol A及びdiethylbestrolの雌生殖器・乳腺に対する影響について、CD-1に投与して経時的に観察したその結果、性周期の延長、卵巣の黄体消失、膣の角化、乳腺組織の成長の遅れが何れにも観察された。本論文は内分泌攪乱物質の雌への影響を比較した内容である。
88. Prepubertal zearalenone exposure suppresses N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary tumorigenesis but causes severe endocrine disruption in female Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2003年6月	Nutrition Cancer 47, 164-170.	著者：Nikaido Y, Yoshizawa K, Pei RJ, Yuri T, Danbara N, Hatano T, Tsubura A. MNUは雌ラットに高率に乳癌を誘発する。性成熟する前の15-19日令のSD系雌ラットに、エストロゲン作用を有する真菌毒であるゼアラレノン摂取し、28日令にMNUを投与して、乳腺発癌への影響を観察した。ゼアラレノン投与群は用量依存的に乳癌発生率を減少させた。また、ゼアラレノン投与群では膣開口が早まり、その後の性周期の乱れが長期間認められた。この作用はゼアラレノンの内分泌攪乱作用によるものと考えられた。
89. Functional rescue of N-methyl-N-nitrosourea-induced retinopathy by nicotinamide in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2003年6月	Current Eye Research 26, 355-362.	著者：Kiuchi K, Kondo M, Ueno S, Moriguchi K, Yoshizawa K, Miyake Y, Matsumura M, Tsubura A. MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を眼底検査や網膜電位の変化とともに観察した結果の発表である。MNU投与後7日では、MNU単独群では網膜電図の波形は完全に消失し、組織学的に網膜外層の萎縮が顕著であった。1000mg/kg ニコチンアミド処置群では網膜電図の波形は無処置対照群と同様であり、網膜障害も認められなかった。ニコチンアミド投与はヒト網膜色素変性症の治療法としての可能性がある。
90. Dietary docosahexaenoic acid protects against N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in rats. (査読付)	共	2003年2月	Experimental Eye Research 77, 167-173.	著者：Moriguchi K, Yuri T, Yoshizawa K, Kiuchi K, Takada H, Inoue Y, Hada T, Matsumura M, Tsubura A. MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、食餌脂肪酸であるドコサヘキサエン酸(DHA)、エイコサペンタエン酸(EPA)、リノレイン酸、パルミチン酸(PA)、リノール酸(LA)による病態抑制効果を長期摂食後に比較した。網膜衣装はLA群で88%、PA群で41%、EPA群で73%、EPA+DHA群で53%、DHA群で0%であり、DHAを摂取させることにより網膜変性症を完全に抑制した。
91. Rapid induction of cataract by a single intraperitoneal administration of N-methyl-N-nitrosourea to 15-day-old Sprague-Dawley (Jcl;SD) rats. (査読付)	共	2002年8月	Experimental and Toxicologic Pathology 54, 181-186.	著者：Kiuchi K, Yoshizawa K, Moriguchi K, Tsubura A. 15日齢の日本クレアと日本チャールスリバーのSD系ラットを用いて、MNU誘発白内障の感受性と用量相関性の違いを検証した。その結果、日本クレア産では白内障発生率100%であったのに対し、日本チャールスリバー産は30%であり、白内障感受性の違いが明らかであった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
92. Nicotinamide prevents N-methyl-N-nitrosourea-induced photoreceptor cell apoptosis in Sprague-Dawley rats and C57BL mice. (査読付)	共	2002年6月	Experimental Eye Research 74, 383-392.	著者：Kiuchi K, Yoshizawa K, Shikata N, Matsuura M, Tsubura A. MNU誘発のマウス・ラット網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を明らかにした。また、この効果には用量相関性がみられた。ニコチンアミド投与によってもMNU投与による視細胞DNAアルキル化は生じていることから、DNA修復機構に関与することにより病態抑制効果を示したと考えられる。ヒトの網膜色素変性症の新規治療法になりうるだろう。
93. Hepatocellular carcinoma with PIVKA-II production in a young laboratory monkey. (査読付)	共	2002年4月	Journal of Toxicologic Pathology 15, 61-68.	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Sano K, Tsubota K, Ikeda K, Fukuhara Y, Senzaki H, Tsubura A. 5歳の雄カニクイザルの肝細胞癌の症例を経験し、その臨床データ、病理組織学的特徴、免疫組織化学的特徴についての発表である。血清PIVKA-IIの上昇、免疫組織学的に腫瘍細胞はPIVKA-II、CK18、CEA、EMAが陽性であった。 若いサルでの腫瘍性病変の自然発生はほとんど報告がなく、本症例はカニクイザルの背景データ実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
94. Morphological characteristics of retinal degeneration induced by sodium iodate in mice. (査読付)	共	2002年3月	Current Eye Research 25, 373-379.	著者：Kiuchi K, Yoshizawa K, Shikata N, Moriguchi K, Tsubura A. ヨウ素酸ナトリウム投与によるラット網膜変性症の形態学的特徴を、病理組織学的・免疫組織化学的に解明した。経時的に観察したところ、6時間後に網膜色素上皮細胞の壊死が初期変化としてあらわれ、次いで視細胞のアポトーシスに至る過程が明らかとなった。投与後7日以降は正常領域と萎縮領域が入り混じったモザイクパターンを呈した。
95. Caspase-3 inhibitor transiently delays inherited retinal degeneration in C3H mice carrying rd gene. (査読付)	共	2002年2月	Graefe's Archive for Clinical and Experimental Ophthalmology 240, 214-219.	著者：Yoshizawa K, Kiuchi K, Nambu H, Senzaki H, Kiyozuka Y, Shikata N, Tsubura A. 遺伝性網膜変性症マウスであるC3Hマウスを用いて、Caspase3阻害剤の病態抑制効果を確認した。AC-DEV-CHO 2mg/kgを8日令から1日おきに投与して、13日令と17日令の網膜を検査した。その結果、13日令ではCaspase3阻害剤投与により網膜変性症が軽減されたが、17日令では差は見られなかった。Caspase3阻害剤は遺伝性モデルでは一時的に病態の進行を遅らせたものと考えられた。MNU誘発モデルとともに病態を抑制し、ヒト網膜色素変性症の新規治療法として有用かもしれない。
96. 26-Week carcinogenicity study of chlorpromazine in CB6F1-Tgrash2 mice by dietary dosing. (査読付)	共	2001年6月	Toxicologic Pathology 29, S238-240.	著者：Matsumoto M, Tsubota K, Noto T, Yamada Y, Suzuki M, Yoshizawa K, Fujii T, Oishi Y, Ohara K. rash2マウスを使用した短期癌原性試験のモニタリングとして向精神薬のクロルプロマジンの26週間混餌投与試験を実施した。その結果、クロルプロマジンには発がん性は認められなかった。この結果は2年間のマウス癌原性試験と同様の結果である。
97. MNU誘発新生仔期脱毛症モデルを用いたCepharanthinの脱毛遅延効果. (査読付)	共	2001年6月	アルカロイド研究会誌 27, 95-102.	著者：四方伸明, 義澤克彦, 木内克治, 楊継紅, 螺良愛郎. 新規の脱毛症実験動物モデルであるMNU誘発マウスモデルを用いた治療実験である。円形脱毛症治療薬であるセファランチンを塗布すると、脱毛領域から発毛が促進され、脱毛症治療効果が確認された。
98. 周生期genistein暴露によるICRマウス乳腺病変への影響. (査読付)	共	2001年1月	Basic Investigation of Breast Carcinoma (乳癌基礎研究) 10, 7-11.	著者：楊継紅, 義澤克彦, 中川宏之, 四方伸明, 螺良愛郎. CD-1マウスに対して植物性エストロゲンであるgenistein周生期暴露の影響をみたところ、自然発生乳癌の促進効果は見られず、唯一無処置群に対して新生児期大量genistein曝露群に、1匹当たりの過形成性腺胞の有意な増加を見るのみであった。しかし、genistein曝露群（胎児期並びに大量新生児期投与）では膣開口が有意に早く、35日令における体重や相対子宮・卵巣重量は軽い傾向にあり、胎児期genistein曝露群の発情期は有意に長く、周生期genistein曝露群は内分泌攪乱作用を呈していた。
99. Caspase-3 inhibitor rescues N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	2000年8月	Experimental. Eye Research. 71, 629-635.	著者：Yoshizawa K, Yang J, Senzaki H, Uemura Y, Kiyozuka Y, Shikata N, Oishi Y, Miki H, Tsubura A. MNU誘発ラット網膜変性症モデルを用いて、Caspase-3阻害剤の病変抑制効果を検証した。MNU投与時と10時間後にAc-DEV-CHO 4000ngを硝子内投与し、MNU投与24時間及び7日後の網膜を観察した。Ac-DEV-CHO処置群では網膜視細胞のアポトーシス発現が抑制され、7日後の網膜外層の萎縮の程度も軽減された。Caspase-3阻害剤はヒト網膜色素変性症の治療に利用できる可能性がある。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
100. Cataractogenesis in neonatal Sprague-Dawley rats induced by N-methyl-N-nitrosourea. (査読付)	共	2000年8月	Experimental. Eye Research. 71, 629-635.	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Nambu H, Yamamoto D, Yang J, Senzaki H, Miki H, Tsubura A. ニトロソ尿素を新生児ラットに投与すると、1週間後に肉眼的に検出可能な白内障を誘発できることを明らかにした。水晶体上皮細胞のアポトーシスにより水晶体線維が形成できずに白内障が生じることがわかった。また、ニトロソ尿素を20日齢に投与しても全く異常は見られず、硝子体内血管の存在と眼球内薬物濃度が関連することが推察された。MNU投与により水晶体上皮のDNAにアルキル化が起こり、次いで水晶体のBcl-2発現抑制、Bax発現増加が起こり、アポトーシスに至る過程が明らかになった。新規の白内障実験動物モデルとして有用であると考えられた。
101. Time-specific occurrence of alopecia in neonatal C57BL mice by N-methyl-N-nitrosourea and the therapeutic efficacy of tacrolimus hydrate. (査読付)	共	2000年4月	Pathology International 50, 175-184.	著者：Yoshizawa K, Nambu H, Yamamoto D, Yang J, Kiyozuka Y, Shikata N, Tsubura A. MNUをマウスに新生児期に投与すると、1週間後に全身性脱毛症を誘発することを明らかにした。この発症にはニトロソ尿素の投与時期の毛周期依存性があり、細胞増殖活性の高い発育期に投与した場合に毛母細胞特異的にアポトーシスを誘発することが原因であることを明らかにした。このモデルを用いて免疫抑制剤であるタクロリムス軟膏を塗布すると、脱毛促進効果を示した。MNUを用いたこのモデルは新規の脱毛症実験動物モデルとして有用であると考えられた。
102. Latent Infection of canine herpes virus in laboratory beagle dogs. (査読付)	共	2000年4月	Journal of Toxicologic Pathology 13, 1-6.	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Tsubota K, Ieoka K, Fujii T, Ohe O, Senzaki H, Tsubura A. ビーグル犬を用いた毒性試験において23例中8例にイヌヘルペスウイルスの不顕性感染が確認された。何ら症状や血液学的検査での異常は見られなかった。組織学的には腎臓の腎盂・乳頭部上皮細胞の細胞質にウイルス封入体が認められ、ほぼ全例で慢性腎盂炎が認められた。ウイルス封入体が認められなかった他の4例についても慢性腎盂炎がみられたため、ウイルス感染が示唆された。この実験で使用した動物室をクリーンアップした後は感染の発生は見られなかった。ビーグル犬の背景データ並びに飼育対応の注意点として実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
103. Retinal damage induced by cisplatin in neonatal rats and mice. (査読付)	共	2000年4月	Current Eye Research 20, 441-446.	著者：Yang J, Yoshizawa K, Shikata N, Kiyozuka Y, Senzaki H, Tsubura A. シスプラチンは小児がんでも使用される抗がん剤である。シスプラチンの眼障害に関しては白内障や角膜障害は報告があるものの、網膜への影響は明確でなかった。新生仔ラットおよびマウスにシスプラチンを投与することにより、網膜異形成の誘発に成功した。投与量の検討を行ったところ、致死量に近い量でのみ網膜の変化が観察されることが明らかとなった。
104. Relationship between mucormycosis, ferrokinesis and desferrioxamine. In an autopsy case of mucor thrombi in both ventricles in a patient with refractory anemia treated with desferrioxamine. (査読付)	共	1999年9月	病理と臨床 19, 981-985.	著者：仙崎英人, 植村芳子, 水岡寛, 山本大吾, 義澤克彦, 中川宏之, 上田恵, 蝶良愛郎. 不応性貧血にて輸血を受け、鉄除去剤desferrioxamine投与を投与された患者に心室内にムコール菌栓を認めた。心臓以外に肝臓、脾臓、甲状腺にも感染を認め、播種性ムコール症と診断された。鉄不飽和状態のトランスフェリンの低下がムコール感染症に関与していた極めて稀な症例である。
105. An autopsy case of malignant mesothelioma with osseous and cartilaginous differentiation. Bone morphogenetic protein-2 in mesothelial cells and its tumor. (査読付)	共	1999年9月	Digestive Diseases and Sciences 44, 1626-1631.	著者：Kiyozuka Y, Miyazaki H, Yoshizawa K, Senzaki H, Yamamoto D, Inoue K, Bessho K, Okubo Y, Kusumoto K, Tsubura A. 72歳男性に認められた腹膜中皮腫で、広範な石灰沈着、骨・軟骨形成が観察された。形態学的に上皮型と肉腫型の二相性を占めし、肉腫型の領域でこれらの変化が顕著であった。免疫組織学的に腫瘍細胞には骨形成性蛋白2型の発現がみられ、RT-PCRにてmessengerRNAの発現も確認された。骨・軟骨形成が顕著な悪性中皮腫は極めて稀である。
106. Protective effects of pregnancy and lactation against N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinomas in female Lewis rats. (査読付)	共	1999年4月	Carcinogenesis 20, 623-628.	著者：Yang J, Yoshizawa K, Nandi S, Tsubura A. LEWIS系ラットを用いて、MNU誘発乳癌発生に関する妊娠・授乳の影響について検討した。MNU投与前に妊娠・授乳させた場合、妊娠・授乳させなかった場合と比べて、乳癌発生率は有意に減少し(22%と72%)、1匹当たりの乳癌個数の減少(0.22個と0.86個や発生時期の延長も観察された。さらに、妊娠・授乳させた場合、正常乳腺組織におけるエストロゲンレセプター・プロゲステロンレセプターの発現低下、増殖活性の低下が明らかであった。若い時期の妊娠・授乳は乳腺発癌感受性を低下させることがわかった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
107. Mechanisms of photoreceptor cell apoptosis induced by N-methyl-N-nitrosourea in Sprague-Dawley rats. (査読付)	共	1999年11月	Laboratory Investigation 79, 1359-1367.	著者：Yoshizawa K, Nambu H, Yang J, Oishi Y, Senzaki H, Shikata N, Miki H, Tsubura A. 7週齢雌SD系ラットにMNUを単回投与して経時的に、形態学的検査、アポトーシス発現、視細胞DNAアルキル化の状態、網膜におけるBcl-2並びにBax蛋白の発現、caspase3, 6, 8の活性測定を実施した。MNU投与12時間から視細胞DNAのアルキル化が出現し、Bcl-2発現抑制並びにBax発現増加、caspase3, 6, 8の活性増強が観察され、視細胞アポトーシスの引き金になっていることが示された。MNUによる視細胞アポトーシスのカスケードを明らかにした初めての報告であり、ヒト網膜色素変性症治療のヒントになりえるかもしれない。
108. N-methyl-N-nitrosourea誘発Lewisラット乳癌の妊娠/授乳による抑制機構。 (査読付)	共	1999年10月	ホルモンと臨床, 47巻特別増刊号, 内分泌病理学 最近の進歩1999, 医学の世界社, 東京, 175-181.	著者：楊継紅, 義澤克彦, 四方伸明, 螺良愛郎。 LEWIS系ラットを用いて、MNU誘発乳癌発生に関する妊娠・授乳の影響について検討した結果、若い時期の妊娠・授乳は乳腺発癌感受性を低下させることがわかった。ヒトの疫学データとも一致しており、ヒト女性乳癌のよいモデルといえよう。
109. Age-specific and dose-dependent retinal dysplasia and degeneration induced by a single intraperitoneal administration of N-methyl-N-nitrosourea to rats. (査読付)	共	1998年6月	Journal of Toxicologic Pathology 11, 127-131.	著者：Nambu H, Yoshizawa K, Yang J, Yamamoto D, Tsubura A. MNU 35-105mg/kgを0, 21, 50, 150日齢のSD系ラットとLEWIS系ラットに単回投与し、網膜病変を形態学的に観察した。0日齢投与の場合、網膜ロゼット形成を特徴とする網膜異形成が観察された。21日齢以降ではほぼ全例で網膜外層の萎縮が特徴的であった。いずれの病態も網膜神経芽細胞と視細胞のアポトーシスが原因であった。
110. Factors related to axillary lymph node metastasis in T1 breast carcinoma.	共	1998年6月	Oncology Reports 5, 459-462.	著者：Singh Y, Nambu H, Yoshizawa K, Hatano T, Hioki K, Tsubura A. 所属リンパ節に転移の見られたヒトのT1型乳癌の38例について、リンパ節転移の見られなかった例と、その組織像、エストロゲンレセプター、プロゲステロンレセプター、Bcl-2の発現並びにKi67免疫染色による腫瘍細胞の増殖活性を比較・分析した。その結果、所属リンパ節に転移の見られた乳癌の場合、腫瘍内に毛細血管の数が多く、Ki67陽性率が高く（腫瘍細胞の増殖活性が高い）、Bcl-2発現増加がみられた。これらのパラメータはリンパ節転移の可能性を考えるよい指標であろう。
111. Spontaneous lesions in Crj:CD(SD) IGS rats versus in Jcl:SD rats used in toxicity studies - histopathological findings? (査読付)	共	1998年12月	CD(SD) IGS-1999, 23-28.	著者：Noto T, Oishi Y, Fujihira S, Matsumoto M, Yoshizawa K, Tsubota K, Hashimoto M, and Ohara K. 藤沢薬品工業安全性研究所（現アステラス製薬）で過去に実施されたCrj:CD(SD) IGS系ラット（雌雄280例）とJcl:SD系ラット（雌雄230例）の毒性試験で観察された自然発生病変に関する背景データの報告である。両系統とも炎症性変化がハーダー腺以外の各臓器で観察されたが、Crj:CD(SD) IGS系ラットでその頻度が低かった。
112. Inhibition effects of pregnancy and lactation against N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinomas in female Lewis rats. (査読付)	共	1998年12月	22nd congress of the international association for breast cancer research, 1998, 205-209.	著者：Tsubura A, Yang J, Yoshizawa K, Senzaki H, Shikata N. LEWIS系ラットを用いて、MNU誘発乳癌発生に関する妊娠・授乳の影響について検討した。MNU投与前に妊娠・授乳させた場合、妊娠・授乳させなかった場合と比べて、乳癌発生率は有意に減少し、1匹当たりの乳癌個数の減少や発生時期の延長も観察された。さらに、妊娠・授乳させた場合、正常乳腺組織におけるエストロゲンレセプター・プロゲステロンレセプターの発現低下、増殖活性の低下が明らかであった。若い時期の妊娠・授乳は乳腺発癌感受性を低下させることがわかった。
113. Immunohistochemical localization of epithelial glycoprotein EGP-2 and carcinoembryonic antigen in normal colonic mucosa and colorectal tumors. (査読付)	共	1998年12月	Anticancer Research 18, 3669-3676.	著者：Ogura E, Senzaki H, Yoshizawa K, Hioki K, Tsubura A. ヒト大腸癌84例と腺癌23例について、上皮性グリコプロテインであるEGP-2と上皮系腫瘍マーカーであるCEAの発現を解析した。EGP-2の発現は腫瘍細胞の分化度が高いほど陽性率が高い傾向があった。一方、CEAの発現は悪性度が高いほど（分化度が低い）陽性率が高かった。EGP-2とCEAの発現は逆相関を示すことが明らかとなった。
114. Heterotopic polyodontia in a cynomolgus monkey. (査読付)	共	1997年10月	Laboratory Animals 32, 106-109.	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Fujii T. 6歳の実験用雄カニクイザルにみられた異所性歯芽形成の症例についての報告である。サルでの初めての報告であり、貴重な背景データと考えられる。
115. Congenital intrahepatic arteriovenous fistulae in a young beagle dog. (査読付)	共	1997年10月	Toxicologic Pathology 25, 495-499.	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Matsumoto M, Fukuhara Y, Makino N, Noto T, Fujii T. 毒性試験で使用するビーグル犬は1歳以下と若い動

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
116. Malignant schwannoma of the intracranial trigeminal nerve in a 19 week-old female Sprague-Dawley Rat. (査読付)	共	1996年9月	Journal of Toxicologic Pathology 9, 107-112.	物を使用するため、肝臓の自然発生病変は極めて稀である。7か月で状態悪化のため安楽死させた動物に先天性肝動静脈フィステルを認めた。この症例の臨床症状、血液検査、全身の病理組織学的検査結果について報告した。実験動物用の若いビーグル犬での発生はは世界での初めてであり、ビーグル犬の背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。 著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Makino N, Suzuki J, Matsumoto M, Yamauchi K, Fujihira S, Fujii T. 老齢SDラットでは中枢神経系腫瘍の自然発生が報告されているが、若齢ラットでの自然発生は過去に報告がない。19週齢の症例を経験し、その臨床経過並びに病理組織学的な特徴を発表した。脳、脊髄内に浸潤性に増殖する極めて悪性度が高いと判断された。若齢ラットでの自然発生はこれまでに報告はなく、SDラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
117. Congenital mesoblastic nephroma in a young beagle dog. (査読付)	共	1996年9月	Journal of Toxicologic Pathology 9, 101-105.	著者：Yoshizawa K, Oishi Y, Makino N, Suzuki J, Matsumoto M, Fukuhara Y, Fujihira S, Fujii T. ビーグル犬を用いた毒性試験の対照群に観察された腎臓の自然発生報告である。腎芽腫の特殊な型である先天性間葉芽腎腫といわれ、線維芽細胞様の腫瘍細胞が増殖するのが特徴的である。本例は日本での初めての報告であり、ビーグル犬の背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
118. Spontaneous occurring mammary adenocarcinoma in a 10-wk-old female rat.	共	1995年12月	Toxicologic Pathology 23, 696-700.	著者：Oishi Y, Yoshizawa K, Suzuki J, Makino N, Hase K, Yamauchi K, Tsubura A. 老齢SDラットでは乳癌の自然発生が高率にみられるが、若齢ラットでの乳癌発生は過去に報告がない。10週齢での乳癌の発生が症例を経験し、その臨床経過並びに病理組織学的な特徴を発表した。本例は日本での初めての報告であり、SDラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
119. Naturally occurring ophthalmic lesions in cynomolgus monkeys used in toxicity and pharmacological studies. (査読付)	共	1994年10月	Animal Eye Research 34, 147-154.	著者：Fujihira S, Matsumoto M, Yoshizawa K, Oishi Y, Iwanami K, Fujii T. 藤沢薬品工業安全性研究所（現アステラス製薬）で過去に実施されたカニクイザルの毒性試験・薬理試験（259例）で観察された眼病変に関する背景データの報告である。単核細胞浸潤、白内障網膜の嚢状変性、視神経コーススなどの変化が観察された。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
120. The high incidence of atrial thrombosis in mice given doxorubicin. (査読付)	共	1993年8月	Toxicologic Pathology 21, 362-368.	著者：Fujihira S, Yamamoto T, Matsumoto M, Yoshizawa K, Oishi Y, Fujii T, Noguchi H, Mori H. 抗癌剤であるドキソルビシンを用いたマウスの薬理試験において、死亡例が多発した。その死亡原因を明らかにするために、全身の病理検査を実施した。その結果、高率に右心耳を中心に血栓症が観察された。ドキソルビシンによる心房内血栓症の報告はなく、世界で初めて報告である。
121. Malignant atriocaval tumor of the heart in an old male Sprague-Dawley rat. (査読付)	共	1993年8月	Journal of Toxicologic Pathology 6 (Suppl), 89-95.	著者：Oishi Y, Matsumoto M, Yoshizawa K, Suzuki J, Fujihira S. SD系ラットの2年間癌原性試験の対照群に発生した心臓の悪性大動脈球腫瘍の1例について、全身解剖し、その形態学的な特徴を検索した。組織学的にムチン産生のみられる上皮様細胞が管腔構造を形成し、肺への転移が観察された。これまでにSD系ラットでの自然発生報告はなく、貴重な背景データと考えられる。
122. Spontaneous pituitary adenomas of the pars intermedia in mice and rats: histopathological and immunocytochemical studies. (査読付)	共	1992年9月	Journal of Toxicologic Pathology 5, 223-231.	著者：Oishi Y, Matsumoto M, Yoshizawa K, Fujihira S. ラット・マウスを用いた2年間癌原性試験の対照群に発生した下垂体中葉腺腫（マウス2例・ラット4例）について、形態学的特徴に加えて、免疫組織学的特徴（POMC-derived peptide, ACTH, ?MSH, ?MSH, ?MSH, END）を検索した。6例全ての中葉腺腫はこれら抗体に陽性を示し、ホルモン産生腫瘍であることが明らかとなった。げっ歯類での下垂体中葉腺腫の免疫組織化学的な報告は貴重な背景データと考えられる。
123. Ultrastructure of the thymus in chicks inoculated with chicken anaemia agent (MSB1-TK5803 strain). (査読付)	共	1989年8月	Avian Pathology 18, 605-617.	著者：Goryo M, Hayashi S, Yoshizawa K, Umemura T, Itakura C, Yamashiro S. 鶏貧血因子株（MSB1-TK5803）を1日令の新生鶏に筋肉内投与し、貧血の程度と胸腺・骨髄の形態学的変化を経時的に観察した。投与2週目から貧血傾向を示し、骨髄は黄色髄を呈した。投与1週後から胸腺リンパ球は変性・壊死に陥り、電子顕微鏡観察により核

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
124. 犬の汎骨炎の1例 (査読付)	共	1989年4月	日本獣医師会雑誌 42, 339-342.	内に14-18nmのウイルス様粒子が観察された。このウイルス粒子は骨髄内でも観察された。 著者：義澤克彦, 御領政信, 梅村孝司, 林隆敏。 雄4歳のジャーマン・シェパードは歩行異常・腰部知覚過敏を示し、予後不良として剖検された。剖検では、左右上・前腕と大腿骨に主座した内・外骨膜過剰骨増殖が認められた。組織学的に密度様々な海綿状類骨ないし幼若骨が多中心性融合性に増殖し、破骨細胞による骨吸収も共存した。他臓器では上皮小体主細胞と甲状腺C細胞の腫大、慢性フィラリア症による内臓及び大脳病変がみられた。以上の所見から、本症例は遅発性の汎骨炎と診断された。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 15th European Congress of Toxicologic Pathology	共	2017年9月	INHAND: INTERNATIONAL HARMONIZATION OF NOMENCLATURE AND DIAGNOSTIC CRITERIA FOR LESIONS - AN UPDATE ? 2017 Rittinghausen, S(1), Baker, J(2), Bradley, A(3), Goodman, DG(4), Harada, T(5), Hayashi, S(6), Herbert, R(7), Kellner, R(1), Mahler, B(7), Meseck, E(8), Nolte, T(9), Ruehl-Fehlert, C(10), Vahle, J(11), Yoshizawa, K(12), Keenan, CM(13)	
2. 骨盤内病変にて発見された悪性黒色腫の1剖検例。(ポスター発表)	共	2016年5月	第105回日本病理学会総会。(仙台)	発表者：結城美智子, 榎本祐子, 木下勇一, 義澤克彦, 冨貴司, 螺良愛郎。 皮膚の悪性黒色腫を手術摘出した数年後に骨盤内に転移・播種し、病理解剖を行った症例についての報告である。
3. ミード酸のluminal A 乳癌に対する効果とその作用機構。(ポスター発表)	共	2016年5月	第105回日本病理学会総会。(仙台)	発表者：木下勇一, 義澤克彦, 浜崎 景, 河島 洋, 榎本祐子, 結城美智子, 冨貴司, 螺良愛郎。 KPL-1ヒト乳癌細胞をヌードマウスに移植し、ミード酸食を食べさせて、乳癌細胞増殖への影響について検討した。その結果、ミード酸は乳癌発育を抑制し、そのメカニズムにVEGF-VEGFR経路を介した細胞増殖抑制効果が関与していた。
4. 緑茶抽出物によるHO-1抑制を介したMNU誘発視細胞アポトーシスの制御。(口頭発表)	共	2016年5月	第105回日本病理学会総会。(仙台)	発表者：榎本祐子, 義澤克彦, 木下勇一, 結城美智子, 冨貴司, 四方伸明, 螺良愛郎 緑茶抽出物をMNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに投与することにより、病態抑制効果を明らかにした。そのメカニズムは HO-1抑制を介したMNU誘発視細胞アポトーシスの制御によることを明らかにした。
5. N-methyl-N-nitrosourea誘発ラット神経鞘細胞増殖病変の特徴。(ポスター発表)	共	2016年5月	第105回日本病理学会総会。(仙台)	発表者：義澤克彦, 木下勇一, 榎本祐子, 結城美智子, 冨貴司, 四方伸明, 螺良愛郎。 MNUは神経行性の発がん物質と知られており、今回MNUを雄ラットに投与して末梢神経鞘腫の33症例に関して、免疫組織学的に検討を行ない、ヒトの腫瘍との比較を行った。
6. A spontaneously occurring malignant ovarian Sertoli cell tumor in a young Sprague-dawley rat. (ポスター発表)	共	2016年3月	第3回日本獣医病理専門家協会学術集会。(三鷹)	発表者：Yoshizawa K, Kinoshita Y, Emoto Y, Yuki M, Yuri T, Shikata N, Elmore SA, Tsubura A. 若齢ラットの自然発生腫瘍は非常に珍しく、その詳細は明らかでない。今回、卵巣の悪性セルトリ細胞腫の症例を経験し、ヒトの症例との比較を行った。
7. Characterization of mammary carcinomas in male and female rats after MNU exposure. (ポスター発表)	共	2016年1月	第32回日本毒性病理学会。(高松)	発表者：義澤克彦, 結城美智子, 木下勇一, 榎本祐子, 冨貴司, 四方伸明, Susan A Elmore, 螺良愛郎。 雄乳癌は非常に珍しい発生であり、MNUを雄ラットに投与することにより、雄乳癌を誘発できることを発見した。ヒトの男性乳癌との生物学的・分子病理学的な相違について検討した。その結果、MNU誘発乳癌は生物学的にヒト男性乳癌と異なることが示唆された。
8. ミード酸のMNU誘発乳癌に対する抑制効果。(口頭発表)	共	2015年9月	第24回乳癌基礎研究会。(いわき)	発表者：螺良愛郎, 木下勇一, 義澤克彦, 浜崎 景, 榎本祐子, 冨貴司, 結城美智子, 河島 洋, 四方伸明。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
9. ミード酸はKPL-1ヒト乳癌細胞の増殖を抑制する. (ポスター発表)	共	2015年4月	第104回日本病理学会. (名古屋)	ヒト乳癌細胞株を移植したヌードマウスにミード酸添加食を食べさせて、乳癌増殖の程度を基礎食群と比較した。ミード酸を食べさせたマウスでは乳癌発育が抑制された。この結果から、ミード酸のin vivoでの乳癌発育抑制作用が明らかとなった。 発表者：木下勇一，義澤克彦，浜崎 景，河島 洋，榎本祐子，結城美智子，塚 貴司，螺良愛郎。
10. MNU誘発白内障ならびに網膜変性症モデルに対するミード酸補給の効果. (ポスター発表)	共	2015年4月	第104回日本病理学会. (名古屋)	ヒト乳癌細胞株を用いてミード酸の増殖抑制効果を検討した。ミード酸投与により、乳癌細胞株の増殖活性抑制並びに血管内皮細胞レセプターの発現が抑制された。この結果から、ミード酸が直接的に乳癌発育抑制作用を持つと同時に、血管増殖抑制作用も関与することが示唆された。 発表者：榎本祐子，義澤克彦，浜崎 景，木下勇一，結城美智子，塚 貴司，河島 洋，螺良愛郎。
11. 剖検時に偶然発見された肝臓多発海綿状血管腫を伴う硬化性血管腫の1例. (ポスター発表)	共	2015年4月	第104回日本病理学会. (名古屋)	ミード酸は生体内でアラキドン酸が欠乏した時に産生される脂肪酸であり、血管新生抑制作用があることが報告されている。ミード酸のMNU誘発白内障ならびに網膜変性症モデルに対する効果を検討した。その結果、抑制効果は見られなかった。 発表者：結城美智子，榎本祐子，木下勇一，義澤克彦，塚 貴司，螺良愛郎。
12. Diagnostic intraocular lesions using vitreous humor and intraocular perfusion fluid cytology. (口頭発表)	共	2015年3月	Japan・Taiwan・Korea Cytotechn Joint Meeting . (福岡)	肝臓多発海綿状血管腫を伴う硬化性血管腫の症例について、臨床病理データと全身の病理組織学的データについての報告である。 発表者：Kinoshita Y, Takasu K, Kobayashi T, Yuri T, Yoshizawa K, Tsubura A, Shikata N.
13. INHAND and collaboration with the FDA on SEND ? Background and current Status. (ポスター発表)	共	2015年11月	36th Annual Meeting, American College of Toxicology. (Sandiego, USA)	眼内悪性リンパ腫をはじめ様々な眼内疾患は慢性炎症との鑑別が必須であり、炎症の場合は薬物療法のみで感知する可能性が残されている。このような場合、毛様体辺縁部から硝子体液を採取し細胞診での診断が有用である。 発表者：Keenan CM, Baker J, Bradley A, Goodman DG, Harada T, Herbert R, Kaufmann W, Kellner R, Mahler B, Meseck E, Nolte T, Rittinghausen S, Vahle J, Yoshizawa K.
14. N-methyl-N-nitrosourea誘発毛包脂腺系病変の免疫組織学的検討. (ポスター発表)	共	2015年10月	第56回日本組織細胞化学会. (枚方市)	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の活動状況と米国FDAとの協力体制についてのupdate報告である。 発表者：結城美智子，榎本祐子，木下勇一，義澤克彦，塚 貴司，四方伸明，螺良愛郎。
15. N-methyl-N-nitrosourea誘発ラット雄乳癌の免疫組織学的特徴：雌との相違. (ポスター発表)	共	2015年10月	第56回日本組織細胞化学会. (枚方市)	MNUを雄ラットに投与することによって、毛包脂腺系腫瘍を誘発することを明らかにした。その初期発生について免疫組織学的に検討し、ヒトの病態との比較を行った。 発表者：義澤克彦，結城美智子，木下勇一，榎本祐子，塚 貴司，四方伸明，螺良愛郎。
16. VEGF-VEGFR経路を介したエイコサトリエン酸のKPL-1ヒト乳癌細胞に対する腫瘍増殖抑制効果. 9 VEGF-VEGFR経路を介したエイコサトリエン酸のKPL-1ヒト乳癌細胞に対する腫瘍増殖抑制効果. (ポスター発表)	共	2015年10月	第56回日本組織細胞化学会. (枚方市)	雄乳癌は非常に珍しい発生であり、MNUを雄ラットに投与することにより、雄乳癌を誘発できることを発見した。ヒトの男性乳癌との生物学的・分子病理学的な相違について検討した。その結果、MNU誘発乳癌は生物学的にヒト男性乳癌と異なることが示唆された。 発表者：木下勇一，義澤克彦，榎本祐子，結城美智子，塚 貴司，四方伸明，螺良愛郎。
17. Morphological analysis of the pancreas and liver in diabetic KK-Ay mice treated with zinc or oxovanadium complexes. (ポスター発表)	共	2014年6月	金属の関与する生体関連反応シンポジウム. (京都)	KPL-1ヒト乳癌細胞をヌードマウスに移植し、ミード酸食を食べさせて、乳癌細胞増殖への影響について検討した。その結果、ミード酸は乳癌発育を抑制し、そのメカニズムにVEGF-VEGFR経路を介した細胞増殖抑制効果が関与していた。 発表者：Moroki T, Yoshikawa Y, Yoshizawa K, Tsubura A, Yasui H.
18. MNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに対する緑茶抽出物の有用性. (ポスター発表)	共	2014年4月	第103回日本病理学会. (広島)	1型糖尿病モデルであるKK-Ayマウスに、バナジウム金属の錯体を投与して、その治療効果を形態学的に観察した。投与群では、血糖値の低下に加えて、肝細胞脂肪化の抑制、膵臓ランゲルハンス島肥大の抑制がみられ、糖尿病治療効果が明確であった。 発表者：榎本祐子，義澤克彦，結城美智子，木下勇一，塚 貴司，四方伸明，螺良愛郎。
19. 肝内胆管癌に起因したTrousseau症候群の剖検例. (ポスター発表)	共	2014年4月	第103回日本病理学会. (広島)	緑茶には抗酸化作用があり、適量では様々な疾患の予防に寄与する可能性が示唆されている。緑茶抽出物をMNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに投与することにより、病態抑制効果を明らかにした。MNUによる視細胞の酸化ストレスを、緑茶抽出物が軽減させることによる。 発表者：塚 貴司，加藤孝太，廣原淳子，坂本直樹，木下勇一，榎本祐子，結城美智子，義澤克彦，螺良

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
20. LBCを用いた術中診断の検討。(口頭発表)	共	2014年2月	第26回大阪病理研究会. (吹田)	愛郎. 肝胆管癌の患者では、凝固因子の活性化による多発性血栓症が生じることがあり、中枢神経系の生じた場合は特徴的な神経症状を発症し、Trousseau症候群といわれている。この疾患患者の臨床病理学データと全身の病理組織学的所見の関係を明らかにした。 発表者：木下勇一、鷹巣晃昌、垾 貴司、義澤克彦、結城美智子、榎本祐子、螺良愛郎、四方伸明。 術中迅速中の生検方法の改良法として、LBC法の有用性について解説し、いくつかの具体例について通常法と比較した。
21. INHAND and collaboration with the FDA on SEND ? Background and current Status. (ポスター発表)	共	2014年11月	American College of Toxicology. (Orland, USA)	発表者：Keenan, CM, Baker, J, Bradley, A, Goodman, DG, Harada, T, Herbert, R, Kaufmann, W, Kellner, R, Mahler, B, Meseck, E, Nolte, T, Rittinghausen, S, Vahle, J, and Yoshizawa, K. International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の活動状況と米国FDAとの協力体制についての報告である。
22. 腐食性物質服用により死亡した2剖検例。(口頭発表)	共	2014年11月	日本法医学会近畿地方集会. (西宮)	発表者：榎本祐子、長崎 靖、義澤克彦、螺良愛郎。 クレゾール並びに水酸化ナトリウム溶液を服用して自殺した老人2例について全身解剖を行い、化学熱傷の部位・組織型の特徴を比較した。クレゾールは上部消化管の凝固壊死、水酸化ナトリウム溶液は胸部臓器・上部消化管の融解壊死が特徴であった。
23. LC-MS/MSによる茶葉抽出液投与ラットにおける網膜中エピガロカテキンガレート(EGCG)含量の測定。(ポスター発表)	共	2014年10月	日本医用マスペクトル学会. (千葉)	発表者：五十嵐一雄、榎本祐子、大瀧 純、青木康博、前野善孝、義澤克彦、螺良愛郎。 網膜中エピガロカテキンガレート測定は微量であるためにこれまでは困難であった。精度が高く再現性のある新規測定方法を確立した。
24. 緑茶抽出物誘発のラット肝臓毒性の特徴。(ポスター発表)	共	2014年1月	第30回日本毒性病理学会. (徳島)	発表者：榎本祐子、義澤克彦、木下勇一、垾 貴司、吉川 豊、茶山和敏、螺良愛郎。 緑茶抽出物由来のサプリメントはダイエット効果が見られることから欧米で減量のために使用されている。しかし、重篤な肝臓障害が問題となり、一部の国で発売中止となった。緑茶抽出物をラットに単回投与することによって、ヒトと同様の劇症肝炎の病態を作成することに成功した。病態発症に肝細胞の酸化ストレスが関与していた。
25. Metastatic rhabdomyosarcoma derived from carcinosarcoma of uterus detected by pleural effusion. (口頭発表)	共	2013年9月	日本臨床分子形態学会. (福岡)	発表者：木下勇一、鷹巣晃昌、垾 貴司、榎本祐子、義澤克彦、四方伸明、螺良愛郎。 子宮がん発の癌肉腫が全身に転移し、転移先で横紋筋肉腫に分化した貴重な症例について、臨床病理データ、病理組織学的・免疫組織学的データについての報告である。
26. N-Methyl-N-nitrosourea-induced renal tumors in rats: Immunohistochemical comparison to human Wilms tumors. (ポスター発表)	共	2013年6月	Soc Toxicol Pathol. (Portland, USA)	発表者：Yoshizawa K, Kinoshita Y, Emoto Y, Yuri T, Shikata N, Tsubura A. MNUは新生児ラットに投与すると腎臓腫瘍(腎芽腫、腎細胞癌、悪性間葉系腫瘍)を誘発することが知られている。これらの腫瘍とヒト小児に発生するウィルムス腫瘍の相違について、免疫組織学的に比較した。
27. 妊娠に関連するホルモンによる乳癌治療の可能性：hCGによるヒト乳癌細胞株の増殖抑制効果。(ポスター発表)	共	2013年6月	第102回日本病理学会. (札幌)	発表者：垾 貴司、榎本祐子、木村彩子、木下勇一、義澤克彦、螺良愛郎。 ヒト絨毛性ゴナドトロピンによる乳癌治療効果の作用を裏付けるために、ヒト乳癌細胞株を用いてヒト絨毛性ゴナドトロピンによる増殖抑制効果とそのメカニズムに関する発表である。
28. MNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに対するクルクミンの有用性。MNU誘発ラット網膜色素変性症モデルに対するクルクミンの有用性。(ポスター発表)	共	2013年6月	第102回日本病理学会. (札幌)	発表者：榎本祐子、義澤克彦、木村彩子、木下勇一、垾 貴司、四方伸明、螺良愛郎。 クルクミンはカレーに含まれる黄色物質であり、酸化作用を有することが知られている。MNU誘発ラット網膜色素変性症モデルを用いて、クルクミンを経口併用投与すると、網膜変性の程度が軽減された。そのメカニズムはMNU投与による網膜の酸化ストレスを抑制することが関与した。
29. KPL-1ヒト乳癌細胞株移植ヌードマウスを用いたミード酸の抗腫瘍効果の検討。(ポスター発表)	共	2013年6月	第102回日本病理学会. (札幌)	発表者：木下勇一、義澤克彦、榎本祐子、木村彩子、上原範久、垾 貴司、河島 洋、浜崎 景、浜崎智仁、螺良愛郎。 ミード酸は生体内でアラキドン酸が欠乏した時に産生される脂肪酸であり、血管新生抑制作用があることが報告されている。ヒト乳癌細胞株を移植したヌードマウスにミード酸添加食を食べさせて、乳癌増殖の程度を基礎食群と比較した。ミード酸を食べさせたマウスでは乳癌発育が抑制された。この結果から、ミード酸のin vivoでの乳癌発育抑制作用が明らかとなった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
30. MNU-induced renal tumors in rats: Immunohistochemical comparison to human Wilms tumors. (ポスター発表)		2013年3月	第155回日本獣医学会. (東京)	発表者：義澤克彦, 木下勇一, 榎本祐子, 木村彩子, 冨貴司, 四方伸明, 螺良愛郎. MNUは新生児ラットに投与すると腎臓腫瘍(腎芽腫、腎細胞癌、悪性間葉系腫瘍)を誘発することが知られている。これらの腫瘍とヒト小児に発生するウィルムス腫瘍の相違について、免疫組織学的に比較した。特にラットとヒトの生物学的な比較は初めての報告である。
31. 毛様体辺縁部硝子体手術材料を用いた眼内悪性リンパ腫の診断.(口頭発表)	共	2013年11月	大阪病理研究会. (大阪)	発表者：木下勇一, 小林忠男, 鷹巢晃昌, 冨貴司, 義澤克彦, 結城美智子, 榎本祐子, 市邊和男, 松永志保, 鈴木麻友香, 南雲サチ子, 螺良愛郎, 四方伸明. 眼内悪性リンパ腫の術前診断には慢性炎症との鑑別が必須であり、炎症の場合は薬物療法のみで感知する可能性が残されている。このような場合、毛様体辺縁部から硝子体液を採取し細胞診での診断が有用である。
32. Inhibition of in vivo cell motility and invasive potential by microRNA-148a in human breast cancer cells. (ポスター発表)	共	2013年10月	第72回日本癌学会学術総会. (横浜)	発表者：上原範久, 義澤克彦. 転移性・浸潤性を示すヒト乳癌細胞株にmicroRNA-148aを遺伝子導入すると、転移性・浸潤性が消失した。ヒト乳癌患者の乳癌局所にmicroRNA-148aを遺伝子導入することで、新しい治療法につながる可能性がある。
33. N-methyl-N-nitrosourea誘発ラット膵臓腺房過形成：その特徴とアラキドン酸投与によるプロモーション効果.(口頭発表)	共	2012年9月	第154回日本獣医学会. (盛岡)	発表者：義澤克彦, 上原範久, 榎本祐子, 木下勇一, 守口徹, 浜崎智仁, 螺良愛郎. MNUはラットに膵臓腫瘍を誘発することが知られている。妊娠期・授乳期各3週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、3週齢時の子供ラットにMNUを投与し、膵臓の腺房過形成(前癌病変)の出現程度を基礎食群と比較した。その結果、腺房過形成の頻度・面積がアラキドン酸食群では増加し、プロモーション作用があることが明らかとなった。
34. Urothelial carcinoma with trophoblastic differentiationの2例.(口頭発表)	共	2012年9月	第44回日本臨床分子形態学会. (高知)	発表者：木下勇一, 鷹巢晃昌, 冨貴司, 足立靖, 三城弥範, 木村彩子, 上原範久, 義澤克彦, 螺良愛郎. 尿路上皮癌の中で、その成分が絨毛上皮へ分化するタイプは極めて稀であり、悪性度が高い。2例の症例について、臨床病理データと病理組織学的所見について発表し、過去の報告例と比較した。
35. Arachidonic acid supplementation during gestational, lactational and post-weaning periods prevents retinal degeneration induced by N-methyl-N-nitrosourea in young Lewis rats. (ポスター発表)	共	2012年7月	第39回日本毒性学会/The 6th Int Cong Asian Soc Toxicol. (仙台)	発表者：Yoshizawa K, Sasaki T, Kuro M, Uehara N, Takada H, Harauma A, Ohara N, Moriguchi T, Tsubura A. アラキドン酸は新生児期の神経系・視覚の発育に重要な脂肪酸であることが知られている。妊娠期・授乳期各3週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、3週齢時の子供ラットにMNUを投与し、網膜変性症の程度を基礎食群と比較した。その結果、アラキドン酸摂取群では網膜変性症を有意に抑制した。ヒトの網膜色素変性症は遺伝的に診断可能であることから、妊娠期・新生児期にアラキドン酸を摂取することにより、病態を阻止・遅延できる可能性がある。
36. Growth inhibitory mechanisms of human chorionic gonadotropin on MNU-induced female rat mammary carcinoma. (ポスター発表)	共	2012年4月	第101回日本病理学会. (東京)	発表者：冨貴司, 頼彦長, 木村彩子, 佐々木朋, 木下勇一, 義澤克彦, 螺良愛郎. MNUをラットに投与して乳癌を発生させ、その後ヒト絨毛性ゴナドトロピンを連日処置すると、乳癌の縮小効果が明らかであった。乳癌におけるホルモンレセプター発現の推移と卵巣の形態学的変化の関連性について発表した。
37. アラキドン酸のヒト乳癌細胞株移植動物での腫瘍増殖に対する影響.(ポスター発表)	共	2012年4月	第101回日本病理学会. (東京)	発表者：佐々木朋, 義澤克彦, 木村彩子, 三城弥範, 木下勇一, 上原範久, 冨貴司, 守口徹, 螺良愛郎. ヒト乳癌細胞株を移植したヌードマウスにアラキドン酸含有食を摂取させると、移植乳癌発育促進がみられた。In vitroでは乳癌細胞株発育促進作用はなかったことから、乳癌組織への直接作用よりは、血管新生に対する作用により腫瘍細胞の増殖活性が亢進した結果と考えられた。
38. ROS controls resveratrol-induced autophagy and apoptosis in human colon cancer cells.(口頭発表)	共	2012年4月	第101回日本病理学会. (東京)	発表者：三城弥範, 上原範久, 木下勇一, 佐々木朋, 木村彩子, 冨貴司, 義澤克彦, 螺良愛郎. レスベラトロールを大腸癌細胞に処置すると、オートファジーとアポトーシスが誘導された。それには活性酸素種の関与が示唆された。
39. Diffuse sclerosing variant of papillary thyroid carcinomaの1例.(ポスター発表)	共	2012年4月	第101回日本病理学会. (東京)	発表者：木下勇一, 鷹巢晃昌, 冨貴司, 義澤克彦, 上原範久, 木村彩子, 三城弥範, 佐々木朋, 螺良愛郎, 四方伸明. 乳頭状甲状腺癌の硬化型の発生は極めて稀である。その臨床病理学的な特徴と予後についての発表である。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
40. 全身転移をきたした肺肉腫様癌の1剖検例. (ポスター発表)	共	2012年4月	第101回日本病理学会. (東京)	発表者: 木村彩子, 塚 貴司, 三城弥範, 木下勇一, 義澤克彦, 佐々木朋, 上原範久, 螺良愛郎. 極めて稀な肺肉腫様癌が全身性に転移した症例を解剖し、その臨床データと組織学的特徴の関連性について発表した。
41. MNU誘発Lewisラット乳腺発癌における週齢と感受性の相関. (ポスター発表)	共	2012年2月	第28回日本毒性病理学会. (東京)	発表者: 佐々木朋, 義澤克彦, 木村彩子, 頼 彦長, 木下勇一, 三城弥範, 塚 貴司, 上原範久, 螺良愛郎. MNUは雌ラットに高率に乳癌を誘発する。MNUを0日齢、3週齢、4週齢に投与した際の乳癌発生率の違いを検討した。その結果、4週齢をピークに乳腺発癌の感受性が下がることが明らかとなった。MNU投与時の体内ホルモン量・乳腺組織形態の違いが乳腺発癌に影響している可能性が考えられた。
42. N-Ethyl-N-nitrosourea induces retinal photoreceptor damage in adult rats. (ポスター発表)	共	2012年2月	第28回日本毒性病理学会. (東京)	発表者: 義澤克彦, 佐々木朋, 上原範久, 畔 満喜, 木村彩子, 木下勇一, 三城弥範, 塚 貴司, 螺良愛郎. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素による眼球毒性の報告はない。マウスに単回投与することにより、視細胞アポトーシスが関与した網膜変性症を誘発することがわかった。アポトーシスカスケードに関する解析結果の発表である。
43. アラキドン酸の妊娠期・授乳期投与によるMNU誘発ラット乳癌発生への影響. (ポスター発表)	共	2012年12月	第101回日本病理学会. (東京)	発表者: 義澤克彦, 佐々木朋, 木村彩子, 三城弥範, 木下勇一, 上原範久, 塚 貴司, 守口 徹, 螺良愛郎. ルイス系ラットを交配させ、妊娠期・授乳期各3週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、7週齢の雌仔ラットにMNUを投与し、乳癌発生状況を基礎食群と比較した。その結果、発生率・個数・重量・組織像に両群に差は見られず、胎児期・新生児期のアラキドン酸摂取は乳癌発生に影響ないと考えられた。
44. Retinal degeneration induced in adult mice by a single intraperitoneal injection of N-ethyl-N-nitrosourea. (ポスター発表)	共	2011年6月	Soc Toxicol Pathol / 30th Annual Symposium Toxicol Pathol. (Colorado, USA)	発表者: Yoshizawa K, Sasaki T, Kuro M, Miki H, Kimura A, Uehara N, Yuri T, Tsubura A. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素による眼球毒性の報告はない。マウスに単回投与することにより、視細胞アポトーシスが関与した網膜変性症を誘発することがわかった。
45. Calpain inhibition restores basal autophagy and suppresses apoptosis on MNU-induced photoreceptor cell injury in mice. (ポスター発表)	共	2011年5月	Association for Research in Vision and Ophthalmology. (Fort Lauderdale, USA)	発表者: Kuro M, Yoshizawa K, Uehara N, Miki H, Takahashi K, Tsubura A. MNUマウス誘発網膜変性では、変性が進行するにつれて、生理的に存在する網膜外層のオートファジーが減少・消失する。カルパイン阻害剤を処置すると、MNU誘発網膜変性の程度が軽減され、網膜外層のオートファジーが保持されていた。オートファジーが細胞死に抑制的に作用したものと考えられる。
46. ヒト大腸癌細胞株におけるResveratrol誘導オートファジーの役割. (ポスター発表)	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 三城弥範, 上原範久, 畔 満喜, 佐々木朋, 木村彩子, 塚 貴司, 義澤克彦, 螺良愛郎. レスベラトロールは赤ワインに含有される抗酸化物質であり、様々な大腸癌細胞株を用いて、用量依存的な増殖抑制効果を示した。レスベラトロールを処置した癌細胞の細胞質にはオートファゴソームが多数確認され、これを介したアポトーシスにより、増殖抑制効果を示すことが明らかとなった。
47. HDAC阻害剤vorinostatのヒト乳癌細胞株に対するDNA損傷応答シグナルへの影響. (口頭発表)	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 上原範久, 三城弥範, 義澤克彦, 螺良愛郎. HDAC阻害剤であるVorinostatはp38 MAPキナーゼを介したアポトーシスにより乳癌細胞株増殖抑制作用を示す。その際のDNA損傷応答シグナルへの影響を検討した。
48. ヒト絨毛性ゴナドトロピンによるMNU誘発ラット乳癌の増殖抑制効果に関する検討. (ポスター発表)	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 塚 貴司, 頼 彦長, 木村彩子, 佐々木朋, 義澤克彦, 螺良愛郎. MNUをラットに投与して乳癌を発生させ、その後ヒト絨毛性ゴナドトロピンを連日処置すると、乳癌の縮小効果が明らかであった。ヒト絨毛性ゴナドトロピン投与は乳癌治療法としての可能性がある。
49. MNU誘発マウス網膜変性におけるカルパイン阻害剤によるオートファジーの保持と視細胞死の抑制. (ポスター発表)	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 畔 満喜, 義澤克彦, 上原範久, 頼 彦長, 兼松清果, 三城弥範, 木村彩子, 塚 貴司, 高橋寛二, 螺良愛郎. MNUマウス誘発網膜変性では、変性が進行するにつれて、生理的に存在する網膜外層のオートファジーが減少・消失する。カルパイン阻害剤を処置すると、MNU誘発網膜変性の程度が軽減され、網膜外層のオートファジーが保持されていた。オートファジーが細胞死に抑制的に作用したものと考えられる。
50. Sulforaphaneによるヌードマウス可移植性KPL-1ヒト乳癌細胞株の	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 兼松清果, 義澤克彦, 佐々木朋, 三城弥範, 畔 満喜, 頼 彦長, 木村彩子, 上原範久, 塚 貴司,

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
増殖抑制. (ポスター発表)				螺良愛郎. ブロッコリーの成分であるスルホラファンは、オートファジー誘導により乳癌細胞にアポトーシスを誘発する。ヌードマウスに乳癌細胞株を移植し、スルホラファンを投与すると、移植した乳癌が成長しないことが明らかとなった。スルホラファンはin vivoにおいても乳癌増殖抑制作用を示した。
51. エチルニトロソ尿素によるマウス網膜変性症の病理学的特徴. (ポスター発表)	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 義澤克彦, 畔 満喜, 佐々木朋, 三城弥範, 木村彩子, 上原範久, 坂 貴司, 螺良愛郎. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素による眼球毒性の報告はない。マウスに単回投与することにより、視細胞アポトーシスが関与した網膜変性症を誘発することがわかった。
52. エチルニトロソ尿素によるマウス角膜傷害の病理学的特徴. (ポスター発表)	共	2011年4月	第100回日本病理学会. (横浜)	発表者: 佐々木朋, 義澤克彦, 畔 満喜, 三城弥範, 木村彩子, 上原範久, 坂 貴司, 螺良愛郎. MNUと同じアルキル化剤であるにもかかわらず、エチルニトロソ尿素による眼球毒性の報告はない。マウスに単回投与することにより、角膜障害を誘発することがわかった。角膜幹細胞であるp63陽性細胞にアポトーシスを誘発することがメカニズムと考えられた。
53. Identification of tumor suppressive miRNAs induced by histone deacetylase inhibitor vorinostat in human breast cancer cells. (ポスター発表)	共	2011年11月	第34回日本分子生物学会. (横浜)	発表者: Uehara N, Yoshizawa K, Tsubura A. microRNAは様々な病態のバイオマーカーの一つとして研究されている。HDAC阻害剤であるVorinostatはp38 MAPキナーゼを介したアポトーシスにより乳癌細胞株増殖抑制作用をしめす。その際に変動するmicroRNAの種類について網羅的に解析した。
54. Vorinostat enhances protein stability of p27 through negative regulation of Skp2 and Cks1 in human breast cancer cells (ポスター発表)	共	2011年11月	第90回日本癌学会. (名古屋)	発表者: Uehara N, Yoshizawa K, Tsubura A. HDAC阻害剤であるVorinostatはp38 MAPキナーゼを介したアポトーシスにより乳癌細胞株増殖抑制作用をしめす。Vorinostat 投与により、乳癌細胞内でのSkp2, Cksの負の制御が関与したp27遺伝子の保持を向上させるわかった。
55. 若齢BALB/cマウスにみられたIntracranial Lipomatous Hamartomaの一例. (ポスター発表)	共	2011年1月	第27回日本毒性病理学会. (大阪)	発表者: 佐々木朋, 義澤克彦, 川中彩子, 桑田満喜, 兼松清果, 頼 彦長, 三城弥範, 坂 貴司, 上原範久, 螺良愛郎. 若齢マウスにみられる中枢神経系の自然発生病変は極めて稀である。BALB/cマウスにみられたIntracranial Lipomatous Hamartomaについて、その病理組織学的・免疫組織学的な特徴について発表した。マウスの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
56. 心筋症でみられる奇怪な心筋細胞 (bizarre cardiomyocyte) の形態学的解析. (口頭発表)	共	2010年9月	第42回日本臨床分子形態学会. (三島)	発表者: 桑田満喜, 坂 貴司, 義澤克彦, 高橋寛二, 螺良愛郎. ヒトの肥大型心筋症に観察された奇怪な心筋細胞に関して、免疫組織学的・電子顕微鏡学的な特徴について発表した。この細胞は増殖活性を示さず、細胞質内にオートファゴソームを多数有することから、心筋変性であると示唆された。
57. MNU誘発ラット臼歯部Malassez上皮遺残の推移. (口頭発表)	共	2010年9月	第42回日本臨床分子形態学会. (三島)	発表者: 川中彩子, 義澤克彦, 頼 彦長, 三城弥範, 桑田満喜, 兼松清果, 上原範久, 坂 貴司, 螺良愛郎. MNUを雄ラット3週齢時に投与すると、巨大なMalassez 上皮遺残が観察された。このMalassez 上皮遺残の免疫組織学的な特徴を正常の上皮遺残と比較した。巨大なMalassez 上皮遺残は特に幹細胞マーカーであるp63陽性を示した。歯原性腫瘍の発生との関連性が示唆された。
58. Requirement of p38 MAPK for a cell-death pathway triggered by vorinostat in MDA-MB-231 human breast cancer cells. (口頭発表)	共	2010年7月	第20回乳癌基礎研究会. (宮崎)	発表者: Uehara N, Kanematsu S, Miki H, Yoshizawa K, Tsubura A. HDAC阻害剤であるVorinostatは乳癌細胞株増殖抑制作用をしめす。そのメカニズムはp38 MAPキナーゼを介したアポトーシスであることを明らかにした。
59. Cerebromalacia with epilepsy and cortical blindness in an experimental Japanese macaque. (ポスター発表)	共	2010年6月	STP/IFSTP 2010 Joint Symposium. (Chicago, USA)	発表者: Yoshizawa K, Nakao K, Habiro M, Hayashi K, Kuwata M, Lai C, Kawanaka A, Nakamura K, Tsubura A. 予備飼育中に皮質盲ならびに癲癇症状を示した実験用ニホンザルの雌1例に、広範な大脳壊死が観察され、特に後頭葉の萎縮が観察された。実験用ニホンザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
60. Introducing the Japanese Society of Toxicologic Pathology (ポスター発表).	共	2010年6月	STP/IFSTP 2010 Joint Symposium. (Chicago, USA)	発表者: Yoshizawa K, Oishi Y, Imaida K, Nakae D, Tsuda H, Nakayama H, Shirai T, Konishi Y, Mitsumori K. 日本毒性病理学会 (JSTP) 国際委員長として、米国毒性病理学会において、JSTPの設立から現状の説明を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
61. MDA-MB-231ヒト乳癌細胞株におけるSulforaphaneによるオートファジー誘導とオートファジー阻害剤の効果. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	行い、学会誌(Journal of Toxicologic Pathology)や毒性病理専門家認定試験制度について紹介した。 発表者：兼松清果, 上原範久, 三城弥範, 桑田満喜, 頼彦長, 川中彩子, 義澤克彦, 塚貴司, 螺良愛郎. ブロッコリーの成分であるスルホラファンは、オートファジー誘導により乳癌細胞にアポトーシスを誘発することを明らかにした。オートファジー阻害剤を併用すると、腫瘍細胞増殖抑制効果が減弱した。
62. 大腸菌による両下肢壊死性筋膜炎の1剖検例. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：塚貴司, 兼松清果, 桑田満喜, 頼彦長, 三城弥範, 川中彩子, 義澤克彦, 鷹巣晃昌, 四方伸明, 螺良愛郎. 大腸菌による両下肢壊死性筋膜炎で死亡した症例の報告である。死因は敗血症ショックによる播種性血管内凝固であった。
63. MNU誘発形態異常Malassez 上皮遺残の病理組織学的検討. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：川中彩子, 義澤克彦, 頼彦長, 富永和也, 三城弥範, 桑田満喜, 兼松清果, 上原範久, 塚貴司, 田中昭男, 螺良愛郎. MNUを雄ラット3週齢時に投与すると、歯原性腫瘍が発生することが明らかとなった。その初期メカニズムを明らかにするために、経時的に歯・歯肉を病理組織学的に観察した。MNU 投与群では、12週齢時点で巨大なMalassez 上皮遺残が観察され、これが歯原性腫瘍の発生に結び付く可能性が示唆された。
64. Resveratrolのヒト大腸癌細胞株Colo201、HT-29に対する増殖抑制効果. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：城弥範, 上原範久, 桑田満喜, 兼松清果, 頼彦長, 川中彩子, 塚貴司, 義澤克彦, 螺良愛郎. レスベラトロールは赤ワインに含有される抗酸化物質であり、種々の腫瘍細胞での増殖抑制効果が知られている。大腸癌細胞株を用いて、用量依存的な増殖抑制効果を確認した。
65. MNUマウス誘発網膜変性におけるオートファジーの関与とその制御. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：桑田満喜, 上原範久, 義澤克彦, 頼彦長, 兼松清果, 三城弥範, 川中彩子, 塚貴司, 螺良愛郎. MNUマウス誘発網膜変性において、網膜でのオートファジー出現を経時的に観察した。網膜変性が進行するにつれて、生理的に存在する網膜外層のオートファジーが減少・消失した。
66. 皮質盲ならびに癲癇症状を示した実験用ニホンザルの一剖検例. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：義澤克彦, 桑田満喜, 頼彦長, 兼松清果, 三城弥範, 川中彩子, 上原範久, 塚貴司, 螺良愛郎. 予備飼育中の実験用ニホンザルの雌1例が皮質盲ならびに癲癇症状を示し、予後不良として病理解剖された。広範な大脳壊死が観察され、特に後頭葉の萎縮が顕著であった。後頭葉は視覚に関与する部位であり、後頭葉萎縮により盲目状態を示したことが明らかとなった。実験用ニホンザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
67. ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤による乳癌細胞アポトーシス誘導～p38活性化シグナル経路の解析～. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：上原範久, 兼松清果, 三城弥範, 義澤克彦, 螺良愛郎. HDAC阻害剤は主に血液がんの治療薬として欧米では使用されている。乳癌細胞株での増殖抑制効果とそのメカニズムについて検討した。p38活性化シグナル経路を介して、乳癌細胞株にアポトーシスを誘導することが明らかとなった。
68. MNU-induced mammary cancer after short-term estrogen and progesterone treatment in relation to fatty acid composition of serum phospholipids. (ポスター発表)	共	2010年4月	第99回日本病理学会. (東京)	発表者：頼彦長, 兼松清果, 桑田満喜, 三城弥範, 川中彩子, 義澤克彦, 螺良愛郎. MNUは雌ラットに高率に乳癌を誘発する。若齢ラットに人工的にエストロゲンとプロゲステロンを3週間投与することにより妊娠状態を作り出しMNUによる乳癌発生率と血清脂肪酸の変動との関連を検討した。
69. N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in mouse is independent of p53 gene. (ポスター発表)	共	2010年2月	第26回日本毒性病理学会. (金沢)	発表者：義澤克彦, 桑田満喜, 頼彦長, 兼松清果, 三城弥範, 川中彩子, 上原範久, 塚貴司, 螺良愛郎. p53遺伝子は細胞の生死にかかわる重要な遺伝子であり、MNU誘発の視細胞アポトーシスにどのような関係があるかについて、p53ノックアウトマウスを用いて検討した。ノックアウトマウスにMNUを投与した場合でもwild typeマウスと同様に視細胞死が誘発されたことから、MNU誘発の視細胞アポトーシスにはp53遺伝子は関与しないことが明らかとなった。
70. Short-term pregnancy hormone treatment on N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinogenesis in relation to serum fatty acid composition. (口頭発表)	共	2010年10月	HUGO-IABCR Cong 2010. (Biopolis, Singapore)	発表者：Tsubura A, Y-C Lai, Yoshizawa K, Yuri T, Uehara N, Kawanaka A, Sasaki T. MNUは雌ラットに高率に乳癌を誘発する。若齢ラットに人工的にエストロゲンとプロゲステロンを3週間投与することにより妊娠状態を作り出しMNUによる乳癌発生率と血清脂肪酸の変動との関連を検討した。
71. Sulforaphaneによる乳癌細胞増	共	2009年9月	第41回日本臨床分子形	発表者：兼松清果, 上原範久, 三城弥範, 桑田満喜,

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
殖抑制におけるアポトーシスとオートファジー誘導。(ポスター発表)			態学会。(神戸)	義澤克彦, 川中彩子, 坂貴司, 螺良愛郎. ブロッコリーの成分であるスルホラファンは抗酸化作用を持つだけでなく、種々の腫瘍細胞の増殖抑制効果が認められている。各種乳癌細胞株を用いて、増殖抑制効果を比較した。腫瘍細胞増殖抑制効果はオートファジー誘導により腫瘍細胞にアポトーシスを誘発することが関連することを明らかにした。
72. Short-term pregnancy hormones in young and old rats with MNU-induced mammary cancers. (ポスター発表)	共	2009年9月	第41回日本臨床分子形態学会。(神戸)	発表者: 頼彦長, 兼松清果, 桑田満喜, 三城弥範, 川中彩子, 義澤克彦, 螺良愛郎. MNUは雌ラットに高率に乳癌を誘発する。人工的にエストロジェンとプロゲステロンを3週間投与することにより妊娠状態を作ることができる。この状態を若齢ラットと加齢ラットに作成し、MNUによる乳癌発生率を比較した。若齢ラットでは乳癌発生率の低下が認められた。ヒトでは若い時期に妊娠経験がある場合、乳癌罹患率が低くなることが知られている。それを模倣した結果であった。
73. Ocular toxicity caused by paclitaxel in neonatal Sprague-Dawley rats. (ポスター発表)	共	2009年6月	Soc Toxicol Pathol Annual Symp. (Washington CC, USA)	発表者: Kuwata M, Yoshizawa K, Matsumura M, Takahashi K, Tsubura A. タキソールの眼障害に関しては白内障や角膜障害は報告があるものの、網膜への影響は明確でなかった。新生仔ラットおよびマウスにタキソールを投与することにより、網膜異形成の誘発に成功した。そのメカニズムについての発表である。
74. Paclitaxelの新生仔ラットに対する眼毒性の検討。(ポスター発表)	共	2009年4月	第113回日本眼科学会総会。(東京)	発表者: 桑田満喜, 義澤克彦, 高橋寛二, 螺良愛郎. タキソールは小児がんで使用されることはないが、母親が卵巣がん、非小細胞肺癌、乳がん、胃がん、子宮体がんなどの場合、母乳あるいは母体内にいるときに子供への曝露があり得る。タキソールの眼障害に関しては白内障や角膜障害は報告があるものの、網膜への影響は明確でなかった。新生仔ラットおよびマウスにタキソールを投与することにより、網膜異形成の誘発に成功した。
75. GALASラットの性周期に伴う卵巣の形態学的変化について一SDラットとの比較一。	共	2009年1月	第25回日本毒性病理学会。(浜松)	発表者: 能登貴久, 坪田健次郎, 竹内文乃, 小野美穂子, 梶川悟, 義澤克彦, 仲辻俊二, 大石裕司. GALASラットとSDラットにおける性周期に伴う卵巣の形態学的変化の違いについての発表である。GALASラットでは、しばしば性周期の乱れが観察された。ラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
76. カニクイザルの小腸にみられた杯細胞過形成及び筋層肥厚の1例。(ポスター発表)	共	2008年2月	第24回日本毒性病理学会。(名古屋)	発表者: 村上雄一, 岡崎欣正, 梶川悟, 藤平司郎, 能登貴久, 義澤克彦, 仲辻俊二, 大石裕司. 無処置のカニクイザルで観察された小腸にみられた杯細胞過形成・筋層肥厚の自然発生例について、臨床検査データと病理組織学的検査の報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
77. カニクイザルの卵巣にみられた腺管様嚢胞性病変の一例。(ポスター発表)	共	2008年2月	第24回日本毒性病理学会。(名古屋)	発表者: 岡崎欣正, 義澤克彦, 穴川明子, 村上雄一, 坪田健次郎, 松本正博, 仲辻俊二, 藤平司郎, 大石裕司. 無処置のカニクイザルで観察された卵巣にみられた腺管様嚢胞性病変の自然発生例について、臨床検査データと病理組織学的検査の報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
78. Reproductive lesions in female Harlan Sprague-Dawley rats following two-year oral treatment with dioxin and dioxin-like compounds. (ポスター発表)	共	2007年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Puerto Rico, USA)	発表者: Yoshizawa K, Brix AE, Sells DM, Jokinen MP, Wyde M, Walker NJ and Nyska A. TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はラットに投与すると、雌生殖器に発癌をはじめとした様々な変化が誘発される。卵巣の萎縮・炎症、子宮の炎症・扁平上皮過形成・扁平上皮乳頭腫・扁平上皮癌であった。それらの組織学的な特徴と化学物質による発生率の違いについて比較した。
79. Thirteen week toxicity study of indole-3-carbinol in B6C3F1 mice and Fischer 344 rats. (ポスター発表)	共	2007年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Puerto Rico, USA)	発表者: Wyde ME, Bordelon NR, Mann J, Hill G, Painter TJ, Yoshizawa K, Hebert CD, and Bucher JR, Nyska A. NTPで実施されたindole-3-carbinolのラット・マウス13週経口試験において小腸粘膜や腸間膜リンパ節の大型空胞の形成が観察された。電子顕微鏡学的に脂肪滴であり、薬剤とリンパ液の結合したものが大型の脂肪滴として認められたと判断した。
80. A critical comparison of murine pathology and epidemiological data of dioxins and PCBs. (ポスター発表)	共	2007年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Puerto Rico, USA)	発表者: Heatherly A, Yoshizawa K, Malarley DE, Walker NJ, and Nyska A. TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物は人においても疫学的に発がん性が示唆されている。NTPで実施されたTCDD, PCB126, PeCDFのラット癌原性試験結果と、これまでのヒトの疫学データを比較した。肝臓、口腔、心臓・血管系、免疫系、甲状腺、膵臓、肺

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
81. Pulmonary lesions in female Harlan SD rats following two-year oral treatment with dioxins. (ポスター発表)	共	2007年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Puerto Rico, USA)	<p>に関しては、ラット・ヒト共にターゲット臓器といえる。</p> <p>発表者：Yoshizawa K, Walker NJ, Miller RA, Brix AE, Sells DM, Jokinen MP, Wyde M and Nyska A. TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はラットに投与すると、肺に扁平上皮系腫瘍の発生が誘発される。その組織学的な特徴と化学物質による発生率の違いについて比較した。ダイオキシン化合物によりCYP1A1の肺での発現亢進が観察され、これが発癌メカニズムに関与する可能性が考えられた。</p>
82. カニクイザルの食道壁にみられた前腸嚢胞の1例。(ポスター発表)	共	2007年1月	第23回日本毒性病理学会。(東京)	<p>発表者：岡崎欣正, 松本正博, 穴川明子, 村上雄一, 坪田健次郎, 義澤克彦, 仲辻俊二, 藤平司郎, 大石裕司。</p> <p>無処置のカニクイザルで観察された食道の前腸嚢胞(組織奇形)の自然発生例について、臨床検査データと病理組織学的検査の報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。</p>
83. マウスにみられた薬物誘発性の心筋空胞化の病理学的特長。(ポスター発表)	共	2007年1月	第23回日本毒性病理学会。(東京)	<p>発表者：藤平司郎, 岡崎欣正, 穴川明子, 村上雄一, 坪田健次郎, 義澤克彦, 松本正博, 仲辻俊二, 大石裕司。</p> <p>ある薬剤のマウス毒性試験で観察された心筋細胞の空胞化に関する報告である。空胞化の本体に関しては、細胞内小器官の水腫・拡張、蛋白貯留、リン脂質貯留などが考えられるが、電子顕微鏡的観察が決め手となる。</p>
84. High incidence of duodenal hyperplastic lesions in DNA polymerase beta transgenic mice.	共	2006年7月	第33回日本トキシコロジー学会。(名古屋)	<p>発表者：Yoshizawa K, Sobol RW, Foley JF, Nyska A, Wilson SH, and Maronpot RM.</p> <p>DNAポリメラーゼβトランスジェニックマウスの病理学的特徴についての報告である。十二指腸過形成、骨腫瘍、白内障の発生が増加した。ヒトの胃・甲状腺腫瘍においてDNAポリメラーゼβの過剰発現がみられた。</p>
85. Thyroid follicular lesions induced by oral treatment for two years with 2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin and dioxin-like compounds in female Harlan Sprague-Dawley rats. (ポスター発表)	共	2006年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Vancouver, Canada)	<p>発表者：Yoshizawa K, Walker NJ, Jokinen MP, Brix AE, Sell DM, Nyska A, Wyde ME.</p> <p>TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はラットに投与すると、肝細胞障害と共に甲状腺肥大がみられる。甲状腺ホルモンと甲状腺の病理形態像を経時的に比較した報告である。</p>
86. 14-week oral toxicity study of Kava in F344 rats: Immunohistochemical analysis of expressions of hepatic cytochrome. (ポスター発表)	共	2006年1月	第22回日本毒性病理学会。(鹿児島)	<p>発表者：Yoshizawa K, Clayton NP, Kissling G, Burkha LT, Chan PC, and Nyska A.</p> <p>米国でサプリメントとして販売されているカバカバは肝臓障害の副作用が問題となっている。この抽出物をラットに14週間投与すると、肝臓重量の増加と肝臓の小葉中心性肥大が観察された。各種の肝臓薬物代謝酵素の誘導を免疫組織学的に検討した報告である。CYP2D1発現減少、CYP1A2, 2B1, 3A1発現増加が観察された。</p>
87. A case report of non-viral cytoplasmic inclusion body in hepatocytes of cynomolgus monkey. (ポスター発表)	共	2006年1月	第22回日本毒性病理学会。(鹿児島)	<p>発表者：Ikegami H, Okazaki Y, Matsumoto M, Nakatsuji S, Fujihira S, Yoshizawa K, Tsubota K, Murakami Y, and Oishi Y.</p> <p>無処置のカニクイザルで観察された非ウイルス性の肝細胞細胞質内好酸性封入体の自然発生例について、臨床検査データと病理組織学的検査・電子顕微鏡学的観察結果の報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。</p>
88. Atelia with gelatinous degeneration of bone marrow in a laboratory cynomolgus monkey. (ポスター発表)	共	2006年1月	第22回日本毒性病理学会。(鹿児島)	<p>発表者：Murakami Y, Okazaki Y, Matsumoto M, Nakatsuji S, Fujihira S, Yoshizawa K, Ikegami H, and Oishi Y.</p> <p>無処置のカニクイザルで観察された骨髄形成不全症の自然発生例について、臨床検査データと病理組織学的検査の報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。</p>
89. 3-aminobenzamideによるMNU誘発ラット網膜変性の抑制効果(ポスター発表)	共	2006年1月	第22回日本毒性病理学会。(鹿児島)	<p>発表者：三木克朗, 義澤克彦, 螺良愛郎</p> <p>MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤である3-アミノベンザミドによる病態抑制効果を明らかにした。眼底検査や網膜電位の変化とともに観察した結果の発表である。</p>
90. 中国産カニクイザルに認められた細頸嚢虫(胞状条虫)症の1例(口頭発表)	共	2005年9月	第142回日本獣医学会学術集会。(山口)	<p>発表者：坪田健次郎, 仲辻俊二, 穴川明子, 村上雄一, 池上仁, 岡崎欣正, 義澤克彦, 藤平司郎, 松本正博, 奥祐三郎, 大石裕司。</p> <p>カニクイザルの毒性試験で観察された細頸嚢虫(胞状条虫)症の症例報告である。日本での発生は報告されておらず、カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
91. Ischemic brain damage after ketamine and xylazine treatment in a young laboratory monkey (Macaca fascicularis). (ポスター発表)	共	2005年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Washington DC, USA)	発表者：Yoshizawa K, Oishi Y, Matsumoto M, and Nyska A. 塩酸ケタミン・キシラジンを投与直後に強直性痙攣を呈したカニクイザルについての症例報告である。脳壊死をきたしてけいれん発作を起こしたものと考えられた。これらの薬剤は通常サルに使用される麻酔薬であるが、このような事故が起こりうることを理解しておく必要がある。
92. Chemical-induced atrial thrombosis in rodent NTP studies: morphological aspects and potential mechanisms. (ポスター発表)	共	2005年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Washington DC, USA)	発表者：Yoshizawa K, Kissling GE, Johnson JA, and Nyska A. 化学物質投与により誘発される血栓症について、米国NTP試験の過去のデータを調査し、そのメカニズムについて考察した。500以上の化学物質の中で13物質がラット・マウスに血栓症を誘発し、溶血性貧血、心筋障害、多発性腫瘍、アミロイドーシス、その他の原因に分類された。げっ歯類の癌原性試験を評価する際に貴重な背景データと考えられる。
93. Mechanisms of exocrine pancreatic toxicity induced by oral treatment with 2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin in female Harlan Sprague-Dawley rats. (ポスター発表)	共	2005年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Washington DC, USA)	発表者：Yoshizawa K, Marsh T, Foley JF, Cai B, Peddada S, Walker NJ, and Nyska A. TCDDを2年間投与した癌原性試験において、膵臓毒性（腺房萎縮・空胞化・慢性活動性炎症・動脈炎）・発がん性（腺腫・腺癌）が観察された。そのメカニズムについて、14週、31週、53週、2年の組織標本を用いて検討した。腺房のアポトーシス、CYP1A1の発現増加、増殖活性増加、CCKAレセプター発現増加が31週で認められ、これらの変化が毒性・発がん性の初期変化と考えられた。
94. Gingival carcinogenicity in female Harlan Sprague-Dawley rats following two-year oral treatment with 2,3,7,8-tetrachlorodibenzo-p-dioxin and dioxin-like compounds. (ポスター発表)	共	2005年6月	Society of Toxicologic Pathology. (Washington DC, USA)	発表者：Yoshizawa K, Walker NJ, Jokinen MP, Brix AE, Sells DM, Marsh T, Wyde ME, Orzech D, Haseman JK, and Nyska A. TCDD, PCB126, PeCDF, PCB153を2年間投与した癌原性試験において、口腔発がん（扁平上皮癌）が観察された。その病理学的特徴と初期変化を含めたメカニズムについて、14週、31週、53週、2年の組織標本を用いて検討した。第三臼歯の歯肉ポケットの炎症と歯肉上皮過形成が初期病変として認められた。この部位には薬物代謝酵素が存在し、増殖活性が高いことが知られており、ダイオキシン化合物のターゲットと考えられる。
95. N-methyl-N-nitrosourea (MNU) 誘発眼病変の長期観察	共	2005年10月	第46回日本組織細胞化学会. (京都)	発表者：三木克朗, 塚本麗子, 義澤克彦, 松岡洋一郎, 四方伸明, 螺旋愛郎 MNU誘発のラット網膜変性症モデルについて、経時的にMNU投与後6か月まで病理組織学的に観察した。視細胞を中心とした網膜外層の変性・萎縮が特徴であったが、1ヶ月以降は網膜内層にも変化が広がり、最終的には網膜全層の萎縮に至った。
96. Mechanisms and disease control of N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in animals. (ポスター発表)	共	2004年2月	Jpn Soc Toxicol Pathol/ Int Fed Soc Toxicol Pathol. (神戸)	発表者：Yoshizawa K, Kiuchi K, Moriguchi K, Oishi Y, Shikata N, Tsubura A. ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の単独で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット・マウス網膜変性症モデルを紹介した。さらに、それを用いたいくつかの病態抑制実験例（カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤、DHA）について解説した。
97. Nicotinamide functionally rescues N-methyl-N-nitrosourea-induced retinopathy in rats. (ポスター発表)	共	2003年5月	Association for Research in Vision and Ophthalmology. (Fort Lauderdale, USA)	発表者：Kiuchi K, Kondo M, Ueno S, Moriguchi K, Yoshizawa K, Matsumura M, Tsubura A. MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を眼底検査や網膜電位の変化とともに観察した結果の発表である。
98. 食餌脂肪酸のMNU誘発ラット網膜変性症におよぼす影響(ポスター発表)	共	2003年4月	第92回日本病理学会. (福岡)	発表者：森口佳映, 坂貴司, 義澤克彦, 高田秀穂, 井上良計, 羽田尚彦, 螺旋愛郎 MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、食餌脂肪酸であるドコサヘキサエン酸(DHA)、エイコサペンタエン酸(EPA)、リノレイン酸、パルミチン酸、リノール酸による病態抑制効果を比較した。DHAやEPAによる網膜変性症抑制効果が強かった。
99. ニコチン酸アミドのラットMNU誘発網膜変性症に対する機能的・形態的抑制効果(ポスター発表)	共	2003年4月	第107回日本眼科学会. (福岡)	発表者：木内克治, 近藤峰生, 上野真治, 森口佳映, 義澤克彦, 螺旋愛郎, 松村美代 MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を眼底検査や網膜電位の変化とともに観察した結果の発表である。
100. 血尿を呈して急死したカニクイザル2症例の病理学的特徴. (ポスター発表)	共	2003年10月	第136回日本獣医学会. (青森)	発表者：坪田健次郎, 義澤克彦, 松本正博, 藤井恒雄, 岡崎欣正, 仲辻俊二, 藤平司郎, 大石裕司 無処置の若齢カニクイザル雌2例で血尿が観察され、予後不良により解剖した症例である。病理組織学的に壊死性膀胱炎が観察され、腎盂腎炎を併発して

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
101. ドコサヘキサエン酸によるニトロノメチル尿素誘発視神経アポトーシスの抑制(口頭発表)	共	2003年10月	第35回日本臨床電子顕微鏡学会。(東京)	いた。いずれの例も大腸菌と思われるコロニーによる化膿性膿瘍が観察され、上行性に感染が拡大したものと考えられた。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。 発表者：森口佳映，四方伸明，義澤克彦，上原範久，高田秀徳，羽田尚彦，螺良愛郎 MNU誘発のラット網膜変性症モデルを用いて、食餌脂肪酸であるドコサヘキサエン酸(DHA)による病態抑制効果を経時的に観察した。DHA投与による視細胞アポトーシスの発現抑制が明らかであった。
102. Morphologic characteristics of retinal degeneration induced by sodium iodate.	共	2003年1月	第19回日本毒性病理学会。(東京)	発表者：Yoshizawa K, Kiuchi K, Moriguchi K, Tsubota K, Matsumoto M, Nakatsuji S, Fujihira S, Oishi Y, Tsubura A. ヨウ素酸ナトリウム投与によるラット網膜変性症の形態学的特徴を、病理組織学的・免疫組織化学的に解明した。網膜色素上皮細胞に初期変化がみられ、次いで視細胞のアポトーシスに至る過程が明らかとなった。
103. Nicotinamide prevents N-methyl-N-nitrosourea induced photoreceptor cell apoptosis in rats and mice. (ポスター発表)	共	2002年5月	The Association for Research in Vision and Ophthalmology. (Orlando, USA)	発表者：Kiuchi K, Yoshizawa K, Shikata N, Tsubura A, and Matsumura M. MNU誘発のラット・マウス網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を明らかにし、ラット・マウスでの効果の違いを説明した。その分子メカニズムと網膜電位測定結果の発表である。
104. N-methyl-N-Nitrosourea誘発網膜変性症動物モデルのニコチン酸アミドによる制御。(ポスター発表)	共	2002年5月	第106回日本眼科学会。(仙台)	発表者：木内克治，義澤克彦，四方伸明，螺良愛郎，松村美代 MNU誘発のマウス網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を明らかにした。その分子メカニズムの発表である。
105. 卵巣明細胞腺癌のglycogen代謝からみた抗癌剤耐性機構。(口頭発表)	共	2002年3月	第91回日本病理学会。(横浜)	発表者：清塚康彦，葛幸治，辻田美樹，義澤克彦，螺良愛郎 卵巣明細胞腺癌はしばしば抗癌剤耐性が報告されている。明細胞腺癌には癌細胞細胞質に多量のグリコーゲンが存在することから、その細胞株を用いて、様々な抗がん剤の有効性とグリコーゲン代謝との関連性を明らかにした。
106. ニコチン酸アミドによるMNU誘発マウス視細胞アポトーシスの制御機序(ポスター発表)	共	2002年3月	第91回日本病理学会。(横浜)	発表者：木内克治，義澤克彦，四方伸明，仙崎英人，螺良愛郎 MNU誘発のマウス網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を明らかにした。その分子メカニズムと網膜電位測定結果の発表である。
107. 塩酸ケタミン投与直後に強直性痙攣を呈したカニクイザルの一例。(ポスター発表)	共	2002年1月	第18回日本毒性病理学会。(東京)	発表者：義澤克彦，大石裕司，坪田健次郎，仲辻俊二，松本正博，藤平司郎，螺良愛郎 塩酸ケタミンを投与直後に強直性痙攣を呈したカニクイザルについての症例報告である。塩酸ケタミン投与により、急激な血圧低下を誘発し、脳壊死をきたしてけいれん発作を起こしたものと考えられた。塩酸ケタミンは通常サルに使用される麻酔薬であるが、このような事故が起こりうることを理解しておく必要がある。
108. 週生期genistein暴露によるICRマウス乳腺病変への影響。(ポスター発表)	共	2001年4月	第90回日本病理学会。(東京)	発表者：四方伸明，義澤克彦，中川宏之，葛幸治，螺良愛郎 妊娠・授乳歴が乳癌発生率を低下させることは疫学的に知られている。妊娠・授乳ICRマウスにMNUを投与し、乳腺発がんの発生を非妊娠マウスに投与した場合と比較した。妊娠・授乳マウスではMNU誘発乳癌発生率を低下させた。
109. MNU誘発マウス網膜変性症に対するニコチンアミドの影響。(ポスター発表)	共	2001年4月	第90回日本病理学会。(東京)	発表者：木内克治，義澤克彦，葛幸治，中川宏之，螺良愛郎。 MNU誘発のマウス網膜変性症モデルを用いて、PARP阻害剤であるニコチンアミドによる病態抑制効果を明らかにした。ニコチンアミド投与によってもMNU投与による視細胞DNAアルキル化は生じていることから、DNA修復機構に関与することにより病態抑制効果を示したと考えられる。ヒトの網膜色素変性症の新規治療法になりうるだろう。
110. Light inhibition reduces MNU-induced photoreceptor apoptosis. (ポスター発表)	共	2001年4月	The Association for Research in Vision and Ophthalmology. (Orlando, USA)	発表者：Nambu H, Yamada H, Kiuchi K, Matsumura M, Yoshizawa K and Tsubura A. 網膜障害における光の影響は重要であることが疫学的にも知られており、ヒト網膜色素変性症患者ではサングラスの着用を指示される。MNU誘発のマウス網膜変性症モデルを用いて、暗視野で飼育した場合と普通の飼育環境下で飼育した場合の網膜変性症の病変程度を比較した。その結果、暗視野で飼育した場合には病変程度が減弱した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
111. CB6F1-Tg-rash2マウスを用いたchlorpromazineの26週間がん原性試験. (ポスター発表)	共	2001年1月	第17回日本毒性病理学会. (淡路島)	発表者: 坪田健次郎, 松本正博, 義澤克彦, 仲辻俊二, 藤平司郎, 大石裕司. rash2マウスを使用した短期癌原性試験のモニタリングとして向精神薬のクロロプロマジンの26週間混餌投与試験を実施した。その結果、クロロプロマジンには発がん性は認められなかった。この結果は2年間のマウス癌原性試験と同様の結果である。
112. Mechanism of retinal degeneration induced by phosphodiesterase inhibitor in rats. (口頭発表)	共	2000年6月	第27回日本トキシコロジー学会. (横浜)	発表者: Ishida H, Yoshizawa K, Takahashi Y, Fujii T, Oishi Y, Hashimoto M, and Ohara K. 藤沢薬品で開発中のインボテント治療薬であるPDE5阻害剤は、ラットで網膜変性症を誘発することを明らかにした。そのメカニズムは、網膜でのcGMPに作用することにより細胞内Caイオンを増加させることにより視細胞のアポトーシスを誘発することによって明らかとなった。眼底検査、網膜電図、病理学的検査結果の関連を明らかにした。
113. Pleural fluid accumulation induced by FR115092, a therapeutic agent for thrombocytopenia.	共	2000年6月	第27回日本トキシコロジー学会. (横浜)	発表者: Unami A, Terai T, Yoshizawa K, Miyayasu K, Hashimoto M, and Ohara K. 藤沢薬品で開発中の血小板減少症治療薬であるFR115092はラット毒性試験において、胸水貯留・肺水腫を高率に誘発する。この変化はサイトカインシンドロームによる肺からのタンパク成分漏出が原因であり、サイトカイン分泌抑制によりこの病態が抑制されることを明らかにした。
114. Caspase-3 inhibitor硝子体内投与によるN-methyl-N-nitrosourea誘発ラット網膜症の抑制.	共	2000年10月	第59回日本癌学会. (横浜)	発表者: 義澤克彦, 楊継紅, 植村芳子, 清塚康彦, 仙崎英人, 四方伸明, 螺良愛郎. MNU誘発のラット網膜変性症モデルのメカニズムにCaspaseファミリーの制御が関与していることから、その阻害剤を硝子体内に投与することによって、病態が抑制されるかを検証した。その結果、阻害剤投与により病態が抑制され、ヒトの網膜色素変性症の新規治療法になりうるだろう。
115. N-methyl-N-nitrosourea誘発ラット網膜変性症の視細胞アポトーシス誘導機構とその制御. (口頭発表)	共	2000年10月	第130回日本獣医学会. (大阪)	発表者: 義澤克彦, 大石裕司, 松本正博, 橋本正晴, 小原要, 三木弘彦, 螺良愛郎. ヒトの網膜色素変性症の簡単に確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット網膜変性症モデルの病態経過・メカニズムについての発表である。
116. IGSラットにみられた自然発生卵巣奇形腫の1例. (ポスター発表)	共	2000年1月	第16回日本毒性病理学会. (岐阜)	発表者: 坪田健次郎, 大石裕司, 義澤克彦, 松本正博, 仲辻俊二, 能登貴久, 藤平司郎, 橋本正晴. 6週齢の雌1例に卵巣の未熟奇形腫の症例を経験し、その臨床経過並びに病理組織学的な特徴を発表した。本例は日本での報告であり、SDラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
117. Mechanism of N-methyl-N-nitrosourea-induced photoreceptor cell apoptosis in SD rat: regulation of Bcl-2 family and caspase family (口頭発表).	共	1999年7月	第26回日本トキシコロジー学会. (札幌)	発表者: Yoshizawa K, Nambu H, Jihong Yang, Oishi Y, Hashimoto M, Ohara K, Miki H, and Tsubura A. ヒトの網膜色素変性症の簡単に確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット網膜変性症モデルの病態経過・メカニズムについての発表である。網膜視細胞のアポトーシスがBcl-2ファミリーとCaspaseファミリーの制御が関与していることを明らかにした。
118. 両心室内にムコール塞栓をみ、desferrioxamine投与をうけていた不応性貧血の一部検例. (ポスター発表)	共	1999年4月	第88回日本病理学会. (東京)	発表者: 仙崎英人, 水岡寛, 植村芳子, 義澤克彦, 上田恵, 螺良愛郎. 不応性貧血にて輸血を受け、鉄除去剤desferrioxamine投与を投与された患者に心室内にムコール塞栓を認めた。鉄不飽和状態のトランスフェリンの低下が感染症に関与していた。
119. 周産期Genistein暴露によるMNU誘発乳癌に対する影響.	共	1999年4月	第88回日本病理学会. (東京)	発表者: 楊継紅, 義澤克彦, 螺良愛郎. MNUは雌ラットに高率に乳癌を誘発する。周産期にエストロゲン作用を有するGenisteinを暴露することにより、乳癌発生率の低下を明らかにした。
120. Protective effects of pregnancy and lactation against N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary carcinoma in female Lewis rats. (口頭発表)	共	1999年11月	Int Symp. Biol of Cancer Prev and Treat. (Beijing, China)	発表者: 23. Yang J, Yoshizawa K, Nandi S, Tsubura A. 妊娠・授乳歴が乳癌発生率を低下させることは疫学的に知られている。妊娠・授乳ラットにMNUを投与し、乳腺発がんの発生を非妊娠ラットに投与した場合と比較した。妊娠・授乳ラットではMNU誘発乳癌発生率を低下させた。
121. MNU誘発新生仔白内障の病理組織学的解析. (口頭発表)	共	1999年1月	第15回日本毒性病理学会. (水戸)	発表者: 義澤克彦, 南部裕之, 楊継紅, 山本大悟, 藤平司郎, 大石裕司, 三木弘彦, 螺良愛郎. ニトロソ尿素を新生児ラットに投与すると、水晶体上皮細胞のアポトーシスが起る。このメカニズムは、水晶体上皮のDNAアルキル化と、Bcl-2ファミリーとCaspaseファミリーの制御が関与していることを明らかにした。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
122. MNU誘発ラット白内障の発生機序 ならびに臨界期。(口頭発表)	共	1998年4月	第18回比較眼科学会. (相模原)	発表者：義澤克彦，南部裕之，中島基麿，山本大吾，楊継紅，三木弘彦，螺良愛郎。 ニトロソ尿素を新生児ラットに投与すると、1週間後に肉眼的に検出可能な白内障を誘発できることを明らかにした。水晶体上皮細胞のアポトーシスにより水晶体線維が形成できずに白内障が生じることがわかった。また、ニトロソ尿素を20日齢に投与しても全く異常は見られず、硝子体内血管の存在と眼球内薬物濃度が関連することが推察された。新規の白内障実験動物モデルとして有用であると考えられた。
123. MNUによるマウス新生仔期脱毛誘 発の臨界期。(ポスター発表)	共	1998年4月	第87回日本病理学会. (広島)	発表者：義澤克彦，南部裕之，楊継紅，螺良愛郎。 ニトロソ尿素をマウスの新生仔期に投与すると、1週間後に全身性脱毛症を誘発することを明らかにした。この発症にはニトロソ尿素の投与時期の毛周期依存性があり、細胞増殖活性の高い発育期に投与した場合に毛母細胞特異的にアポトーシスを誘発することが原因であることを明らかにした。新規の脱毛症実験動物モデルとして有用であると考えられた。
124. 去勢ラットを長期投与した際に見 られた非腫瘍性・腫瘍性病変につ いて。(ポスター発表)	共	1998年2月	第14回日本毒性病理学 会.	発表者：能登貴久，大石裕司，義澤克彦，松本正博，坪田健次郎，藤平司郎，岩波黄葵，藤井登志之。 3週齢時に雌雄SD系ラットを去勢し、2年間飼育した際に観察された非腫瘍性・腫瘍性病変についての報告である。去勢ラットを2年間飼育したデータは皆無であり、実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
125. ビーグル犬の座骨神経に見られる Renaunt Body。(ポスター発表)	共	1997年1月	第14回日本毒性病理学 会.	発表者：能登貴久，牧野奈津代，義澤克彦，松本正博，坪田健次郎，藤平司郎，岩波黄葵，藤井登志之，大石裕司。 ビーグル犬の末梢神経の変化は若齢では報告がない。座骨神経に見られるRenaunt Bodyの特徴と発生頻度について報告した。ビーグル犬の背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
126. 卵巣摘出ラットでの長期飼育によ る内分泌・乳腺の腫瘍性病変につ いて。(口頭発表)	共	1996年1月	第14回日本毒性病理学 会.	発表者：義澤克彦，大石裕司，松本正博，鈴木淳也，牧野奈津代，藤平司郎，藤井登志之。 3週齢時に両側卵巣を摘出し2年間飼育した雌SD系ラットについて、臨床経過、内分泌・乳腺の組織像の特徴を発表した。両側卵巣によりエストロゲン値の低下が顕著であることから、卵巣を摘出していない正常雌ラットに比べて、体重増加抑制、乳腺組織の萎縮、乳腺腫瘍の発現低下、下垂体の去勢細胞出現、副腎臓質の過形成病変の増加が観察された。卵巣摘出ラットを2年間飼育したデータは皆無であり、実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
127. ビーグル犬に見られた先天性肝動 静脈フィステルの1例。(ポスタ ー発表)	共	1995年11月	第120回日本獣医学会. (東京)	発表者：義澤克彦，鈴木淳也，牧野奈津代，福原良文，藤平司郎，大石裕司，藤井登志之。 毒性試験で使用するビーグル犬は1歳以下と若い動物を使用するため、肝臓の自然発生病変は極めて稀である。7か月で状態悪化のため安楽死させた動物に先天性肝動静脈フィステルを認めた。この症例の臨床症状、血液検査、全身の病理組織学的検査結果について報告した。本例は世界での初めての報告であり、ビーグル犬の背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
128. 若齢ラットの三叉神経原発悪性神 経鞘腫の自然発生病例。(ポスタ ー発表)	共	1995年1月	第11回日本毒性病理学 会。(大阪)	発表者：義澤克彦，松本正博，牧野奈津代，鈴木淳也，大石裕司，藤平司郎，山内研司，岩波黄葵，藤井登志之。 老齢SD系ラットでは中枢神経系腫瘍の自然発生が報告されているが、若齢ラットでの自然発生は過去に報告がない。19週齢の症例を経験し、その臨床経過並びに病理組織学的な特徴を発表した。本例は世界での初めての報告であり、SDラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
129. Proliferating cell nuclear an tigen (PCNA) 免疫組織化学での 染色性の変動—各種の固定液・固 定時間・マイクロウェーブ加熱処 理による差—。(ポスター発表)	共	1995年1月	第11回日本毒性病理学 会。(大阪)	発表者：大石裕司，松本正博，義澤克彦，鈴木淳也，藤井登志之，高橋秀樹，螺良愛郎，森井外吉。 細胞の増殖活性をみる免疫組織学的方法は何種類かが報告され、それぞれ特徴がある。Proliferating cell nuclear antigen (PCNA) はS期の細胞の核を特異的に染色する抗体であるが、固定液の種類・固定時間によってその染色性が異なることを経験した。さらに、マイクロウェーブ加熱処理による抗原性の増強作用も明らかにした。最適の染色条件について公表した。
130. 長期間飼育したF344ラットでみら れた自然発生病変。(口頭発表)	共	1994年7月	第14回比較眼科学会. (東京)	発表者：藤平司郎，牧野奈津代，鈴木淳也，義澤克彦，大石裕司，藤井登志之。 藤沢薬品工業安全性研究所(現アステラス製薬)で過去に実施されたF344系ラットの毒性試験・薬理試験で観察された眼病変に関しての背景データの報告

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
131. 若齢ラットに認められた自然発生乳腺癌の1例。(ポスター発表)	共	1994年1月	第10回日本毒性病理学会。(広島)	である。F344系ラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。 発表者：大石裕司，義澤克彦，松本正博，鈴木淳也，牧野奈津代，藤平司郎，長谷喜久美，山内研司。 老齢SD系ラットでは乳癌の自然発生が高率にみられるが、若齢ラットでの乳癌発生は過去に報告がない。10週齢での乳癌の発生が症例を経験し、その臨床経過並びに病理組織学的な特徴を発表した。本例は日本での初めての報告であり、SD系ラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
132. カニクイザルに見られた眼病変の病理。(口頭発表)	共	1993年8月	第13回比較眼科学会。(大阪)	発表者：藤平司郎，松本正博，義澤克彦，大石裕司，藤井登志之。 藤沢薬品工業安全性研究所(現アステラス製薬)で過去に実施されたカニクイザルの毒性試験・薬理試験で観察された眼病変に関する背景データの報告である。カニクイザルの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
133. 高週齢ラットの血中ホルモン及びプロラクチン変動について。(口頭発表)	共	1993年7月	第20回日本毒科学会。(東京)	発表者：藤井登志之，松本正博，義澤克彦，大石裕司，勝木昭次。 老齢SD系ラットでは下垂体腫瘍(プロラクチン産生)による乳癌の自然発生が高率にみられることが知られている。26, 52, 78, 104週試験でのSD系ラットの下垂体ホルモン6種類の変動と下垂体・乳腺組織の病理組織学的変化の関連性についての発表である。SD系ラットの背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
134. 犬のCongenital Mesoblastic Nephroma。(ポスター発表)	共	1992年9月	第114回日本獣医学会。(東京)	発表者：義澤克彦，松本正博，藤平司郎，福原良文，大石裕司。 ビーグル犬を用いた毒性試験の対照群に観察された腎臓の自然発生報告である。腎芽腫の特殊な型である先天性間葉芽腎腫といわれ、線維芽細胞様の腫瘍細胞が増殖するのが特徴的である。本例は日本での初めての報告であり、ビーグル犬の背景データとして実験動物学的に貴重な報告と考えられる。
135. Doxorubicin投与ので高頻度に認められた心房内血栓症。(口頭発表)	共	1992年7月	日本疾患モデル学会。(大阪)	発表者：藤平司郎，山本隆雄，松本正博，義澤克彦，大石裕司，藤井登志之。 抗癌剤であるドキソルビシンを用いたマウスの薬理試験において、死亡例が多発した。その死亡原因を明らかにするために、全身の病理検査を実施した。その結果、高率に右心耳を中心に血栓症が観察された。ドキソルビシンによる心房内血栓症の報告はなく、本例が初めて報告と思われた。
136. 新規化合物により惹起された緑色肝。(口頭発表)	共	1991年1月	第7回日本毒性病理学会。(東京)	発表者：2. 松本正博，義澤克彦，中野一雄，大石裕司，藤平司郎，藤井登志之，谷本純一，藤井恒雄，宮尾康寛。 新規抗生物質のイヌを用いた4週間経口毒性試験において、肝臓が緑色になる現象を経験した。その形態学的特徴とメカニズムを解析した。肝臓の毛細胆管に一致して、緑色結晶物が病理組織学的に観察された。肝臓の薬物・代謝物計測により、この結晶物は胆汁にある薬物代謝物が結合しておこる現象であることが明らかとなった。血液化学的に肝障害を示唆する変化は見られず、肝臓に壊死などの器質的変化は認めないことから、肝臓の緑色化の毒性学的意義は乏しいと判断された。
137. 幼雛における鶏貧血因子と他ウィルスとの二重感染。(口頭発表)	共	1989年4月	第107回日本獣医学会。(つくば)	発表者：御領政信，林修次，義澤克彦，梅村孝司。 鶏貧血因子(現在ではウィルス)は幼雛に感染すると致死性の貧血を引き起こす。この致死率並びに病態の重篤性は、他のウィルスと混合感染により悪化する可能性がある。そこで、マレックウィルスやアデノウィルスとの混合感染により、病態が悪化するかを検討した。両ウィルスの混合感染により致死率並びに病態の重篤性が悪化した。
138. Caspase-3阻害剤によるrdマウス網膜変性症の抑制効果。(ポスター発表)	共		第60回日本癌学会。(横浜)	発表者：義澤克彦，木内克治，南部裕之，仙崎英人，清塚康彦，四方伸明，螺良愛郎 遺伝性網膜変性症マウスを用いて、Caspase3阻害剤の病態抑制効果を確認した。Caspase3阻害剤は遺伝性モデル、MNU誘発モデルともに病態を抑制し、ヒト網膜色素変性症の新規治療法として有用かもしれない。
139. コルヒチンによるDMN誘発マウス急性肝障害の修飾機序。(ポスター発表)	共		第88回日本病理学会。(東京)	発表者：水岡寛，四方伸明，義澤克彦，螺良愛郎。 ジメチルニトロアミンは急性肝障害をマウスに誘発し、そのメカニズムは肝薬物代謝酵素の活性化が関与することを明らかにした。チュプリン合成阻害剤であるコルヒチンを併用することにより、急性肝障害を増悪させた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
140. 新生仔ラットおよびマウスにおけるCisplatinの網膜障害。(ポスター発表)	共		第89回日本病理学会. (大阪)	発表者：楊継紅，義澤克彦，四方伸明，清塚康彦，仙崎英人，螺良愛郎。 シスプラチンは小児がんでも使用される抗がん剤である。シスプラチンの眼障害に関しては白内障や角膜障害は報告があるものの、網膜への影響は明確でなかった。新生仔ラットおよびマウスにシスプラチンを投与することにより、網膜異形成の誘発に成功した。
141. MNU誘発新生仔脱毛症モデルを用いたcepharanthinの脱毛遅延効果。(ポスター発表)	共		第27回アルカロイド研究会。(東京)	発表者：木内克治，義澤克彦，四方伸明，螺良愛郎 新規の脱毛症実験動物モデルであるMNU誘発マウスモデルを用いた治療実験である。円形脱毛症治療薬であるセファランチンを塗布すると、脱毛領域から脱毛が促進され、脱毛症治療効果が確認された。
3. 総説				
1. Book Review: Toxicologic Pathology, Nonclinical Safety Assessment, Edited by Sahota PS, Pop JA, Hardisty JF, and Gopinath C, CRC Press, 1,015 Pages, 158 Color Illustrations, 43 Tables, 2013. Hardback Version (ISBN 978-1-4398-7210-9; \$259.95) and Ebook Version (ISBN 978-1-4398-7212-3; \$181.97).	単	2014年10月	Journal of Toxicologic Pathology 27, 235.	毒性学・毒性病理学の新しいテキストが米国で発行され、その内容についてのレビュー報告である。
2. Proliferative and nonproliferative lesions of the rat and mouse mammary, Zymbal's, preputial, and clitoral glands.	共	2012年1月	Toxicologic Pathology 40, 7S-39S.	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND)の乳腺グループとして、げっ歯類の世界で統一した病理所見用語とクライテリアについて総説である。
3. Anticancer effects of garlic and garlic-derived compounds for breast cancer control.	共	2011年1月	Anti-cancer Agents in Medical Chemistry 11, 249-253.	ガーリック及びその由来成分は乳癌モデル動物の発生を抑制させる。さらに、各種ヒト乳癌細胞株においても、増殖抑制効果を発揮する。この作用は発癌剤代謝酵素の活性化、DNA付加体形成の抑制、活性酸素産生の抑制、細胞周期を休止させる作用、アポトーシス誘発作用により、増殖抑制効果を発揮することを解説した。さらに、ヒトの疫学的研究についても言及した。
4. Animal models of N-methyl-N-nitrosourea-induced mammary cancer and retinal degeneration with special emphasis on therapeutic trials.	共	2011年1月	In Vivo 25, 11-22.	ニトロソ尿素はラット・マウスに乳癌と網膜変性症を誘発する。この病態に関する形態学的変化・メカニズムについて概説した。さらにヒト乳癌発症とヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、これらのモデルとしてのMNU誘発ラット・マウスモデルの有用性について、様々な抑制実験の結果を用いて解説した。
5. Animal models for retinitis pigmentosa induced by MNU; disease progression, mechanisms and therapeutic trials.		2008年7月	Histology and Histopathology 25, 933-944.	ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の単独で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット・マウス網膜変性症モデルを病理組織学的な観点から紹介した。さらに、それを用いたいくつかの病態抑制実験例(カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤、各種脂肪酸)について解説した。
6. Hepatic Enzyme Induction: Histopathology.	共	2008年6月	Toxicologic Pathology 38, 776-795.	化学物質・薬剤の実験動物を用いた毒性試験では、肝臓の重量増加や肝細胞肥大がしばしば観察される。多くの場合、肝臓の薬物代謝酵素誘導に起因した生体の適応性変化と考えられ、毒性学的意義が乏しいと考えられる。しかし、肝臓逸脱酵素の上昇や他の肝臓毒性が共存する場合は毒性所見と判断すべきである。ラット・マウス・イヌ・サル毒性試験で肝臓の重量増加や肝細胞肥大が観察された場合、各動物での肝臓薬物酵素誘導試験を実施、科学的に構想誘導との関連性を確認すべきである。この論文は米国毒性病理学会肝細胞肥大ワーキンググループからの答申である。
7. Estrogen and progesterone treatment mimicking pregnancy for breast cancer protection.	共	2008年4月	In Vivo 22, 191-202	ヒトでは若い時期に妊娠経験がある場合乳癌発生率が低下する傾向がある。実験的にはエストロゲン・プロゲステロンを雌ラットに投与することにより人工的に妊娠ホルモン状態できる。MNU誘発乳癌発生に関する妊娠・授乳の影響について、若い時期(3か月令)に人工的に妊娠ホルモン状態した場合、加齢ラットに人工的に妊娠ホルモン状態した場合の違いについて解説した。ヒトと同様に若い時期の妊娠・授乳は乳腺発癌感受性を低下させ、そのメカニズムを解説した。
8. Estrogen and progesterone treatment mimicking pregnancy for breast cancer protection.	共	2008年4月	In Vivo 22, 191-202	ヒトでは若年の満期妊娠は、未産婦に比して生涯にわたる乳癌の発生を抑える。ラットでも若齢妊娠による乳癌抑制は認められ、エストロゲンとプロゲステロンの短期(3週;ラットの妊娠期間に相当)投与でも再現される。乳腺間質(脂肪織)の脂肪酸組成

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
9. Role of fatty acids in malignancy and visual impairment: Epidemiological evidence and experimental studies.	共	2008年2月	Histology and Histopathology 24, 223-234.	の変動に着目し、乳癌抑制効果の機序解明に取り組んだところ、経産乳腺ではリノール酸組成の有意の減少をみた。乳癌発生と脂肪酸との関連について解説した。
10. Multistep mouse mammary tumorigenesis through preneoplasia to neoplasia and acquisition of metastatic potential.		2008年1月	Medical Molecular Morphology 40, 9-17.	ヒトでは若年の満期妊娠は、未産婦に比して生涯にわたる乳癌の発生を抑える。ラットでも若齢妊娠による乳癌抑制は認められ、エストロゲンとプロゲステロンの短期(3週;ラットの妊娠期間に相当)投与でも再現される。乳腺間質(脂肪織)の脂肪酸組成の変動に着目し、乳癌抑制効果の機序解明に取り組んだところ、経産乳腺ではリノール酸組成の有意の減少をみた。乳癌発生と脂肪酸との関連について解説した。
11. A critical comparison of murine pathology and epidemiological data of TCDD, PCB126, and PeCDF.		2007年10月	Toxicologic Pathology 35, 865-879.	ヒトの乳腺組織はterminal duct-lobular unitから過形成、異型過形成、in situ乳癌、続いて浸潤性乳癌が発生する。マウスの自然発生乳癌はウイルス由来であり、このマルチステップを模倣する。本論文ではマウスの自然発生乳癌へ至るステップをヒトのそれと比較しながら解説し、リンパ節転移のメカニズムについて解説した。
12. Characteristics of N-methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in animals and application for the therapy of human retinitis pigmentosa.	共	2005年6月	日本眼科学会雑誌 109, 327-337.	TCDDをはじめとしたダイオキシン化合物はヒトにおいても疫学的に発がん性が示唆されている。NTPで実施されたTCDD, PCB126, PeCDFのラット癌原性試験結果と、これまでのヒトの疫学データ・事故によるヒトへの曝露データなどを比較した。肝臓、口腔、心臓・血管系、免疫系、甲状腺、膵臓、肺に関しては、ラット・ヒト共にターゲット臓器といえる。
13. Chemical-induced atrial thrombosis in NTP rodent studies.	共	2005年6月	Toxicologic Pathology 33, 517-532.	ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の単純で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発の動物網膜色素変性症モデル(マウス・ラット・ハムスター・スナグ・サル)を紹介した。さらに、網膜視細胞のアポトーシスに至る分子病理学的解析結果を開示した。さらにこのモデルを用いたいくつかの病態抑制実験例(カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤、各種脂肪酸)について解説した。今後、ヒト網膜色素変性症の治療法・著良薬開発のスクリーニング系として利用価値が高い。
14. Animal models for human cataract with special emphasis on N-methyl-N-nitrosourea-induced rat cataractogenesis.	共	2005年10月	Animal Eye Research 24, 1-8.	化学物質投与により誘発される血栓症について、米国NTP試験の過去のデータを調査し、そのメカニズムについて考察した。500以上の化学物質の中で13物質がラット・マウスに血栓症を誘発し、溶血性貧血、心筋障害、多発性腫瘍、アミロイドーシス、その他の原因に分類された。げっ歯類の癌原性試験を評価する際に貴重な背景データと考えられる。
15. N-Methyl-N-nitrosourea-induced retinal degeneration in animals.	共	2003年8月	Acta Histochemica Et Cytochemica. 36, 263-270.	失明の最大原因である白内障に関する内容である、水晶体の生理学・組織学を概説し、白内障の定義に加えて、その原因・疫学・性差・病変の種類・治療法・予防法を概説した。有用な白内障動物モデルであるニトロソ尿素誘発ラット白内障モデルの特徴(組織学的所見・電子顕微鏡学的所見・経時的な変化)について説明し、そのメカニズムについて解説した。
16. ヒト網膜色素変性症の動物モデルの確立とその病態制御.		2003年2月	電子顕微鏡 (Electron Microscopy), 38, 42-45.	ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の単純で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット・マウス網膜色素変性症モデルを紹介した。さらに、それを用いたいくつかの病態抑制実験例(カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤、各種脂肪酸)について解説した。
17. Phylogenetic and ontogenetic study of retinal lesions induced by N-methyl-N-nitrosourea in animals.	共	1998年6月	Animal Eye Research 17(3・4), 97-103.	ヒトの網膜色素変性症について、その疫学・臨床・治療方法を概説し、網膜色素変性症の単純で確実な動物モデルとして、ニトロソ尿素誘発のラット・マウス網膜色素変性症モデルを紹介した。さらに、それを用いたいくつかの病態抑制実験例(カスパーゼ阻害剤、PRAP阻害剤)について解説した。
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 一般 (研究代表者)	共	2016～2018年度		「キチン・キトサンオリゴ糖を用いた網膜色素変性症動物モデルでの新規治療法の確立」 カニやエビなどの甲殻類の甲羅・殻に含まれるキチン・キトサンの網膜神経保護作用について、我々が確立したMNU誘発網膜色素変性症ラットモデル(Yoshizawa et al, 2015)において検証する。さらにキチン・キトサンの併用投与を実施し、網膜の酸化傷害の発現を調整することにより網膜変性症モデルでの病態進行阻止効果を立証する。
2. 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 一般 (研究分担者)	共	2015～2017年度		「乳癌制御に効果的な海洋性キサントフィルの探索研究」 本研究は海洋性キサントフィル (カンタキサンチン・アスタキサンチン) の乳腺発癌・増殖に及ぼす有用性を探索し、食生活の地域差から考案されるヒト乳癌制御に効果的な海洋性キサントフィルを同定する。
3. 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 一般 (研究代表者)		2010～2012年度		「網膜色素変性症モデル動物におけるオートファジー機構の関与とその制御」 MNU 誘発網膜変性症モデルにおけるオートファジー (AP) を介する視細胞の死滅機構を明らかにした。すなわち、MNU 投与により時間経過とともに網膜でのLC3-II 発現減少とCaspase-3 発現増加を認めた。カルパイン阻害剤併用群ではα-spectrin 発現減少とLC3-II 発現増加に加え、形態学的に網膜障害が改善された。
4. 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 一般 (研究代表者)	共	2013～2015年度		「食品由来抗酸化物質を用いた網膜色素変性症動物モデルでの新規治療法の確立」 MNU 誘発ラット網膜色素変性症モデルを用いて、クルクミン及び緑茶抽出物を経口投与すると、網膜変性の程度が軽減された。そのメカニズムはMNU 投与による網膜視細胞の酸化ストレスを抑制することが関与した。
5. 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 一般 (研究分担者)	共	2012～2014年度		「アラキドン酸によるMNU 誘発網膜色素変性症動物モデルの病態制御とその分子機構」 妊娠期・授乳期各3 週間にアラキドン酸含有食を摂取させて、3 週齢時の子供ラットにMNU を投与し、網膜変性症の程度を基礎食群と比較した。その結果、アラキドン酸摂取群では網膜変性症を有意に抑制した。ヒトの網膜色素変性症は遺伝的に診断可能であり、妊娠期・新生児期にアラキドン酸を摂取することで病態を阻止・遅延できる可能性がある。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2012年4月 1日2016年3月31日	大阪府立大学生命環境学部 (応用動物科学B) 非常勤講師
2. 2010年2月2016年1月	日本毒性病理学会 (理事・国際委員長)
3. 2005年2月2008年1月	日本毒性病理学会 (試験委員)
4. 2011年4月～現在	日本獣医学会 (獣医病理学会) (学術評議員)
5. 2011年1月～現在	欧州毒性病理学会 (編集委員)
6. 2009年1月～現在	International Harmonization of Nomenclature and Diagnostic Criteria (INHAND) Global Editorial Steering Committee member
7. 2007年4月～現在	米国毒性病理学会 (副編集委員長)
8. 2007年4月～現在	米国毒性病理学会 (会員委員会)
9. 2005年4月～現在	日本病理学会 (学術評議員)
10. 2005年4月～現在	日本毒性学会 (評議員) 日本毒性学会 (生涯教育委員・編集委員)
12. 2005年4月～現在	日本毒性学会 (生涯教育委員)
13. 2005年4月～現在	日本毒性学会 (編集委員)
14. 2005年2月～現在	日本毒性病理学会 (評議員)
15. 2012年2月～現在	日本毒性病理学会 (国際委員・教育委員・編集委員・教科書改訂委員)
16. 2014年4月～現在	浜松毒性試験フォーラム (幹事)
17. 2008年4月～現在	堺市市政モニター
18. 2011年7月～現在	独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 (医薬品)
19. 2009年4月～現在	内閣府食品安全委員会 (農薬部会)